平成14～16年度

科学研究費補助金研究 基盤研究 (C)(2)

課題番号 14510615

Scientific Research C(2)
Allocation between Monbu Kagakusho and JSPS for Grants-in-Aid for Scientific Research
2002-2004

認知言語学的観点を取り入れた
格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程

研究報告書

The research for the semantic structure of the Japanese case particles
and their acquisition process: Cognitive linguistics perspective

研究代表者 森山新

（お茶の水女子大学）

MORIYAMA,Shin
(Ochanomizu University)

目　　次

第一部　序論
１．本研究プロジェクトの紹介 …… 1
２．格に対する Langacker の考え方 …… 2

第二部　格助詞の意味構造
３．日本語の格助詞の意味に対する体系的特徴づけ …… 7
４．格助詞デの意味構造 …… 26
５．格助詞デの意味構造と習得との関係 …… 37
６．格助詞ヲの意味構造 …… 51
７．認知主体の把握の仕方と格助詞ニの多義構造 …… 63
８．格助詞ニの意味構造 …… 74
９．格助詞ガの意味構造 …… 86
10．格助詞へ・カラ・マデの意味の認知言語学的特徴づけ …… 101
11．場所を表す格助詞デ・ニの意味・用法の違い …… 102
12．格助詞ヲ・ニの意味・用法の違い …… 112
13．格助詞ニ・へ、ヲ・カラ、ニ・マデ、ヲ・ガの意味・用法の違い …… 119

第三部　格助詞の習得過程
14．語彙習得と認知言語学 …… 123
15．韓国語母語話者の格助詞の習得過程 …… 125
16．多義語としての格助詞デの習得過程 …… 136

参考文献 …… 144

第一部　序論

本研究プロジェクトの紹介

森　山　　新（お茶の水女子大学）

本報告書は平成 14～16 年度科学研究費補助金に基づく基盤研究(C)(2)「認知言語学的観点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程」（課題番号 14510615　研究代表者：森山新）の研究の成果をまとめたものである。

３年間行われた日本語格助詞の認知言語学的な研究を総括し、日本語の格助詞全般を体系的に特徴づけるとともに、言語習得、とりわけ第二言語習得と関係について考察することに目的がある。

日本語の格助詞全般を体系的に特徴づけることが必要な理由について考えてみよう。

例えば(1)で、教える相手である「学生」はヲ格で表されているが、(2)では同じ意味役割を持つ学生がニ格で表されている。これは(2)では教える対象としての「日本語」が共起するようになったため、意味役割としてヲ格によりふさわしい「日本語」がヲ格となり、「学生」は格の重複を避けてニ格で表されるようになったためである。

(1)　学生たちを教える。日本語を教える。
(2)　学生たちに日本語を教える。

このようにそれぞれの格は個別の特徴づけも重要でありながらも、それだけでは不十分で、最終的に格の全体的な体系の中で特徴づけされてこそ、より正確な特徴づけが可能であると思われる。

本報告書では、まず第一部において格標識に関する認知言語学の考え方を Langacker の先行研究をもとに紹介する。その後第二部ではまず本研究成果を概観し、４～９稿において主要な格助詞であるデ、ヲ、ニ、ガの特徴づけ、10 稿においてその他の格助詞へ、カラ、マデを簡単に扱う。名詞と名詞をつなぐ格助詞であるノ、トなどは扱わない。さらに 11～13 稿では、意味的に類似している格助詞である、場所を表すニとデ、対象を表すニとヲ、目的地を表すへとニ、起点を表すカラとヲ、着点を表すマデとニ、対象を表すヲとガなどの違いについて考察する。14～16 稿では認知言語学が主張しているプロトタイプを中心とした放射状カテゴリー構造と習得（第二言語習得）との関係を考察する。

なお、本報告書は、平成 14 年から 16 年度に執筆された研究論文（巻末参考文献を参照）を中心にまとめられているが、３年間の研究の集大成として、全体に一貫性を持たせ、また分析や考察、記述に問題が見出された場合には、必要に応じ、加筆修正を加えた。

格に対する Langacker の考え方

森　山　　新（お茶の水女子大学）

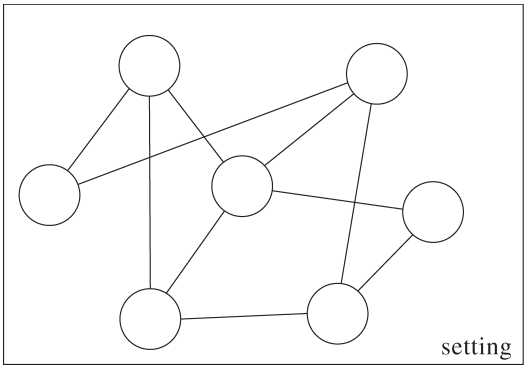
１．人間の外界認知と格標識

Langacker (1991 a、1991 b) では、格標識に関する認知言語学的な考えがまとめられている。これによれば、認知主体としての人間は、図１(a)のように人間をとりまく外界を様々なモノ同士の関係で構成されるネットワーク（interactive network）であると見る。しかし人間は普通、(b)(c)のように、その中の１つの動力連鎖(action chain)に関心を向け、その一部を切り取り（scope)、叙述（predication）の対象とし、(d)のようにそれをベース（base）として２つのモノ（参与者）とその関係をプロファイル（profile）する。

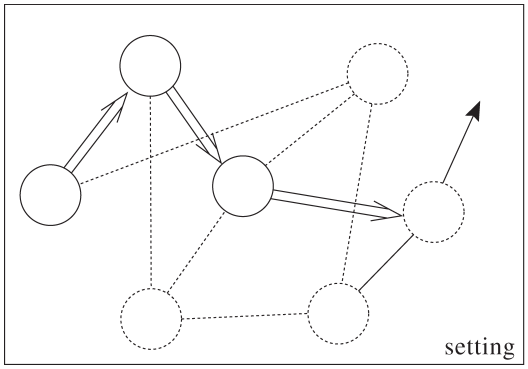
続いてこれが言語化される際には、図２のように、普通（無標の場合）はプロファイルされた動力連鎖の最上流の参与者が最大の際立ち（トラジェクター：tr）を持って認知され、言語化にあたっては主格で表され主語（S）となる。またプロファイルされた動力連鎖の最

図１　人間の外界認知のプロセス（Langacker 1991 b：215）

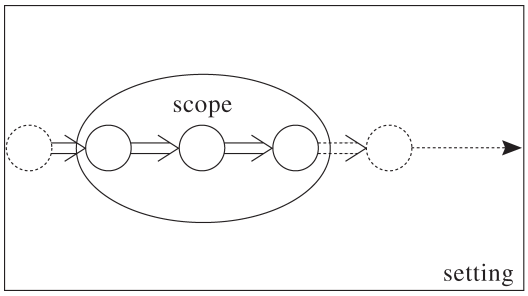
(a)　INTERACTIVE NETWORK



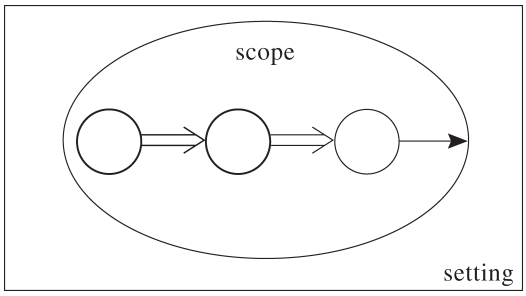
(b)　ACTION CHAIN



(c)　SCOPE OF PREDICATION



(d)　PROFILING



下流の参与者が第二の際立ち（ランドマーク：lm）を持って認知され、言語化の際には対格で表され目的語（O）となるとしている。

また図３のように、他動的な動力連鎖の原型的な参与者役割には、「動作主(AG)」、「道具INSTR)」、「主題（TH)」（被動作主（PAT)、移動者（MVR）など)、「経験者（EXPER)」などがあるが、これらはそれぞれ「源泉領域の能動的参与者」、「源泉領域の受動的参与者」、「目標領域の受動的参与者」、「目標領域の能動的参与者」と特徴づけることができる。それらは言語化に際して、各々、主格、具格、対格、与格で表されるとしている(Langacker 1991 a：327)。

図２　人間の外界認知の言語化のプロセス（Langacker 1991 b：217）

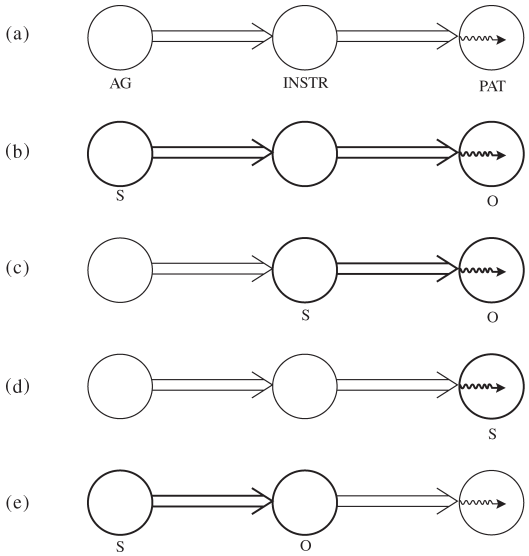
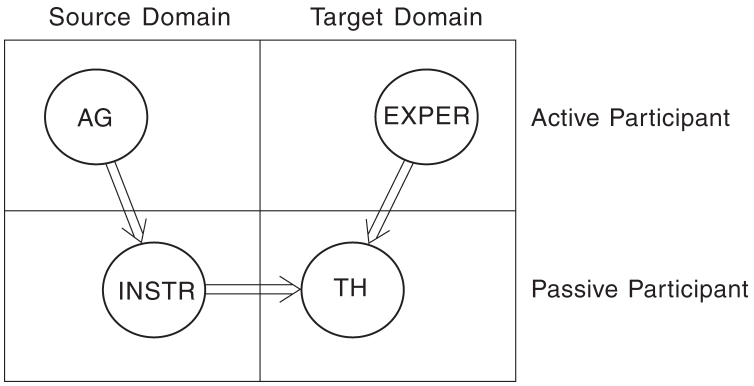


図３　他動性を持った動力連鎖とその参与者役割（Langacker 1991 a：327）



2．前景と背景

上述したように人間をとりまく外界は、無数のモノと関係で構成されたネットワークから成り立っているが、認知主体としての人間が、一度にそのすべてを認知することは不可能で、それら無数の事態の中の一部を切り取り(スコープ)、そこに注意を向ける。認知主体がスコープした範囲ではさらに、際立ちを与えられた「前景」とそれ以外の「背景」とに二分される。したがって格標識には前景の参与者を表す「前景格」と、背景を補足的に標示する格、すなわち「背景格」が存在する。舞台に例えれば、前景は舞台で演技する中心的な登場人物（役者）であり、背景は演技が行われる舞台や小道具、エキストラなどである。

3．他動性と主格・対格

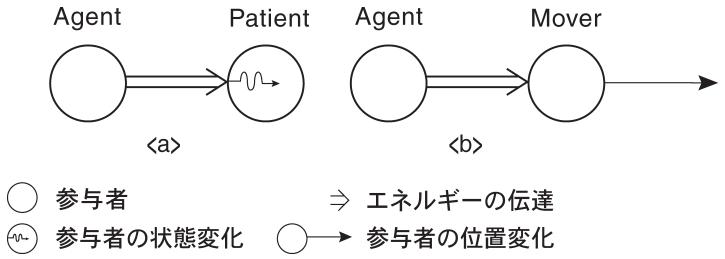
対格に関する認知言語学的研究としては、Langacker (1991 a，1991 b) が動詞の他動性と関係づけながら、プロトタイプとスキーマの両面から特徴づけを行っている。

Langacker によれば、認知主体としての人間は、図 1 ⒜のように人間をとりまく外的世界を様々なモノと関係のネットワークで構成されていると見る。しかし人間は普通、⒝⒞のように、その中の 1 つの動力連鎖 (action chain) に関心を向け、その一部を切り取り (scope)、叙述の対象とし、⒟のようにそれをベース（base）として 2 つの参与者（participants）とその関係をプロファイル（profile）する。1 つの参与者がプロファイルされることもあるが、その場合には他動的な動力連鎖ではなく、自動的な動力連鎖となる。

このようにプロファイルされた 2 つの参与者とその関係により、プロトタイプ的な他動性や主格、対格といったものが規定される。プロトタイプ的な他動性とは、「(動作主（agent : AG）から被動作主（patient : PAT）への）エネルギーの授受関係」である。プロトタイプ的な主格とは「他動的な事態における動作主を表す格」であり、プロトタイプ的な対格は「他動的事態における被動作主を表す格」である（図 4 ＜ a ＞参照)。例えば⑴の⒜⒝がプロトタイプ的な他動性及び主格、対格の例である。⒞⒟は移動主（mover : MVR）が対格となる場合で、プロトタイプに近い用法である。

⑴　a．John broke the window.

図 4　他動的事態のプロトタイプと主格・対格（河上 1996：118）



b．Mary melted the ice.

c．John drove the car.

d．Mary opened the window.

しかし、他動詞により表される事態が全てこのプロトタイプに合致するわけではない。以下の(2)、図５のような知覚経験や(3)のような対称的関係では順次他動性が薄れていき、プロトタイプからの拡張（extension）とみなされる。

(2)　a．John saw a strange man.

b．Mary heard the news.

(3)　a．Hilda resembles Marsha.

b．Line A intersects line B.

このように他動性にはプロトタイプ的なもの（break、hit など）を中心とした放射状カテゴリー構造が見られ、知覚経験（see、hear など）、対称的関係（resemble、intersect など）などの拡張例（非プロトタイプ）では順次他動性が薄れていき、それに伴って動作主（AG）や被動作主（PAT）という主格、対格のプロトタイプ的特性はスキーマ化していく。その結果、主格、対格すべてが共有するスキーマ的特性とは、「２つの参与者間の何らかの非対称的関係において、第一の際立ちが与えられた参与者（トラジェクター：tr）を表す格が主格、第二の際立ちが与えられた参与者（ランドマーク：lm）を表す格が対格[1]」といった抽象的なものとなるとしている。他動性、主格、対格の概念をまとめると(4)〜(6)のようになる。

(4)　他動性

プロトタイプ：動作主（AG）と被動作主（PAT）から成立するエネルギー授受関係

スキーマ：２つの参与者間にある何らかの非対称的関係

(5)　主格

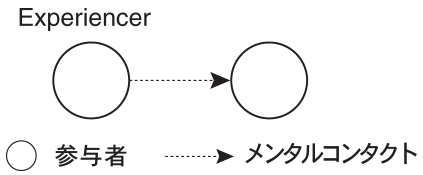
プロトタイプ：動作主（AG）を表す格、プロファイルされた非対称的関係の先頭

スキーマ：第一の際立ち（tr）を与えられた参与者を表す格

(6)　対格

プロトタイプ：被動作主（PAT）を表す格、プロファイルされた非対称的関係の末尾

図５　知覚経験の事態（河上 1996：120）



1　但し最も際立っているモノ（tr）が参与者である場合に限る。

スキーマ：第二の際立ち（lm）を与えられた参与者を表す格

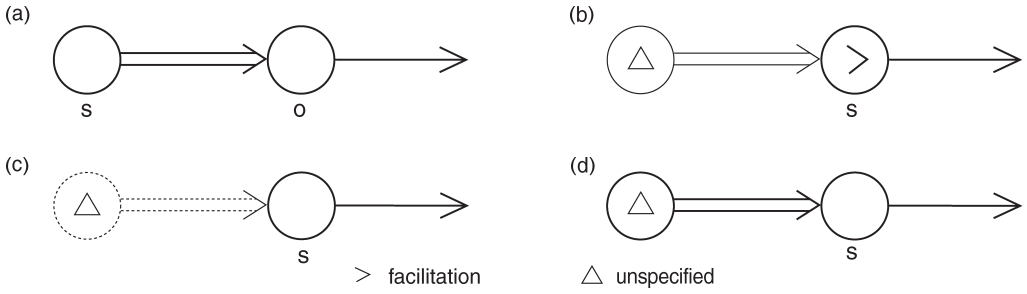
以上が無標の場合であるが、有標の場合には、認知主体の何らかの動機づけで、本来の tr より下位にある参与者（例えば動作対象）をより際立ったものとして解釈する場合がある。図 6 は⑺の 4 つの文の把握の仕方を図式化したものである。図で太線は profile された部分、細線は profile されていない部分、破線は scope からも外れた部分である。また S は主格で表された主語、O は対格で表された目的語を意味する。

⑺　a．He opened the door.　　b．The door opened very easily.

　　c．The door suddenly opened.　　d．The door was opened.

⑻が無標の把握である他動詞文で、動作主体が tr となり主格で表されている。これに対し⑼の中間構文、⑽の能格自動詞文では profile が移動、限定され、動作主体は profile から外れ、動作対象が profile された唯一の参与者（tr）となり主格で表されている。⑼と⑽の違いは、程度の問題であるが⑼では“very easily”に動作主体の影響を見ることができることから動作主体が scope 内に残っている点が⑽とは異なっている。⑾の他動詞受動文は動作主体が明示されてはいないが、⑻と同じように動力連鎖全体が profile され、それが動作主体の存在を前提とした「受動態」という表現になっている。しかしながら⑼や⑽同様、認知主体が動作対象をより際立ちのあるもの (tr) として解釈し、主格で表している点が⑻と異なっている。主格の意味役割も⑻では動作主体であるのに対し、⑼～⑾では動作対象である。しかしこれらの場合にも「第一の際立ち（tr）を与えられた参与者を表す格」といった主格のスキーマは共有されている。つまり⑼～⑾は認知主体の何らかの動機づけが反映した有標的な把握で、プロトタイプ（無標）である⑻から派生した拡張例であると解釈できる。

図 6　⑺の把握の図式化（Langacker 1991 a：335）



第二部　格助詞の意味構造

日本語の格助詞の意味に対する体系的特徴づけ

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．先行研究

近年、認知言語学の発達の中で、日本語格助詞に関する研究もその数を増している。その中で、菅井、森山の一連の研究は、それぞれの格助詞の意味を認知言語学的な観点から特徴づけ、最終的に体系化を試みているところに特徴がある。

菅井は、菅井（2002）でガ、菅井（1995、1998）でヲ、菅井（2000、2001、2002）でニ、菅井（1997）でデを扱っている。また菅井（2001 b）では、それらの研究をもとに暫定的な体系化が試みられている。

森山は、森山（2004 a）でガ、森山（2003 b）でヲ、森山（2004 b、2004 d）でニ、森山（2002 a、2004 c）でデを扱っている。また森山（2001 a）では場所の用法デ・ニ、森山（2000 a、2001 b）でヲ・ニが比較されている。

両者の見解には共通点もあるが、相違点も多い。菅井は具体的用例から意味・用法の分析を行っているが、Langacker の格に関する認知言語学的見解を直接援用してはいない。また Langacker の格に対する考えとの異同も見えてこない。もちろん Langacker の研究は英語など複数の言語の分析に基づいたものであるのに対し、菅井の研究は日本語を対象としたものであるので、両者に相違点があるのは当然である。しかし両者に類似性や関連性が見られないとすれば、日本語の特殊性にその原因を求めるか、もしくはいずれかの考察に問題を内包していると考えざるをえなくなる。

これに対し、森山は Langacker の見解をもとにそれを踏まえつつ日本語の格助詞研究を行っている。両者の見解にはもちろん相違点も存在しているが、両者で共通する部分も多い。このような立場は言語普遍性と個別性を同時に考えることになり、言語には普遍的な側面と個別的な側面とがあるとするこれまでの言語観に一致する。

したがって本稿では後者の立場を引き継ぎ、それにへ、カラ、マデを加えて格助詞全般に対して体系的な特徴づけを行うことにする。

2．格助詞ガ、ヲ、ニ、デの特徴づけ

2.1　2 通りの事態と 2 通りの把握

認知主体としての人間をとりまく外界には、大まかに分けると「プロセス的事態」と「存在論的事態」とが存在する（森山 2004 b）。前者は動力連鎖を伴った動的な事態であり、後者は動力連鎖のプロセスを伴わない静的な事態である。

一方このような外界の事態を人間が把握する際にも、それをプロセス的に把握する場合(プ

ロセス的把握）と、存在論的に把握する場合（存在論的把握）とがある。外界の事態とその把握とは基本的には一致する。すなわち「プロセス的事態」には「プロセス的把握」がなされ、「存在論的事態」には「存在論的把握」がなされるのが普通である。しかし日本語の場合には、所有、知覚、能力、感情など、何らかの経験的な事態を表す場合には、客観的な事態としてはプロセス的であるが、人間の主観的な把握としては存在論的把握がなされることがある（詳しくは**2.3.2**を参照）。

2.2　プロセス的事態

プロセス的事態における日本語の把握の仕方は、英語を中心に分析したLangackerの上記の考え方に基本的に一致すると思われる。すなわち他動的な動力連鎖の原型的な参与者役割には、「動作主(AG)」、「道具INSTR)」、「主題(TH)」（被動作主(PAT)、移動者(MVR)など)、「経験者（EXPER)」などがあるが、これらはそれぞれ「源泉領域の能動的参与者」、「源泉領域の受動的参与者」、「目標領域の受動的参与者」、「目標領域の能動的参与者」と特徴づけられ、言語化に際して、各々、主格（ガ格)、具格（デ格)、対格（ヲ格)、与格（ニ格)で表される。しかしながら詳しく見ると、デ格、ニ格は英語の場合といくつかの相違点が存在している。以下でそれを示す。

2.2.1　デ

上述したように人間をとりまく外界は、無数の事態から成り立っているが、認知主体としての人間が、一度にそのすべてを認知することは不可能で、それら無数の事態の中の一部を切り取り(スコープ)、そこに注意を向ける。認知主体がスコープした範囲ではさらに、際立ちを与えられた「前景」とそれ以外の「背景」とに二分される。この背景を補足的に標示する格、すなわち「背景格」がデ格である。背景格は、典型的な背景である「場所」をプロトタイプとするが、時間、道具、原因、様態なども事態成立の背景となることがあり、それらはデ格の拡張的用法となる。場所や時間が事態に対する現実的、空間的な背景を表示し、道具、原因、様態などは機能的な背景を表示する（森山2002 a、2004 c)。

デ：前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景（事態成立の基盤やさま）を補足的に示す。プロトタイプとしては背景としての場所を表す。時間、道具、原因、様態などの用法はプロトタイプとしての場所用法からの拡張的用法である。

日本語の場合には、道具などを表す具格は場所などと同様、背景格として位置づけられ、デで表されている。この点前景の参与者としての資格が与えられる英語とは異なっている。

2.2.2　ニ

詳しくは森山 (2004 b、2004 d) で詳述されているのでそれを参照願いたいが、日本語のニ格には、英語の与格とは異なり、「プロセス的把握」の用法と共に、「存在論的把握」の用法が存在する。表 1 のように日本語のニ格は「プロセス的把握」、「存在論的把握」があり、その双方に、認知主体の見え（perspective）との関わりの弱い「客観的把握」と、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」という把握の仕方が関与し、その結果 4 通りの用法が存在している。

プロセス的事態を客観的に把握した用法が「移動の着点」用法で⑶～⑸がこれに該当する。これに対し⑹～⑻はニ格の「移動の起点」用法である。さらに存在論的な事態を客観的に把握した用法が⑼～⑽のような「存在の位置関係」の用法で、ガ格とニ格とは「位置づけられる存在」と「位置づける場所」としての関係を持っている。⑾や⑿のような「経験の主体」用法は、客観的にはプロセス的な事態が、認知主体の見えとして主観的に把握された結果、存在論的に把握されたものである。

⑶　友だちに本をあげる。(授与の相手)
⑷　学生に日本語を教える。(動作の相手)
⑸　机の上に本を載せる。(移動の着点)
⑹　友だちに本をもらう。(授与の主体)
⑺　先生に日本語を教わる。(動作の主体)
⑻　台風に家を飛ばされる。(原因)
⑼　机の上に本がある。(位置)
⑽　10 時に家を出る。(時間)
⑾　私に子供がある。(所有の主体)
⑿　私には富士山が見える。(知覚の主体)

表 1　ニ格の意味用法のまとめ（森山　2004 b）

	把握の主観性	把握のしかた	ガ格に対するニ格の特徴
移動の着点	客観的把握	プロセス的（動的）	対峙性
移動の起点	主観的把握	プロセス的（動的）	対峙性　能動性
存在の位置関係	客観的把握	存在論的（静的）	対峙性
経験の主体	主観的把握	存在論的（静的）	対峙性　（能動性）

2.2.3　プロセス的把握の格体系

Langacker の格に対する認知言語学的考えと本稿でのこれまでの議論をもとに、プロセス的把握におけるガ格、ヲ格、ニ格をまとめてみたい。まずガ格は以下のように特徴づけられる。

ガ：表現の対象としてプロファイルされた部分の中で、最大の際立ちを与えられた参与者（tr）を表す。プロセス的把握ではプロファイルされた動力連鎖の最上流にある参与者が最大の際立ちが与えられるため、これがガ格で表される。プロトタイプとしては動作主を表す。

このガ格で表された動作主を起点とした動力連鎖の対象には、ガ格の動力圏内に存在する「(目標領域の) 受動的参与者 (被動作主や移動主など)」と、ガ格の動力圏外に存在する「(目標領域の) 能動的参与者 (経験主、受領主など)」とが存在する。前者を表す格標示がヲ格であり、後者を表す格標示がニ格となる。ニ格で表された参与者は「目標領域の能動的参与者」であるため、「源泉領域の能動的参与者」であるガ格と対峙している（図 3 参照)。

ヲ格で表された参与者は、受動的な参与者であることから、モノである場合をプロトタイプとするが、人である場合もある。また日本語の場合、人やモノだけでなく、場所や時をヲ格で表す場合もある。場所の場合には起点や経路を表し、時の場合には経過した時間を表す。いずれの場合にも、ガ格で表された参与者との関係は受動的である。

一方、ニ格で表される参与者は、ガ格で表された参与者同様、能動的な参与者であることから人である場合をプロトタイプとするが、場所、時である場合もある。人である場合は経験主、受領主・受益主、場所である場合は着点、時である場合は事態が行われた時を表す(場所・時の用法において、ヲ格が受動的であり、ニ格が能動的であるということについては森山（2003 b）を参照)。

また認知主体が外界の存在に付与する際立ちの面で言えば、トラジェクターであるガ格に対し、ヲ格、ニ格はそれぞれ第二の際立ちが与えられ、ランドマークとなる。前者はスコープされた動力連鎖における能動的参与者と受動的参与者間のランドマークであり、後者は事態を構成する源泉領域と目標領域の 2 つの能動的参与者間のランドマークである。

ヲ：ガ格で表された参与者（プロトタイプとしては動作主）を起点とした動力圏の内に存在する受動的な参与者を示す。プロトタイプとしては被動作主や移動主であるが、知覚、所有、能力、感情などの経験的な事態では経験対象である。

ニ：プロセス的把握では、ガ格で表された参与者（プロトタイプとしては動作主）を起点とした動力圏の外にある能動的な参与者を示す。

プロセス的事態を客観的に把握した「移動の着点」用法（(3)〜(5)）では、ニ格はガ格に対し、「対峙性」を有している。ここで対峙性とは、他の参与者に対して従属せず、主体性を持って対峙する性質をさすが、具体的にはニ格が「目標領域の能動的参与者」であり、ガ格で表された「源泉領域の能動的参与者」に対しても従属せず、主体性を持って対峙する性格のことをさしている。

これに対しニ格の「移動の起点」用法（(6)〜(8)）は、認知主体のある動機づけにより、動作主以外の参与者に焦点が移動している点で、プロセス的事態をより主観的に把握した用法である。ここではニ格は「源泉領域の能動的参与者」であり、「目標領域の参与者」であるガ格に対し、対峙性と共に能動性を有している。

2.3　存在論的把握

2.3.1　存在論的事態の存在論的把握

存在論的事態を存在論的に把握する場合には、存在するモノがある場所に位置づけられる関係になる。前者（モノ）がガ格、後者（場所）がニ格で表される。この際、ガ格で表されたモノには最大の際立ちが与えられトラジェクターとなっているのに対し、ニ格で表された場所は第二の際立ちが与えられランドマークになっている。存在論的把握の場合には動力連鎖が存在しないので、動力連鎖に基づく際立ちの関係（動力連鎖の最上流に置かれたものに最大の際立ちが与えられたり、最下流に置かれたものに第二の際立ちが与えられたりすること）は存在せず、動力連鎖におけるランドマークを表すヲ格が用いられることもない。その代わりに存在するモノに最大の際立ちが与えられガ格で表され、存在する場所に第二の際立ちが与えられニ格となる。

ガ：存在論的把握では、ニ格で表される場所に位置づけられる存在物（モノ）を表す。
ニ：存在論的把握では、ガ格で表される存在物（モノ）が位置づけられる場所を表す。

ニはガと同様、プロセス的把握、存在論的把握の双方において用いられる。ガではプロセス的把握、存在論的把握において「表現の対象としてプロファイルされた部分の中で、最大の際立ちを与えられた参与者(tr)を表す」というスキーマを共有しているが、ニの場合は「ガ格で表される参与者に対峙する」というスキーマを共有している。プロセス的把握ではプロセス的、動的な対峙性を有しているが、存在論的把握では存在論的、静的な対峙性を有している（森山（2004 d)。図 4 は存在論的把握におけるガ格とニ格の関係を示す。破線はガ格で表された存在がニ格で表された場所に位置づけられる心的プロセスを表し、点線は 2 つの円で示された存在が同一のものであることを示している。

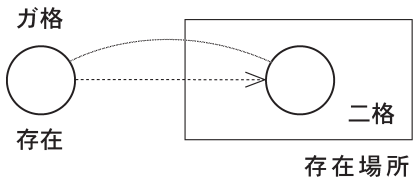


図 4　存在論的把握におけるガ格とニ格

2.3.2　プロセス的事態の存在論的把握

日本語で経験的事態は、客観的にはプロセス的事態であるが、認知主体により存在論的に把握されることがある。図 5 のように、プロセス的把握がなされた場合には、最大の際立ちが与えられる経験主体はガ格、第二の際立ちが与えられる経験対象はヲ格で表されるが、存在論的把握がなされた場合には経験の対象としての存在に最大の際立ちが与えられ、ガ格で表され、経験の主体である人間（自分自身）は認知されず格標示されない（例えば「(私は)弟がいる。」）か、その存在が位置づけられる内的な場（認知的ドメイン）として場所的に意味づけされ、第二の際立ちが与えられ、ニ格で示される（例えば「私には弟がいる。」）。

さらに存在論的な事態を客観的に把握した「存在の位置関係」用法（(9)〜(10)）では、ニ格はガ格を位置づける場所としての役目を果たし、ガ格とニ格とは「位置づけられる存在」と「位置づける場所」としての対峙性を持っている。

またプロセス的事態を存在論的把握した「経験の主体」用法（(11)や(12)）は、「存在の位置関係」と同様、ニ格はガ格に対して対峙性を有している。またこの用法は本来ニ格で表された人のガ格で表されたモノへの経験的な事態であり、その意味ではニ格で表された人はガ格で表されたモノに対し能動性を有している（図 5 参照）。

このように事態の存在論的把握には、存在論的事態である場合と、プロセス的事態である場合とが存在するが、両者において、ガ格が「存在（モノ）」、ニ格が「存在を位置づける場所」という意味役割を表す点は共通している。また際立ちの関係、すなわち最大の際立ちが与えられた前者がガ格、第二の際立ちが与えられた後者がニ格で表されることも共通している。両者の相違点は、それが本来存在論的事態であるのかプロセス的事態であるのかという点と、ニが表示する場所が具体的な場所であるのか、経験主体としての人間の内面に形成される内的な場（認知的ドメイン）であるのかといった点、さらにニ格で表された存在がガ格で表された存在に能動性を有しているかといった点である。

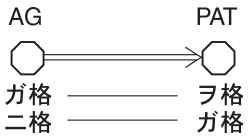


図 5　経験的事態の格表示

注）例えば「彼が娘を持つ（こと）」では、動作主がガ格、被動作主がヲ格で表されるが、「彼には娘がある」では、動作主がニ格、被動作主がガ格で表される。

3．まとめ

日本語の格助詞であるガ、ヲ、ニ、デ、へ、カラ、マデの体系的な特徴づけをまとめると以下のようになる。

ガ：プロセス的把握ではプロファイルされた動力連鎖の最上流にあって、最大の際立ちが与えられた参与者を表す。プロトタイプとしては動作主を表す。存在論的把握では、ニ格で表される場所に位置づけられる存在物（モノ）を表す。両者は「表現の対象としてプロファイルされた部分の中で、最大の際立ちを与えられた参与者（tr）」というスキーマを共有している。

ヲ：ガ格で表された参与者（プロトタイプとしては動作主）を起点とした動力圏の内に存在する受動的な参与者を示す。プロトタイプとしては被動作主（PAT）や移動主（MVR）であるが、知覚、所有、能力、感情などの経験的な事態では経験対象である。

ニ：プロセス的把握では、ガ格で表された参与者（プロトタイプとしては動作主）を起点とした動力圏の外にある自立的で能動的な参与者を示す。存在論的把握では、ガ格で表される存在物（モノ）が位置づけられる場所を表す。両者は「ガ格で表された参与者に対峙する」というスキーマを共有している。

デ：前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景（事態成立の基盤やさま）を補足的に示す。プロトタイプとしては背景としての場所を表す。時間、道具、原因、様態などの用法はプロトタイプとしての場所用法からの拡張的用法である。

へ：プロセス的把握において、移動のプロセスをベースとし、その経路をプロファイルする。

カラ・マデ：プロセス的把握で、カラは起点、マデは着点をプロファイルする。

ヲはプロセス的把握に用いられるのに対し、ガ、ニはプロセス的把握、存在論的把握のいずれにも用いられる。デは事態が展開する背景を補足的に示す格標識である。またへ、カラ、マデはプロセス的事態において、移動のプロセスをベースに、その一部(経路、起点、着点)がプロファイルされたものであると考えることができる。

最後に本稿で明らかにした日本語の格体系の特徴づけを、Langacker が示した英語の格体系と比較してみたい。

池上（1981）によれば、英語はいわゆる「スル型言語」で、事態を参与者とそれらの間の動力連鎖として動的に表現する傾向が強いが、日本語は「ナル型言語」で、事態をその場に生起するものとして静的に表現する傾向がある。本稿の用語で言い換えるならば、英語は「プロセス的把握型」、日本語は「存在論的把握型」ということである。ただしこれは相対的な特徴づけであり、ここで言いたいことは本稿の議論ですでに明らかなように、英語ではプロセ

ス的把握を主とするのに対し、日本語ではプロセス的な事態にはプロセス的把握を行うが、存在論的な事態には存在論的な把握をするということである。さらにプロセス的な事態と存在論的な事態の境界線に位置する経験的な事態に対して、英語ではプロセス的な把握、日本語では存在論的な把握をするということにも、こうした日英両語の事態把握の仕方の違いが現れている。

このようなことから Langacker が示した英語の格体系は基本的にプロセス的把握での主格（ガ格)、対格（ヲ格)、与格（ニ格）を中心とした格体系となっている（図 3 を参照)。

これに対し、本稿が明らかにした日本語の格体系では、プロセス的把握と存在論的把握とが用いられ、それゆえ日本語の格体系はプロセス的把握でのガ、ヲ、ニなどの格体系と、存在論的把握でのガ、ニの格体系とが共存している。その結果ガ格、ニ格にはプロセス的把握での意味用法と存在論的把握での意味用法の 2 つが存在することになり、それらはスキーマを共有しながら一つのカテゴリーとしてまとまっている。

また英語では、具格のデが表す道具は参与者の資格が与えられ、主格、対格、与格とともに前景格の仲間入りをし、背景格としての場所格とは区別されている。これに対し日本語では、参与者の資格を与えられるのは主格、対格、与格に限られ、具格は場所格と同じ背景格のほうに追いやられる。道具というのはモノであることから前景の参与者としてとらえることもできようが、事態成立に中心的な役割を担うことはできず、機能的には背景的である。このように前景（参与者）と背景との境界線に位置する具格は、英語では参与者のほうにカテゴリー化され、日本語では場所と同じく背景のほうにカテゴリー化される。これも英語が「参与者が何をスルか」を言語化しやすい「スル型言語」であり、日本語が「その場所に何がナルか」を言語化しやすい「ナル型言語」であることの反映であると考えられる。

以上本稿では日本語の格の体系的な特徴づけを行ってきたが、同時に英語の格体系との違いも明らかになった。

Systematic Characterization of Japanese Cases

MORIYAMA, Shin (Ochanomizu University)

〈abstract〉

This paper summarized precedent researches about Japanese case particles (*ga, wo, ni, de, e, kara, made*) from cognitive linguistics perspective, and characterized them systematically. Moreover, it discussed differences between semantically similar particles *e* and *ni*, *wo* and *kara* as starting point markers, *ni* and *made* as goal markers.

In Japanese, events are grasped not only as process but also as ontology. In the former, systematic characterization of Japanese case particles resembles that of English, which Langacker clarified, while a different can be found in the latter.

This difference is related to the theory that English is the "*suru* type language" and Japanese "*naru* type language".

1. Previous Studies

Recently, the number of studies about Japanese case markers has increased in the course of the development of cognitive linguistics. Out of them, the series of studies by Sugai and Moriyama are notable since they characterize each case marker from the viewpoint of cognitive linguistics and try to explain all of the case markers systematically.

Sugai studied markers *ga* (2002), *wo* (1995, 1998), *ni* (2000, 2001, 2002), and *de* (1997). Sugai (2001b) made an attempt at the temporary systematization of them based on these studies.

Moriyama studied *ga* (2004a), *wo* (2003b), *ni* (2004b, 2004d), *de* (2002a, 2004c). Moriyama (2001a) compared *de* with *ni*, the markers of place, while in Moriyama (2000a, 2001b), *wo* was compared with *ni*.

Their views have some points in common, yet many differences remain. Sugai analyzed the meanings and usages of markers using some concrete examples, but did not directly refer to Langacker's view of cognitive linguistics. Additionally, the analysis seems not to allow an easy comparison with Langacker's views. It is expected that there should be differences in their views due to the fact that Langacker analyzed many languages including English, while the subject of Sugai's study was Japanese. If the similarity or the relationship between these studies cannot be observed, we are forced to

think that it's due to the uniqueness of Japanese or that either one's study must involve some problems.

On the other hand, Moriyama carried out the study of Japanese case markers having its basis in Langacker's view. Though, there exist some differences in their views, many common points also could be observed. This viewpoint covers, both linguistic universality and discreteness simultaneously, and agrees with the traditional view of language.

Taking over later studies, the current work is a characterization of the whole system of Japanese case markers adding *e, kara*, and *made*.

2. Characterization of Japanese Case Markers *ga, wo, ni, de*

2.1 Two events and two perceptions

The outer environment human beings face as cognizers could be roughly divided into two events: "processual events" and "ontological events" (Moriyama 2004b). The former is a dynamic event with an action chain and the latter is a static event without the process of an action chain.

At the same time when human beings perceive these events, there are two types of perceptions: "processual perception" and "ontological perception". Events of the outer environment basically would agree with their perceptions. That is, generally "processual events" are perceived "processually" and "ontological events" are perceived "ontologically". In the case of Japanese, some experiential situations like possession, perception, ability or emotion are expressed processually from the objective view, however; there are occasions when they are perceived ontologically from the human subjective view. (See 2.3.2 in detail)

2.2 Processual event

The way Japanese perceive a processual event seems to coincide with Langacker's view based mainly on the analysis of English, which was mentioned above. "Agent (AG)", "instrument (INSTR)", "theme (TH)" (patient (PAT) and mover (MVR) etc.,) and "experiencer (EXPER)" could serve the roles as prototypical participants for a transitive action chain. They are characterized as "an active participant of the source domain", "a passive participant of the source domain", "a passive participant of the target domain" and "an active participant of the target domain" respectively. When verbalized, each are expressed with a nominative case marker *ga*, an instrumental case marker

de, an accusative case marker *wo*, or a dative case marker *ni*. However, a close observation reveals some clear-cut distinctions between Japanese instrumental *de* and dative *ni*, and English cases. The following study will indicate these distinctions.

2.2.1 Marker *de*

As mentioned above, the outer environment human beings face consists of innumerable events. Since it is impossible for human beings as cognizers to perceive them all simultaneously, we focus on a part of these events and pay attention to it. The cognizer's range of scope is divided into two: prominent "foreground" and "background". "Background case" may be additionally referred to as marker *de*. The prototype of background case is "place", which is the typical background. The extensional usage of *de*, however, could be possible when time, instrument, cause and state become the background events. Place and time show the real and spatial background events, and instrument, cause and state show the functional background (Moriyama 2002a, 2004c).

De: Against the whole action chain, which constructs foreground, *de* may additionally represent a certain background which is the basis or situation of events. Its prototype is placed as a background. The usages of time, instrument, cause or state is the extension of this prototype.

In the case of Japanese, the instrumental case representing instruments is regarded as the background case *de*, as well as place. It is different from English in which the instrumental case is accepted as a participant of foreground.

2.2.2. Marker *ni*

In contrast to English dative case, Japanese *ni* has the usage of ontological perception besides the usage of processual perception. (See Moriyama 2004b and 2004d for more details.) As shown in Table 1, Japanese *ni* has two forms of perception: "processual perception" and "ontological perception". Both of these perceptions are likewise affected by two types of perceptions. "An objective perception", which has a weak connection with perspective of cognizers and "a subjective perception", which has a strong connections with cognaizers. As a result, there exist four usages.

The usage of perceiving processual events objectively is "goal-of-movement" usage

Table 1　Semantic usages of marker *ni*　(Moriyama 2004b)

	view of perception	way of perception	feature of *ni* against *ga*
goal of movement	objective	processual (dynamic)	polarity
Origin of movement	subjective	processual (dynamic)	polarity　active
spatial relations among entities	objective	ontological (static)	polarity
experiencer	subjective	ontological (static)	polarity (active)

and corresponds to examples (3) through (5). Examples (6) to (8) are the usages of "origin of movement". The usage of perceiving ontological events objectively is one of the "spatial relations among entities" such as (9) and (10). In this case, *ga* and *ni* have the relationship as "entities to be placed" and "the place to locate". Usages of the experiencers are (11) and (12) which are perceived ontologically. In this usage, processual events from an objective viewpoint are perceived subjectively from the perspective of cognizers.

(3) *tomodachi　ni　hon　wo　ageru.*　(patient of giving)
friend　*ni*　book　*wo*　give
"to give a book to one's friend"

(4) *gakusei　ni　nihongo　wo　oshieru.*　(patient of action)
student　*ni*　Japanese　*wo*　teach
"to teach Japanese to students"

(5) *tsukue　no　ue　ni　hon　wo　noseru.*　(goal of action)
desk　*no*　on　*ni*　book　*wo*　put
"to put a book on the desk"

(6) *tomodachi　ni　hon　wo　morau.*　(agent of giving)
friend　*ni*　book　*wo*　be given
"to be given a book from one's friend"

(7) *sensei　ni　nihongo　wo　osowaru.*　(entity of action)

teacher *ni* Japanese *wo* be taught
"to be taught Japanese by the teacher"

(8) *taifu* *ni* *ie* *wo* *tobasareru*. (cause)
typhoon *ni* house *wo* be blown
"to be blown the house away by typhoon"

(9) *tsukueno* *ue* *ni* *hon* *ga* *aru*. (position)
desk on *ni* book *ga* be
"There is a book on the desk."

(10) *10ji* *ni* *ie* *wo* *deru*. (time)
10 o'clock *ni* home *wo* leave
"to leave home at 10 o'clock"

(11) watashi *ni* *kodomo* *ga* *aru*. (agent of possession)
I *ni* child *ga* have
"I have a child."

(12) *watashi* *ni* *wa* *Fuji-san* *ga* *mieru*. (agent of perception)
I *ni* *wa* Mt. Fuji *ga* can see
"I can see Mt. Fuji."

2.2.3 Case system of processual perception

For the case based on cognitive linguistics, let me summarize *ga, wo* and *ni*. *Ga, wo* and *ni* are for processual perception, and are based on Langacker's viewpoint. Firstly *ga* can be characterized as follows.

Marker *ga*: It represents the trajector with maximum prominence among the profiled parts of focused expressions. In the processual perception, a participant that is in the upperstream of the profiled action chain is awarded with maximum prominence and marked by *ga*. It represents an agent as a prototype.

The articles of an action chain starting from the agent marked by *ga* involve "a passive participant of the target domain (patient, mover etc.,)" existing inside of the active zone of *ga* and "an active participant of the target domain (experience, recipient etc.,)" outside of the action zone. The former is case-marked by *wo* and the latter, *ni*. The participant marked by *ni* is the active participant of the target domain, so it is the polar opposite of the active participant of the source domain marked by *ga*. (Figure 3)

Since the participant marked by *wo* is passive, its prototype is an entity, yet occasionally a human being. In the case of Japanese, marker *wo* indicates not only human beings or entities but also place or time. As for place, it implies origin or process, and as for time, it implies elapsed time. In either case, it has the passive relation with a participant marked by *ga*.

The prototype of participant marked by *ni* is mainly a human being, as it is an active participant, like the one marked by *ga*. However; place and time may sometimes be its prototype. Marker *ga* represents experiencer, recipient and beneficiary when the prototype is human being, while it represents goal or time of events when the prototype is place or time, respectively. (See Moriyama (2003b) for more about the passive usage of marker *wo* and the active usage of *ni* for place and time.)

As for the distinction, which the cognizer attaches to the entities in the outer environment, markers *wo* and *ni* are secondary landmarks compared with the trajector marked by *ga*. The former *wo* is the landmark between an active participant and a passive participant in the focused an action chain. The latter *ni*, is between two active participants of the source domain and the target domain which elaborate events.

Marker *wo*: It represents a passive participant inside the active zone originated from the participant marked by *ga* (prototypically agent). Its prototype is patient or mover, and in experiential events such as perception, possession, ability, or emotion, it represents the experiential objects.
Marker *ni*: It represents an active participant outside of the active zone originated from the participant marked by *ga* (prototypically agent).

In "goal-of-movement" usage ((3) to (5)) in which processual events are perceived objectively, marker *ni* has "the polarity" against marker *ga*. Here the term polarity implies the confrontation of *ni* against the other participants independently. Therefore, marker *ga* is "an active participant of the target domain" which confronts "an active participant of the source domain" marked by *ga*.

On the other hand, "the origin-of-movement" usage ((6) to (8)) of marker *ga* perceives the processual event more subjectively. This is due to the focus being transfered to participants other than agents by a certain motivation by the cognaizers. Marker *ni*, which is "an active participant of the source domain", possesses an active nature along with polarity, compared with marker *ga* of "a participant of the target domain".

2.3 Ontological perception

2.3.1 Ontological perception of ontological event

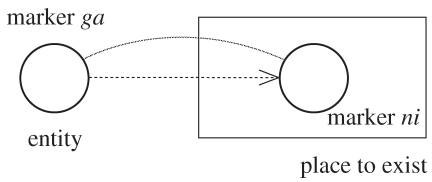
In the case of perceiving an ontological event ontologically, an entity is located at a certain place. Marker *ga* represents entity and *ni* represents place. The most prominent entity marked by *ga* becomes a trajector, while the second most prominent place marked by *ni* is a landmark. As there exists no action chain for ontological perception, there is no distinction based on an action chain. (It means that the entity placed on the upperstream of action chain gains maximum prominence and the one on the downstream has the secondary prominence.) Nor would marker *wo*, which represents the landmark in an action chain, appear. Instead, the existing entity marked by *ga* gains maximum prominence and the place where it exists is characterized as secondary prominence and marked by *ni*.

Ga: It represents an entity which is located at a place marked by *ni* in the ontological perception.

Ni: It represents a place where the entity marked by *ga* is located in the ontological perception.

Marker *ni*, as well as *ga*, can be used in both processual and ontological perceptions. Marker *ga* shares a schema that 'represents the trajector with maximum prominence among the profiled parts of focused expressions' in both forms of perceptions. As for marker *ni*, it shares a schema that 'has the polarity to the trajector marked by *ga*'. In the processual perception, it represents the processual and dynamic polarity, while in the ontological perception, it represents the ontological and static polarity (Moriyama 2004d). Figure 4 indicates the relation of marker *ga* with *ni* in the ontological perception. The broken line shows the psychological process of the entity marked by *ga* being located at the place marked by *ni*. The dotted line indicates that the entities shown as circles are identical.

Figure 4



2.3.2 Ontological perception of processual event

An experiential event in Japanese is objectively processual, but depending on a cognizer it is sometimes perceived ontologically. As seen in Figure 6, when processually perceived, the experiencer with maximum prominence is marked by *ga*, and the object of experience with secondary prominence is marked by *wo*. When ontologically perceived, an entity (as an object of experience) would be the most prominent and marked by *ga*. However; a human being as an experiencer (oneself) is not perceived nor case-represented (e.g. [*watashi wa*] *otouto ga iru*. "I have a younger brother."). Otherwise, it is awarded with the secondary prominence because it is spatially signified as an inward ground where the entity is located (cognitive domain) and marked by *ni* (e.g. *watashi ni wa otouto ga iru*. "I have a younger brother.").

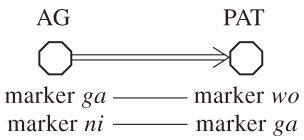
Furthermore, in the usage of "spatial relations among entities" ((9) to (10)) which perceives an ontological event objectively, marker *ni* serves the role of a place for locating an entity marker *ga*. Therefore marker *ga* which shows "an entity of being placed", is polar opposite to marker *ni* that marks "the place".

In the usage of "exeriencer" which perceives the processual event ontologically ((11) and (12)), as well as "spatial relations among entities", marker *ni* is polar to marker *ga*. This usage is originally an experiential event of a person marked by *ni* to an entity marked by *ga*. In this sense, the person marked by *ni* is active to the entity marked by *ga* (See Figure 5).

Figure 5 Case representation of experiential event

Note: In the example of "*kare ga musume wo motsu (koto)*" "(for him) to have a daughter", the agent is marked by *ga* and the patient is marked by *wo*. In the example of "*kare ni wa musume ga aru*" "He has a daughter", the agent is marked by *ni* and the patient is marked by *ga*.

Figure 5



In this way, there are both ontological and processual events in the ontological perception of events. In both events, the semantic roles that marker *ga* represents "an

entity" and marker *ni* represents "a location for placing the entity" are common. It is also common that ontological events, with maximum prominence, are marked by *ga* and processual events, with secondary prominence, are marked by *ni*. Differences among them are as follows: the nature of event is either ontological or processual, the location which marker *ni* represents is either real place or inner ground (cognitive domain) which exists internally in a human being as a cognaizer. As for the active nature, the difference lies in whether the entity marked *ni* is active to the entity marked by *ga* or not.

3. Conclusion

Let me summarize the systematic characterization of Japanese case markers *ga*, wo, *ni, de, e, kara*, and *made* as follows.

Ga: In the processual perception, it represents a participant awarded with maximum prominence in the upperstream of the profiled action chain. In the ontological perception, it represents an entity which is located at the place marked by *ni*. It shares a schema that "represents the trajector with maximum prominence among the profiled parts of focused expressions" in both ways of perceptions.

Wo: It represents a passive participant inside of the active zone originating from the participant marked by *ga* (prototypically agent). Its prototype is patient or mover, and in experiential events such as perception, possession, ability, or emotion, it represents the experiential objects.

Ni: It represents an active participant outside of the active zone originating from the participant marked by *ga* (prototypically agent). In the ontological perception, it represents a place where the entity marked by *ga* is located. It shares a schema that "has the polarity to the trajector marked by *ga*" in both ways of perceptions.

De: Against the whole action chain which produces foreground, *de* additionally represents a certain background which is the basis or situation of events. Its prototype is placed as a background. The usages for time, instrument, cause or state is the extension of this prototype.

E: In the processual perception, it profiles the path having the process of movement as its base.

Kara · *made*: In the processual perception, *kara* profiles the starting point and *made* profiles the goal.

While *wo* appears only in the processual perception, *ga* and *ni* appear both in the processual and ontological perceptions. *De* is a case marker used to represent the background where an event occurs. As for *e, kara* and made in the processual event, a part of them (path, starting point and goal respectively) is profiled on the base of the process of movement.

Lastly, I would like to compare the Japanese case system characterized in this thesis with Langacker's case system of English.

According to Ikegami (1981), English is a so-called "suru-type language (active natured language)" which has the tendency to express events as trajectors and the action chain among them dynamically. On the other hand, Japanese is "naru-type language (static natured language)" which is apt to express events statically as the occurrence on the ground. To put them into the terms as employed in this thesis, English is "processual-perception-type language" and Japanese is "ontological-perception-type language". This is, however; a relative characterization. This thesis is attempting to demonstrate that the main perception in English is processual, while in Japanese processual events are perceived processually and ontological events are perceived ontologically. However; there is another distinctive difference between these languages when perceiving events. For experiential events which occur on the boundary of both processual and ontological events, English perceives them processually and Japanese perceives them ontologically.

The English case system Langacker constructed is basically processual perceptions mainly nominative (*ga*), accusative (*wo*), and dative (*ni*) (See Figure 3).

In contrast to it, the Japanese case system shown in this thesis uses both processual and ontological perceptions. So in Japanese case systems, there co-exist markers *ga, wo,* and *ni* for processual perception, and markers *ga* and *ni* for ontological perception. As a result, there are two semantic usages —processual and ontological — for *ga* and *ni*, and they are categorized as one group sharing the same schema.

In English, an instrument marked by instrumental case *de* is qualified as a trajector

and becomes a foreground case with nominative, accusative and dative to be distinguished from the place marker as a background case. In Japanese, however, only nominative, accusative and dative could be qualified as trajectors and instrumental case is forced to be a background case with the place marker.

Since an instrument is an entity, it could be a trajector of the foreground but could not serve the main role due to occurrence of events and its function is background. Thus an instrumental case existing on the boundary of foreground (trajector) and background is categorized as trajector in English and as background in Japanese. This must be the effect that follows from the fact that English is "suru-type language" expressing "What trajectors do" and Japanese is "naru-type language" expressing "What comes to exist in the place".

So far I have characterized Japanese cases systematically, and simultaneously the dissimilarity from the English case system has been revealed.

格助詞デの意味構造

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．はじめに

日本語学習者にとって、格助詞の習得は容易ではない。中でもデは(1)に示すように多義であり、学習をさらに難しくしている。

(1) (a) 太郎が新幹線で福岡へ出張した。［道具］
　　(b) 花子がミスの連続で演奏会を滅茶苦茶にした。［原因］
　　(c) ハワイの教会で太郎が花子に指輪をはめた。［場所］
　　(d) この数年で携帯電話の普及率は劇的に増加した。［時間］
　　(e) この工場では輸入オレンジで缶ジュースが作られている。［材料］
　　(f) １台の車が猛スピードで走り去った。［様態］[2]

今まで日本語教育ではこうした多義語の意味を教えるにあたり、意味相互間の関係について言及することは少なく、具体的な例文を提示しつつ教えることが多かった。そのため学習者に対し、それらの意味をただ丸暗記させる結果ともなっていた。またこれまでの言語理論においても、その多くは意味と形式の対応について肯定はしつつも、同一の形式の下に置かれた多義語の一つ一つの意味がどのような関係で結びついているのかについては、あまり言及をしてこなかった。しかし認知言語学では、同じ形式は同じ意味を共有し、形式の違いは必ず意味の違いを伴うという Bolinger（1977）らの考え方が最大限に尊重され（もちろん英語の bank のような同音異義語の存在も否定しない)、さらには同一の形式の下にまとめられた意味の内部構造を明らかにしている[3]。即ち多義語の個々の意味は核となるプロトタイプ的な意味から動機づけられて拡張したものとされる。本稿で扱う格助詞デも同様で、(1)の様々な意味は同じ意味を共有しつつネットワーク構造をなし、相互に関係し合っていると考える。しかも認知言語学では、これらの動機づけやネットワーク構造、意味と形式との一対一対応といったものを、実際に脳内で起こっている認知のプロセスに即したものと仮定している。従ってもしこの主張が実際の認知プロセスに合致したものであるとすれば、それは習得が困難な多義語の意味習得に大いに役立つことが期待できる。また Langacker による多義語の意味の特徴づけはスキーマ的意味とプロトタイプ的意味の両面から補完的に行われ、より明確なものとなっている（Langacker 1991 b：266-272)。

以上のような理由から、本稿では認知言語学的な観点を参考にし、教育的動機から、格助

2　(1)(11)の例文は菅井（1997）から引用した。
3　意味と形式の対応は伝統的記号論の考えであるが、特に認知言語学は、Pinker の語彙意味論のように意味の相違を語彙に還元したりせず、Bolinger など機能主義的文法論の考えを作業仮説として踏襲するなど、意味と形式の一対一対応の原則を最大限重視している。

詞デの意味のネットワークについて考察する。

2．先行研究

認知言語学的な観点を用いた格標識の分析としては、まず何よりもLangackerの研究を挙げることができる(1991 a，1991 b など)。しかし彼の研究は動作連鎖を構成する参与者のプロトタイプ的な意味とその格標識との関係が中心で、そのため日本語のデ格については道具を表す具格としての用法に限られてしまい、デ格のその他の意味に関わる言及はあまり見出せない。

一方日本語の格助詞デの意味について研究した論文には、赤羽根（1987)、城田（1993)、仁田（1995）などがあるが、その多くはデの意味を綿密に分類したり、他の格助詞との比較の中で意味の違いを説明したりしているもので、デの持つ様々な意味同士の構造や結びつきについて言及しているものは、菅井（1997，2001)、山梨（1993)、間淵（2000）など、認知言語学的な観点から論じたものが多い[4]。

まず菅井（1997）ではデ格の意味特性について、認知言語学的な観点からの解明が試みられている。デ格には道具、原因、場所、時間、材料、様態などの様々な意味･用法があるが、菅井（1997）ではこれらに対し単一の意味特性の導出が試みられ、「主格または対格に対する背景的側面の提示」であるとしている。そしてその上で、「デ格は主要な格成分との関係が動詞によって表される事象を通じて変質しない」としている。例えば(2)(a)では、ガ格とデ格との関係は「太郎＝課長」のまま一定している。これはニ格が用いられている(b)でガ格とニ格との関係が＜－課長＞から＜＋課長＞へと変化するのとは対照的である。またこのことは、ヲ格とデ格との関係にも見られ、例えば(3)において「新車＝80万」「代金＝ドル」の関係は事象を通して変化しないとしている。

場所のデ格では(4)のように行為の空間的限界を示し、事象を通じてガ格とデ格の関係（ガ格がデ格で表された場所に所在するという関係）は不変であるという。これに比べ場所のニ格はガ格の所在をその内に限定しない（(b)では最終局面だけが所在している)。

さらに(5)で、[原因]をニ格で表した場合、(b)のように原因と結果の間に時間的間隔があくと不自然なのに対し、デ格で表した場合には不自然でないのも、デ格の場合にはガ格との関係が事象を通じて変化しないからであるとしている。

(2) (a) 太郎が課長で終わった／退職した／出向した。
　　(b) 太郎が課長になった／昇進した／就任した。
(3) (a) 太郎が新車を80万で買った／売った。
　　(b) 花子が代金をドルで支払った／計算した。

4　仁田（1995)、城田（1993）では、デ格の意味の多様性に言及しているが、多義性を名詞や動詞の語義に帰結させている。

(4) (a) 太郎が公園で散歩する／逃げ回る／生活する／調査する。

(b) 太郎が故郷に帰省する／行く。

(5) (a) 母親があまりのショックに／で寝込んだ。

(b) ？そのショックに母は翌日から１週間も布団から出られない状態が続いた。

そのショックで母は翌日から１週間も布団から出られない状態が続いた。

菅井(2001 b)ではデを含めた日本語の格助詞の体系化が試みられ、結論として(6)のように、動詞によって表される事象において「カラ格」、「ヲ格」、「ニ格」が各々「始まりの部分」、「始まりと終わりまでの間」、「終わりの部分」をプロファイルするのに対し、「デ格」は「動詞の語彙的意味に変化を被らずに限定するもの」という範疇化がなされるとしている。

(6) 《起点》 → 《過程》 → 《着点》

カラ　　ヲ　　ニ

←――――《限定》――――→

デ

菅井の研究は、日本語の格助詞について、豊富な例文を用い綿密な分析がなされている点で注目に値する。しかし上述の Langacker を中心として行われてきた、認知言語学的観点からの格標識研究との関連については明確でなく、また各格助詞の単一の意味特性の導出や、格助詞の体系化に議論の余地を残していると思われる。

山梨（1993）では格助詞デに対し、格の意味役割の「解釈のゆらぎ」が見られることに言及している。そしてこのゆらぎは、人間が外部世界の対象を認識し、言語表現に反映する際にとる視点やパースペクティブが関わっているとしている。ここでは具格から原因格の意味役割のゆらぎに焦点が当てられ、それらの意味役割は具象性、離脱性、手動性、統御性、責任性といった複合的視点の組み合わせにより決定されているとする。しかし研究対象が具格と原因格との関係に限られ、デ全体のスキーマ的な意味抽出には至っていない。

間淵（2000）では、室町以降の通時的調査を通じて、デの意味拡張のプロセスを明らかにしている。これによるとデの基幹的意味特性は「動詞が表す事態への消極的参与」と「状況の限定」を表すことであり、また基幹的用法は場所格で、次いで手段格・様態格であるとし、近世以降にその用法が増加した動作主格や原因格は基幹的用法から派生したものとしている。間淵の研究は、実際の通時的データに基づいて分析がされている点、認知言語学の観点を用いてデ格が特徴づけられている点で注目に値する。しかし「基幹的意味特性」はスキーマ的な意味特性を意味し、「基幹的用法」はプロトタイプ的用法を意味するなど、「基幹的」という用語の用法が曖昧である。また共時的に見て、デ格のスキーマ的意味と個々の具体的意味が、認知上どう関連づけられているかについて明確でない。

認知言語学的観点からデを分析したものには、他に中右（1998)、森山（2001 a）などがある。

中右（1998）では、場所を表すデの用法に関し、「ニ・デのすみわけ原理」と称したニとデの役割分担が紹介されている。それによればニは「個体」の位置を合図し、典型的には状態、過程、行為などの基本述語動詞に内在的な項（argument）を表示するが、デは「状況（状態、事態、出来事、事象、現象、行為、活動など)」の位置を合図し、典型的に随意的な付加語（adjunct)を表示し、内在的な項によって表された基本状況をまるごと包み込む外側の位置空間を表すとしている。例えば「サンマは沖合で流れ藻に産卵する。」でデ格は「サンマは流れ藻に産卵する」という基本状況を丸ごと包み込む位置空間を表すという。

一方森山（2001 a）では、場所を表す格助詞ニ・デの意味・用法の違いについて、前景・背景といった認知言語学的な概念を用いて分析がなされている。それによればニとデは場所を示す点では共通しているが、場所のニ格はガ格と独立的に対峙し、前景的であるのに対し、場所のデ格は場所を背景的に示す点が異なるとしている。この研究では Langacker を中心に進められてきた格標識に関する研究と日本語の格助詞との関係が明確になっている。しかし中右（1998)、森山（2001 a）の研究は、いずれも場所を表すデ格の用法に限られており、その他の用法についての言及がなく、意味相互間の関係についても不明である。

3．デ格の意味特性分析

本稿では先行研究を参考にしながら、格助詞デの意味構造についてさらに考察する。

まず Langacker (1991 a，1991 b) の動作連鎖により、格標識の意味が表されうる日本語のデ格は、上述したように［道具］を表す具格に限られる。Langacker によれば、図 1 のように、具格は道具として、源泉領域の受動的参与者であり、主格（源泉領域の能動的参与者）からの動力を対格（目標領域の受動的参与者）へと伝える。しかし厳密に見ると、主格からの動力を対格へと伝える動作連鎖の参与者となりうるのは、あくまでも⑺のような［道具］であり、菅井（2000）では［道具］としている⑴(a)のような［手段］は該当しない。両者の違いは、［道具］が［行為者］と［被影響者］の間にあって、［行為者］からの動力を［被影響者］へ伝える直接の参与者であるのに対し、［手段］は［行為者］と［被影響者］の間にはなく、［行為者］からの動力を［被影響者］へ伝える参与者となることができず、その結果動作連鎖を促す背景的な役割しか演じることができない点にある。例えば⑺、図 2 で動作連鎖は主格の「太郎」を起点、「コップ」を終点とし、「ハンマー」はその間で動力を「太郎」から「コップ」へと伝える媒介となっているのに対し、⑻ではデ格の「飛行機（航空便)」は、動作連鎖において主格の「彼」と対格の「手紙」の間にはなく、動力を主格から対格へ伝える媒介とはなりえていない（単に動作連鎖の結果として生じた移動を輸送という形で側面的に支えるのみである)。つまり［道具］は主格から対格への動作連鎖の流れの中にあり、参与

者の一員となっているが、［手段］はその流れの中にはなく、参与者の一員とはなりえず、動作連鎖に間接的、背景的にしか関われない点が異なっている。

(7)　太郎はハンマーでコップを割った。　　［道具］

(8)　彼は飛行機（航空便）で手紙を送った。　　［手段］

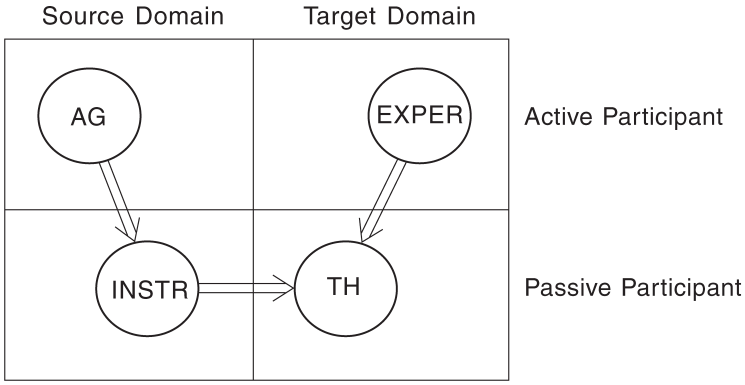


図 1　他動性を持った動力連鎖とその参与者役割

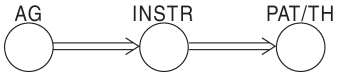


図 2　「太郎はハンマーでコップを割った。」の動作連鎖

ではそれ以外の用法はどうなのか。前景となる動作連鎖の参与者となりえないとすれば、その役割は上で見た［手段］と同様、動作連鎖の背景的な役割を演じていることになる。

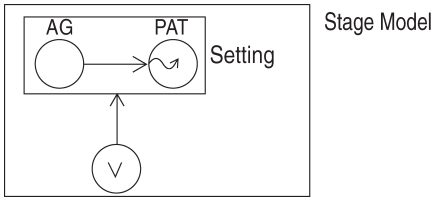


図 3　認知主体と前景・背景との関係（Langacker（1991 b : 211）より）

ここで前景、背景とは何かということについて明らかにしておく必要があると思われる。図 3 に示されているように、動作連鎖の前景も、また Setting としての背景も、認知する主体（V）からは独立して客観的に展開する状況が前提となって決定されていることは言うまでもない。しかし実際に状況を構成している動作連鎖は無数にあり、そのうちどれに焦点を当てて切り取り、前景化するかは、もっぱら認知主体の解釈に委ねられている（Langacker 1991 b : 214-215) を参照)。同様に前景の Setting となる背景も、客観的な事態に基づきながらも、それを解釈するのはあくまで認知主体である。前景となるのはプロトタイプとして、図 1 で図式化された意味役割を持つ参与者であるが、背景を構成する意味役割とはどんなものなのか。第一に前景の動作連鎖（焦点化した事態）と密接に関わり、その成立基盤となっ

ている、またはなっていると解釈される要因が背景として認知される可能性がある。第二には実際に存在する無数の事態の参与者のうち、前景としては認知されなかったもの、中でも前景化された動作連鎖に対し、何らかの役割を持って直接的に相関関係を結ぶものが背景として認知される可能性が高いであろう。

では具体的にどのようなものが背景として認知されるのか。まず前景の事態（動作連鎖）と密接に関わり、その成立基盤となっている、空間的ドメインの構成要因である［場所］や［時間］を挙げることができよう。(1)を例にとれば、(c)ではデ格の「ハワイの教会」が「太郎が花子に指輪をはめる」事態が行われる［場所］として背景（Setting）を形成している。また(d)ではデ格の「ここ数年」が「携帯電話の普及率が劇的に変化する」という事態と密接に関わり、それが成立するための［時間］的な背景（Setting）となっている[5]。

また同じようにデ格で表される［材料］、［原因］なども、前景となっている事態（動作連鎖）と密接に関わりつつその成立基盤となり、背景になりうると考えられる。(1)を例にとれば、(e)では「輸入オレンジ」が「缶ジュースを作る（缶ジュースが作られる）」事態が行われるための［材料］的な背景を提示し、(b)では「ミスの連続」が「演奏会を目茶苦茶にする」事態の［原因］的な成立基盤（背景）となっていると考えられる。

しかし［様態］の場合には、事態の成立基盤というよりは、事態がどのようなさまで成立したかということに対する補足的内容となっている[6]。

次に事態の背景の同定の客観性について述べておきたい。［場所］、［時間］、［材料］、［手段］などの場合では事態成立との関わりは、かなり客観的に同定されうる。ところが［原因］の同定の場合は、必ずしも客観的であるとは言い切れない面がある。すなわち背景としての［原因］の同定には認知主体の主観的解釈が多分に反映している可能性がある。例えば極端な例として、「風が吹けば桶屋がもうかる」といった意味での「風で桶屋がもうかる」の場合の［原因］の同定は、ほとんど認知主体の主観的解釈に基づくものである。

［様態］の場合はどうか。この場合にも客観的な事実関係に基づきながらも、やはり認知主体の主観が反映されている。［様態］とは単に「客観的にそうである」場合と同時に、認知主体にとって「そのように見える」さまを示している場合もある。例えば(1)(f)で「猛スピード」は「１台の車が走り去った」という事態がどのように展開されているかに対する、認知主体の半ば客観的で半ば主観的な解釈である。

このように背景となりうるものには、具体的に事態全体に密接に関わりつつ、その成立基

5　但し場所や時間はデ格以外にも、例えばニ格やヲ格でも表しうる。しかしこれについては森山(2001 a)で触れられているように、ニ格やヲ格で表された場合には、その場所や時間は、あたかも動作連鎖の一つの参与者のように主格と直接対峙するものとして前景的に認知されるのに比べ、デ格で表された場所や時間は、あくまでも前景をなす動作連鎖に直接には加わらず、その成立基盤として背景的に認知される点が異なっているということができる。

6　様態のデは、断定の助動詞ダの連用形とするという考えもあり、もしそうだとすれば様態のデは同音異義語として、格助詞デの意味のネットワークとは分けて考える必要がある。

盤となる［場所］、［時間］、［原因］、［手段］、［材料］、それに事態成立のさまを補足的に示した［様態］などが含まれると思われる。そしてこれらは［場所］や［時間］などのように、認知主体の主観的要因が反映しにくいものから、［原因］、［様態］などのように認知主体の主観的要因が相当程度反映されるものまで様々である。

このように見てくるとデ格とは、いずれも前景の事態（動作連鎖）全体に密接に関わり合っている成立の基盤やさまを補足的に示す背景格であることがわかる。

ここでデ格においては唯一背景格でなく、前景格とされている意味役割の［道具］について再度考えてみたい。確かにLangackerの分析では、具格は動作連鎖に含まれるものとして、前景格の一つとなっている。しかし具格となる［道具］は、図1が示すように源泉領域の受動的参与者である。また動作連鎖の参与者のうち、焦点が当てられるのはTrajectorとしての［行為者］（主格）、そしてLandmarkとしての［被影響者（主題）］（対格）であり、その狭間に位置する［道具］（具格）は、動作連鎖を構成する一員とはいっても、焦点の当たりにくい位置に置かれている。しかも［道具］の意味役割を演じるものは、［行為者］の体の一部であったり、小さく、かつ一時的な媒介者であったりする場合がほとんどである。英語などの場合には、それでも焦点化し、その結果本来の行為者に代わって主語となることもあるが、日本語などの場合には、「ハンマーがコップを割った」といったように、［道具］が［行為者］に代わって主語になることはあまり多くはない。つまり日本語の具格は、むしろ焦点化の低さから背景の一つと考える方が妥当であるといえそうである。そう考えると、Langackerの主張とは異なるが、［道具］の意味役割を演じる具格も、他の［場所］、［時間］、［原因］、［手段］、［材料］、［様態］などのデ格同様、背景格として、前景の動作連鎖全体の成立の基盤やさまを補足的に示すものに含めて考えることができると思われる。

以上の考察をもとにデ格のスキーマ的な意味特性を導出するならば、⑼のようになる。

⑼　背景格として前景の動作連鎖全体の背景（成立の基盤やさま）を補足的に示す

菅井（1997）では、デ格の意味特性を「主格または対格に対する背景的側面の提示」としていたが、本稿では「前景を構成する（主格、対格、与格などの）動作連鎖全体に対する背景（成立の基盤やさま）の補足的提示」と言いかえている。

また菅井（1997）では先行研究のところで述べたように、「デ格は主要な格成分との関係が動詞によって表される事象を通じて変質しない」といった特徴づけがなされている。しかしなぜそうなるのかという点に関しては説明がない。これについてもデ格が背景格として、前景の動作連鎖全体の背景を表すものであることを考えれば、自然と回答は出てくる。ニ格は前景を構成する参与者（またはそれに準ずるもの）としてガ格に対峙している。従ってガ格とニ格の関係は、動詞が表す過程や変化により時間と共に漸次変化せざるをえない。ところがデ格は前景が成立する背景として存在するので、事態が展開する間、⑵、⑶のように［様態］のデ格なら事態が展開する［様態］として、⑷のように［場所］のデ格なら事態の行わ

れる［場所］として、⑸のように［原因］のデ格なら事態の起こった［原因］として、前景の諸要素に対して変わらぬ役割を果たし続けることができるのである。

さらに菅井（2001 b）でデ格が「動詞の語彙的意味に変化を被らずに限定する」と述べているが、それもデ格が前景ではなく、背景として存在するため、動詞を中心とした事態（動作連鎖）から独立し、しかも背景であるために、それを限定するのだと解釈できる。

一方間淵（2000）のデ格の意味特徴づけと比べると、本稿は前景・背景といった認知言語学的観点が生かされている。間淵（2000）の「状況の限定」「（事態への）消極的参与」といった（スキーマ的な）意味特徴は、デ格が背景格であるために生じたものと言えよう。

4．背景を形成する認知的ドメイン

さらに菅井（2001 b）では、背景的なデ格と、ガ格など前景的な主要格成分との関係については、⑽の例文の右に示されているように、デ格の意味役割を越えた特徴づけがなされておらず、それぞれ異なった特徴づけとなっている。しかし認知言語学的に考えれば、これらの関係にも共通性（スキーマ）を見出せなければならないように思われる。

⑽ (a) テラスで太郎が星をながめていた。［場所］（デ格⊃ガ格）
(b) 早速、太郎が鉛筆でデッサンを書き始めた。［道具］（ガ格→デ格）
(c) 成績不振で母親が子供をなぐった。［原因］（デ格→ガ格）
(d) 行方不明の男性が遺体で発見された。［様態］（ガ格＝デ格）

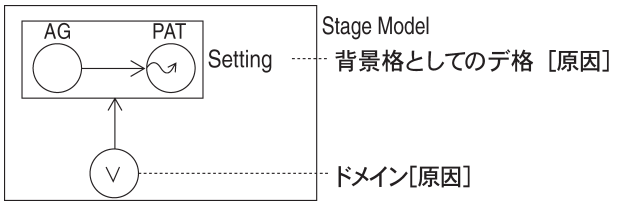
ここで背景とは何かについて再度考えてみたい。⑾は前景を構成する「太郎はジュースを作った」という節に、異なるデ格を加えたものである。それぞれは前景には示されていない、様々な背景がデ格として示されている。これを見ると、背景として何を言語的に明示するかは、事態に背景的に関わる諸要因のうち、認知主体が何に焦点を当てるかにより異なっている。換言すれば、認知主体が前景を補足する背景として、如何なるドメインを選択するかにより、デ格が担う意味と、デ格で表される対象とが異なってくるのである。例えば認知主体が［場所］について補足しようとした場合には、［場所］といった空間的ドメインが選ばれ、(a)のように［場所］がデ格によって言語的に明示化され、その結果デは［場所］を表す格助詞として機能し、背景情報を補足するのである。

⑾ (a) 太郎は台所でジュースを作った。［場所］
(b) 太郎は３分でジュースを作った。［時間］
(c) 太郎はミキサーでジュースを作った。［道具］
(d) 太郎はバナナでジュースを作った。［材料］
(e) 太郎は学校の宿題でジュースを作った。［理由］

要するにデ格とは、前景に対し事態成立の背景を補足的に明示するが、その具体的な意味役割は、認知主体が事態を捉える際に持つドメインにより異なってくるものだということが

できる。これを図に表せば、図４のようになる（図は認知主体が［原因］のドメインを選択した場合である。図右側の「ドメイン［原因］」は、認知主体（V）が［原因］のドメインを選択したことを、「背景格としてのデ格［原因］」は、背景格として原因のデ格が選択されたことを示す。その他のドメインが選択された場合も同様に決定される）。

図４　認知主体のドメインと動作連鎖の背景と関係



菅井（2001 b）では、⑽の如くデ格の意味役割によってガ格などの主要格とデ格との関係が異なり、一貫した特徴づけには至っていない。これは次の２点が原因であると思われる。

第一に、デ格は「背景」格であるため「前景（全体）との関係」が考察されるべきであるところを、デ格と「主要格（主格または対格）との関係」を考察していること。

第二に、デ格は「認知主体が選択するドメイン」と「前景（事態全体）」との相互関係によりその意味が決定される点は共通であるが、その細かな関係は選ばれたドメインの性格により微妙に異なっていること。例えばドメインが［場所］、［時間］、［様態］の場合には、事態全体と関わりを持ってくるが、［原因］、［道具］の場合は［行為者］との関係が、［材料］、［手段］の場合は［被影響者］との関係が幾分直接的になってくるなどである。

本稿が主張してきたように、デ格を前景との相互関係の中で捉えるならば、デ格の個々の意味は認知主体の持つドメインにより背景情報として具体化されたものと考えられる。

そして一つの節に共起しうるデ格の数は⑿のように、大抵は１つ、または多くても２つ程度であると考えられるが、これは格の重複という観点から説明されてきたが、認知的に見れば、人間が一度に背景として認知しうるドメイン数の限界を意味しているものと思われる。(b)(c)は完全に非文とは言い難いが、人間が一度に認知するドメイン数の限界から、非文性が次第に増していくものと考えられる。

⑿　(a)　太郎は<u>台所で</u>ジュースを作った。
　　(b)　？太郎は<u>台所で３分で</u>ジュースを作った。
　　(c)　？？太郎は<u>台所で３分でミキサーで</u>ジュースを作った。

５．まとめ

以上、格助詞デの持つ意味構造について、最近の認知言語学の観点をとり入れつつ概観した。デ格は様々な意味を持っているが、それらの意味同士の具体的な相互関係や、それらに

共通するスキーマなどについては、これまでほとんど認識されることがなかった。

しかし本稿では、デ格の個々の意味が共通のスキーマにより一つに結びついていることが示された。そのスキーマとは「前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景（事態成立の基盤やさま）を補足的に示す」というものである。またデ格が表す具体的意味（場所、時間、道具、手段、材料、原因、様態など）は、図４のように「認知主体がどのようなドメインを持って事態に対するかにより主観的に選ばれ言語的に明示化されるもの」である[7]。

本稿で示されたデ格のスキーマはこれまで森山の先行研究で示されたヲ格やニ格のそれに比べ、意味特徴が具体的に特定されておらず、相当にスキーマ的（抽象的）である。しかしそのこと自体が、背景的諸要因を補足的に示す、「背景格としてのデ格」の特徴であると思われる。ヲ格やニ格は被影響者や経験者など、動作連鎖の参与者を表すものであるため、その意味特徴は比較的具体化されやすいが、背景格のデの場合には、認知主体が選択するドメインに大きく依存するため、そのスキーマの抽象度は相当に高くなるのである。

本稿の分析が正しいとすれば、共通のスキーマを中心としたデ格の意味のネットワーク構造は、前述したように人間の認知プロセスにおいて実際に脳内で形成され、言語習得のプロセスにも密接に関わっているはずである。その意味から認知言語学の観点を生かした本研究は、格助詞デの意味のネットワーク構造はどのようなものであり、それらの意味の習得順序はどうなっているのか、などの研究に多くの示唆を与えると思われる。そして日本語教育に対し、意味のネットワーク構造は格助詞の多義的な意味をどのように関連づけて提示していくかということに回答を示し、一方、習得順序研究はそれらの意味をどのような順序で提示していくべきかということに回答を示してくれると確信している。

7　本稿では具体的な意味のうちどれがプロトタイプであるかについては、紙面の都合で述べられなかったが場所格をプロトタイプとする間淵（2000）を支持、踏襲するものとする。

The Study of Semantic Structure of the Case Particle *de*.

This thesis is a general view of the semantic structure of the case particle *de*. The viewpoint of cognitive linguistics was taken for this analysis.

The case particle *de* has various meanings, but each meaning is related to the others by a common schema. The schema represents a certain ground (base or modality of the event) presented as a supplement to the entire action-chain which composes the figure.

Moreover, the *de* case expresses the concrete meanings of place, time, tool, means, material, cause, and modality, etc. These are subjectively chosen and specified in the language by the perceiver, depending on the domain in which he views the event. when the perceiver wants to supplement some information (such as the reason) for the event, he selects the domain of the content (the reason). Thus the information specified in the language is the meaning the *de* case expresses concretely.

If this analysis is correct, the network structure of the meaning of *de* centering on a common schema is sure to be actually formed through the cognitive process in the human brain and to be closely related to the process of language acquisition. It seems that this research gives important suggestions towards the elucidation of the network structure of the meaning of the case particle *de* and is also significant for acquisition research. In addition, for Japanese language education, this will indicate how we should introduce polysemic meanings of the case particle, and in what order we introduce them.

格助詞デの意味構造と習得との関係

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．はじめに

日本語の格助詞デには以下のように様々な意味がある。

⑴　その会議はアメリカで開かれる。(場所)
⑵　彼の計画ではこの問題は扱われていない。(抽象的場所)
⑶　エベレストは世界で一番高い山です。(範囲)
⑷　30 人で締め切ります。(数量限定)
⑸　その事件は警察で捜査しています。(動作主)
⑹　食事のあとで、勉強をします。(時間)
⑺　成長の過程で一時的に現れる現象です。(期間)
⑻　長かった夏休みも明日で終わりです。(時限定)
⑼　日本人は箸でものを食べる。(道具)
⑽　毎日地下鉄で学校へ来ます。(手段)
⑾　この机は木でできています。(材料)
⑿　日本文化の特徴という題目で論文を書きました。(構成要素)
⒀　病気で学校を休む。(原因)
⒁　そういう点でおもしろいと思う。(理由)
⒂　試験の結果で判断する。(根拠)
⒃　出張で大阪へ行ってきた。(目的)
⒄　夕ご飯は自分で作って食べます。(動作主の様態)
⒅　迷惑にならないよう、小さな音で音楽を聞きました。(動作対象の様態)
⒆　猛スピードで走っています。(作用・できごとの様態)

認知言語学では多義語の意味構造について触れ、様々な動機づけにより順次カテゴリーの拡張が起こり、最終的にはプロトタイプを中心とした放射状カテゴリー構造を持つに至るとしている。また習得との関係から多義語の意味構造を見ると、原則としてプロトタイプ的用法の習得が早く、順次その拡張的用法へと習得が進むと考えられている。

本研究は多義語としての格助詞デの放射状カテゴリー構造を解明し、習得との関係を考察することを目的としている。

2．先行研究

認知言語学的観点からの多義語の放射状カテゴリー構造の研究としては、英語 over を研

究したLakoff（1987）やDewell（1994）、takeの研究を研究したNorvig & Lakoff（1987）などが代表的である。このうちLakoff（1987）やNorvig & Lakoff（1987）は、多義語のカテゴリーはプロトタイプ的な意味から、メタファー、メトニミー、イメージ・スキーマ変換などのさまざまな動機づけによってカテゴリーの拡張が起き、その結果、放射状のネットワークが築かれるとしている。またDewell（1994）は中心的なイメージ・スキーマとそこからのイメージ・スキーマ変換によって多義語overの放射状カテゴリー構造を説明している。

一方日本語でも様々な多義語研究が行われるようになってきたが、とりわけ格助詞デの放射状カテゴリー構造を研究したものとしては、間淵（2000）、森山（2002 a）などがある。

間淵（2000）は通時的調査を実施し、デの意味拡張の通時的プロセスを明らかにした。それによれば基幹的用法（認知言語学で言うプロトタイプ的用法に相当する）は場所格で、そこから手段格・様態格がまず派生し、さらに後に動作主格や原因格が基幹的用法から派生したと述べている。

また森山(2002 a)は格助詞デの意味構造を共時的に分析し、プロトタイプ的な用法が場所格であること、デの個々の意味は「前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景（事態成立の基盤やさま）を補足的に示す」といったスキーマ的意味を共有していることなどを主張した。

3．デの放射状カテゴリー構造

まず、これまでの辞書や学習書、研究においてデの様々な意味・用法がどのように分類されてきたかを見てみることにする。表１は『日本語教育事典』(大修館書店)、『日本文法大辞典』(明治書院)、『新明解国語辞典』(三省堂)、『日本語文法セルフマスターシリーズ３　格助詞』(くろしお出版)、『外国人のための日本語例文・問題シリーズ７　助詞』(荒竹出版)、及び間淵（2000）の分類をまとめたものである。

これを見るとデの意味用法の分類にはかなりの相違点が存在することがわかる。表１の結果をふまえるようにしてデの意味・用法を再度分類してみると以下のようになる（以下、＜　＞はカバータームとしての用法をさす)。

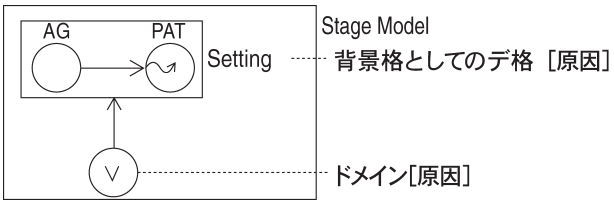
①　＜道具＞：道具、手段、材料、媒体、構成要素
②　＜原因＞：原因、理由、根拠、動機
③　＜場所＞：場所、場（抽象的場所、場面）
④　＜様態＞：動作主・対象の様態、作用・できごとの状態
⑤　＜限定＞：範囲、数量限定、期間、時限定
⑥　＜時間＞：時間
⑦　＜動作主＞：動作主、動作集団

表１　これまでの格助詞デの意味用法の分類のまとめ

<table>
<tr><th>日本語教育事典</th><th>日本文法辞典</th><th>新明解国語</th><th>例文問題シリーズ</th><th>日本語文法</th><th>間淵（2000）</th></tr>
<tr><td>道具・方法</td><td>手段</td><td>方法・手段</td><td>道具・手段</td><td>道具・手段</td><td>道具・手段</td></tr>
<tr><td>材料</td><td>材料</td><td>材料</td><td>原材料・媒体</td><td>材料</td><td>原料・材料・構成要素</td></tr>
<tr><td>原因</td><td>原因・理由・根拠</td><td>原因・理由</td><td>原因・理由</td><td>原因</td><td>原因・理由・根拠・動機</td></tr>
<tr><td>場所</td><td>場所・場面</td><td>場所・場面</td><td>場所</td><td>具体的場所
抽象的場所</td><td>場所・抽象的空間・場面</td></tr>
<tr><td>状態</td><td>状態</td><td rowspan="4">状態</td><td>状態</td><td>様態</td><td>様態・状態</td></tr>
<tr><td rowspan="2">主体の量的限定</td><td>範囲</td><td>範囲・限定</td><td>範囲</td><td>範囲限定</td></tr>
<tr><td>限度</td><td>数限定・区切り</td><td>限度</td><td>限定</td></tr>
<tr><td>時間</td><td>期限</td><td></td><td></td><td>期間の限定</td></tr>
<tr><td></td><td>時期（では）</td><td>時点(では)</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>動作主</td><td>動作組織・団体</td><td>動作主</td><td>動作集団</td><td>動作主</td><td>動作主</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>遠慮・謙遜</td><td></td><td>その他</td></tr>
</table>

注）表中、行に区切りのあるものは、別のカテゴリーとして扱われていることを示す。また太線の区切りは、本稿での（カバータームとしての）カテゴリーの区分でもあることを示している。

図１　認知主体のドメインと動力連鎖の背景と関係（森山　2002 a）

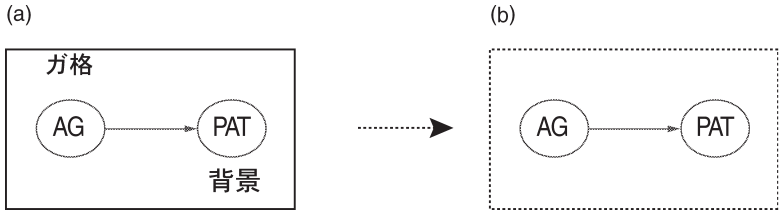


ところで森山（2002 a）によれば、格助詞デの個々の意味は「前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景（事態成立の基盤やさま）を補足的に示す」といったスキーマ的意味を共有している。またデが表す具体的意味は「認知主体がどのようなドメインを持って事態に対するかにより主観的に選ばれ言語的に明示化されるもの」であるとしている。例えば図１は認知主体（V）が動力連鎖の原因を補足的に示そうとしている場合で、背景のドメインとして原因のドメインが設定されている。その結果、背景格としてのデ格は、原因を表すようになる。

しかし、デを用いるにあたり、認知主体によって「背景」として選ばれる認知ドメイン[8]を一つ一つ見比べてみると、大きく２通りのドメインが存在することがわかる。

一つは「現実世界」に依拠した客観性の高い背景ドメインで、＜場所＞用法の「場所」をはじめ、＜限定＞、＜動作主＞などの意味にデが使用される際に、「背景」として選ばれるドメインである（＜時間＞用法もこれからの拡張によるものであるが、これについては後述する）。これらのドメインは、実際の現実世界に文字通り空間的な「背景」として存在する「空間的な場」に依拠している。動作主（AG）、被動作主（PAT）などの参与者とその動力連鎖とによってなされる事態を、舞台上での役者たちにより演じられる演劇にたとえるなら[9]、ここでの「背景」の役割は空間的なもの、すなわち演劇における舞台（stage）の役割を持っている。このような「背景」を図2(a)のように表すとしよう。動作主（AG）、被動作主（PAT）などの参与者が丸、参与者間の動力連鎖が矢印、舞台の役割としての「背景」が、事態を取り囲む四角い枠で描かれている[10]。また色の濃淡はプロファイルされているか否かを表す。図2(a)では枠が濃い実線、動力連鎖が薄い実線で描かれているが、これはデがその背景をプロファイルするものであることを示している。

図2　現実世界のドメインと認識世界のドメイン（図1で示されている認知主体Vは省略した）



もう一つは「認識世界」に開かれた主観的な背景ドメインで、これは＜道具＞、＜原因＞、＜様態＞の意味にデが使用される際に認知主体の頭の中に設定されるものである。これらは事態の展開に対し、実際の現実世界に空間的な「背景」として存在するものであるというよりは、事態成立に対し機能的な「背景」の役割を持って存在するものである。具体的にいえば、＜道具＞、＜原因＞などのように、事態の主たる参与者ではないが、何らかの形で事態成立に「背景的」に関わっていたり、＜様態＞のように、事態を言語的に描写・表現するにあたり、事態成立に「背景的」、「補足的」な内容を付加する役割を担っていたりする。これらは項という形で言語化されることはないが、認知主体が何を補足的に示そうとするかに応じて

8　ドメイン（domain）とは正式には認知ドメイン（cognitive domain）をさす。Langackerの用語で、語の意味を得る際に前提となるベース（base）の属する概念領域のこと。
9　このたとえはLangacker（1991 b）のStage modelを参照にしたものである。
10　実際の事態の参与者は動作主（AG）、被動作主（PAT）に限らないが、本稿ではLangacker（1991 b）のStage modelでの図式化に従い、代表として動作主（AG）、被動作主（PAT）の動力連鎖を示すことにした。

背景的に言語化され、デ格で表されることになる。これも演劇にたとえて言えば、主たる役者たちによって演じられる演技を様々な形で引き立てる、大道具・小道具や、エキストラなどに相当しよう。こちらのほうは、舞台のように空間的構図としての「背景」ではないが、機能的な意味で「背景」の役割を担っている。これは図2(b)のように表すことができよう。図で「背景」を表す四角い枠が点線で描かれているのは、背景ドメインが空間的なものから機能的なものへと主観化されていることを示している。

(a)と(b)との関係は、(a)の「背景」は現実世界に依拠した客観性の高いものであるのに対し、(b)の「背景」は認識世界における主観的なものであるが故に、認知言語学的に考えれば、(b)は(a)からメタファー的に拡張されたものであると考えることが可能であろう。(a)から(b)に伸びる点線の矢印は、(b)が(a)の拡張であることを示している[11]。

3.1　現実世界におけるドメイン

前節では、デが用いられるに際し喚起される「背景」としての認知ドメインには、現実世界の客観的ドメインと、認識世界の主観的ドメインの2通りのドメインが存在すること、後者は前者からの拡張によるものであることを述べたが、現実世界のドメインの中でも典型的なドメインは、やはり実際の事態の空間的な背景を提示する＜場所＞用法であろう。これは間淵（2000）、森山（2002 a）などの先行研究の見解とも合致している。従って本節では、まず＜場所＞用法について述べる。

3.1.1　場所→（場所の抽象化）→場

認知言語学によれば、一般に同一の意味カテゴリー内における拡張は、具体的用法をプロトタイプとして、そこからメタファーなどの動機づけによって、より抽象的な用法へと進むとされている。従って＜場所＞用法の中では、具体的場所の用法がプロトタイプとなり、よ

11　「背景」の役割の現実世界から認識世界への拡張は、非連続的なもののようにも思われるが、以下の例を見ると連続的であることがわかる。

(i)　英語で考えてみましょう。(道具)

(ii)　毎日有楽町線で通勤しています。(手段)

(iii)　台風で試合が延期になった。(原因)

(i)ではデが「道具」の意味で用いられているが、「考える動作」が行われる抽象的な意味での「場所（言語領域）」と考えることもできる。同様に(ii)ではデが「手段」の意味で用いられているが、通勤の行われる「場所（ルート）」とも考えられる。また(iii)のデは「原因」の意味だが、これを「試合延期」という事態が起こる「場所（状況）」として考え、それが試合延期を引き起こす「原因」となっていると考えることもできる。このように考えれば、これらの用法は見方によっては図2(a)のようにも考えられる。以上のように現実世界から認識世界への「背景」の役割の拡張は決して非連続的なものではなく、連続的拡張によってもたらされたものであるともいえる。このことは見方を変えれば、格助詞の意味の連続性を示しているということもできる。多義語のそれぞれの意味は明確な境界をもって区分されているわけではなく、意味の境界はファジーで連続的なのである。この点については格助詞の意味（解釈）のゆらぎを研究した山梨（1993）も参照のこと。

り抽象的な場所用法はそこからの拡張と考えることができる。

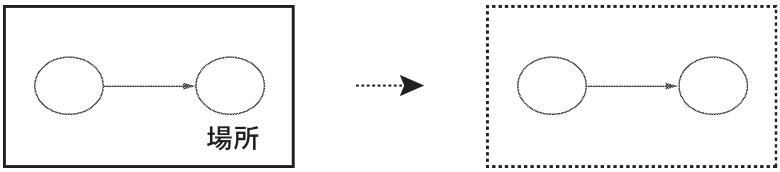
従って抽象的場所を表す場の用法は、動作が行われる場所が、具体的な場所から抽象的な場所へ拡張されたものである。図 3 は Langacker（1991 a：285）の Stage model の図式化を参考に、「場所の抽象化」の拡張プロセスを示している。図 3 の左側はデの具体的場所用法、右側は抽象的場所（場）の用法を示している。図右の枠が破線で示されているのは、背景としての場所が抽象化していることを意味する。また左右の図を結ぶ太い点線の矢印は図左から右へ拡張が起こっていることを示している。

また例文⑴はデの「具体的場所」、⑵はデの「抽象的場所（場）」の用法を示している。

⑴　その会議はアメリカで開かれる。

⑵　彼の計画ではこの問題は扱われていない。

図 3　場所用法における場所の抽象化



3.1.2　場所→（動作の抽象化）→限定（範囲・数量限定）

＜限定＞用法のうち、「範囲」、「数量限定」の用法は、プロトタイプとしての場所用法からの拡張であると考えられる。まず「範囲」の用法は、その場所で行われる動作が具体的な動作から「検索する」という心的走査[12]へと主観化されたものであると考えることができる。また「数量限定」の用法は、その場所で行われる動作が、具体的な動作から「数を数える」「量を計る」という心的走査へと主観化されたものであると考えられる。 但し「数量限定」の用法は、「範囲」の用法に比べると、心的走査が行われる範囲の境界部分に焦点が当てられ、その際立ちの度合いが高まっており、それが「限定」の意味合いを与えている。また「範囲」の用法における場は空間的なものであるが、「数量限定」の場は 1 次元的なスケールとなるという点も異なっている。図 4 は＜限定＞用法における「動作の抽象化」の拡張プロセスを示している。図左の具体的な動作は実線の矢印で示されているのに対し、図右の主観化された動作（心的走査）は点線の矢印で示されている。

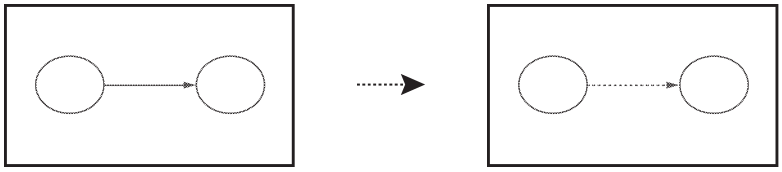
また⑶のデは「範囲」の用法、⑷のデは「数量限定」の用法で、それぞれ、「(山を）検索する」心的走査や、「数を数える」心的走査が行われる領域がデで示されている。

⑶　エベレストは世界で一番高い山です。

12　心的走査 (mental scanning) は Langacker の用語で、実際の走査ではなく心の中で行われる走査をさす。

⑷　30 人で締め切ります。

図 4　限定用法における動作の主観化（左が場所用法、右が限定用法）



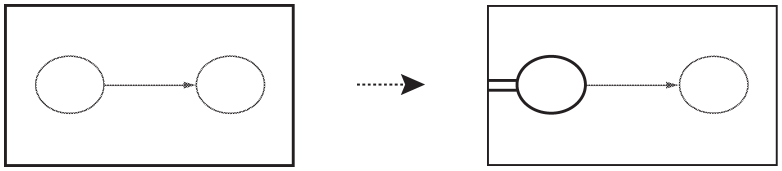
3.1.3　場所→（場所の背景化）→動作主

＜動作主＞の用法も、プロトタイプとしての場所用法からの拡張であると考えられる。デは本来、動作が行われる場所を示すものだが、＜動作主＞用法は、メトニミー的拡張により、動作の行われる場所を「参照点（reference point）」として、最終的にはその場所と密接な関わりをもつ動作主に意識を向けさせるものと考えることができる（Langacker 2000：171-202）。ここで Langacker は、メトニミーが人間の基本的な認知能力の一つである参照点能力によるものであることを説明している。図 5 では右が動作主の用法を示している。場所を示す四角い枠の色が薄くなっているが、これは場所が参照点として機能した後に背景化されることを示している。また四角い枠と動作主とが二重線で結ばれているが、これは警察と警察の人々の関係のように、場所と動作主とが密接な関係を持つことを示す。

また⑸のデは警察という場所を参照点として、警察の人々が動作主として示されている。

⑸　その事件は警察で捜査しています。

図 5　動作主用法における場所の背景化（左が場所用法、右が動作主用法）



3.1.4　場所→（メタファー写像）→時間→（境界の焦点化）→期間・時限定

デの＜時間＞用法は、日本語に限らずさまざまな言語で広く用いられている「場所（空間的な場）から時間（空間的な場）へのメタファー写像による変換」によるものである。図 6 の右図で、四角い枠が破線になっているのは、＜時間＞用法が＜場所＞用法のメタファー写像による変換によって拡張してできたものであることを示している。但しここでの時間は、動作が行われる（舞台としての）場所からの拡張によるものであるため、抽象的ながらもある「境界を持つまとまりを持った場」としてとらえられている点が格助詞ニなどで表される時

間とは異なっている。例えば⑹'で、ニで表された「食事のあと」は単に時間の表示であるのに対し、⑹で、デで表された「食事のあと」は、食事のあとの「(時間、空間両面の意味を備えた、まとまりのある）場」を示している。⑺は「期間」、⑻は「時限定」の用法であるが、これらは「時間」用法からの拡張であると考えられる。また「期間」と「時限定」は、それぞれ場所の抽象的用法の「範囲」と「数量限定」とが、メタファー写像による変換により時間的に用いられたものと考えることもできる。したがって「時限定」の用法は「数量限定」同様、その境界部分が焦点化されている。但し空間とは異なり、時間は１次元的なものであることから、「期間」や「時限定」の用法における場はともに１次元的である。

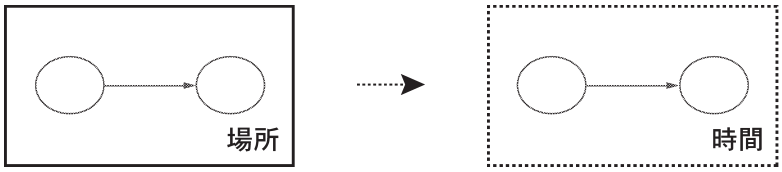
⑹　食事のあとで、勉強をします。

⑹'　食事のあとに、勉強をします。

⑺　成長の過程で一時的に現れる現象です。

⑻　長かった夏休みも明日で終わりです。

図６　時間用法におけるメタファー写像（左が場所用法、右が時間用法を示す）



3.2　認識世界におけるドメイン

人間は外界のある事態を認知するにあたって、Langacker の Stage model に表されているように、参与者間の具体的な動力連鎖を前景としてとらえ、それが展開される「場（setting)」を背景としてとらえる傾向がある。ここにおいて「場」は、プロトタイプとしては、その動力連鎖が展開する空間的な場所であり、従って「背景」とは本来、前景の動力連鎖と共に、現実世界に存在するものである。しかし「背景」の役割が主観化され、前景に対する背景のドメインが認識世界に変換（現実世界から認識世界へのメタファー写像による変換）されると、背景としての役割は機能化して、前景の参与者間の動力連鎖を成立させる補足的、背景的なドメインを示すようになる。

3.2.1　場所→（ドメイン主観化）→道具・手段→（内在化）→材料・構成要素

その一つが＜道具＞用法である。＜道具＞用法は、前景の参与者間の動力連鎖に対し、それが成立するための機能的な背景として、補足的に＜道具＞の関与が示されたものと考えることができる。上述したように場所用法から＜道具＞用法が拡張するにあたって、ドメインは現実世界から認識世界へとメタファー写像により変換され、その結果、前景に対する背景の

役割は機能化、主観化している。これを図式化したのが図７である。

⑼～⑿はそれぞれ道具、手段、材料、構成要素の用法である。このうち道具、手段は個別性、具体性が高く、材料、構成要素は、他の存在に内包されるという意味で、個別性が低く、属性的である。それゆえ認知的な際立ちという点でいえば、道具、手段は際立ちが高く、内在化された材料、構成要素は際立ちが低い。

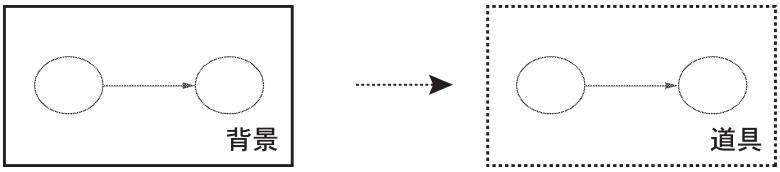
⑼　日本人は箸でものを食べる。

⑽　毎日地下鉄で学校へ来ます。

⑾　この机は木でできています。

⑿　日本文化の特徴という題目で論文を書きました。

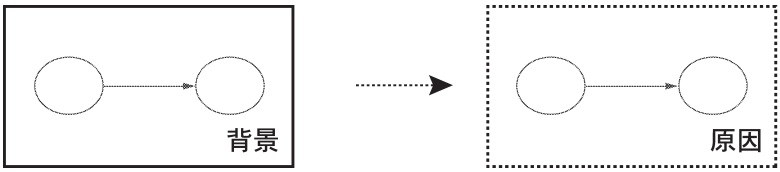
図７　道具用法におけるドメイン主観化（左が場所用法、右が道具用法を示す）



3.2.2　場所→（ドメイン主観化）→原因→（主観化）→理由・根拠・動機・目的

＜原因＞用法は＜道具＞用法と同様に、人間が事態を認知する際の前景に対する背景が主観化されたものである。ここでも「背景」は機能化しており、前景の参与者間の動力連鎖に対し、それが成立するための＜原因＞の関与が、背景的、補足的に示されたものである。これを図式化したのが図８である。＜原因＞用法の中には、事態との関係（因果関係）が現実世界に存在する客観性の高いものや、認知主体の認識世界に主観的にのみ存在するものなどがある。「原因」は事態との因果関係が客観的に存在する場合が比較的多く、「理由」では客観的に存在する場合と主観的に存在する場合とが考えられ、「根拠」では事態との関係はもっぱら認知主体が定立する主観的なものとなる。さらに「動機・目的」では事態が未だ実現していないことから、事態との関係は主観的である。また動作主⒀～⒃はそれぞれ「原因」、「理由」、「根拠」、「動機・目的」の用法である。

図８　原因用法におけるドメイン主観化（左が場所用法、右が原因用法を示す）



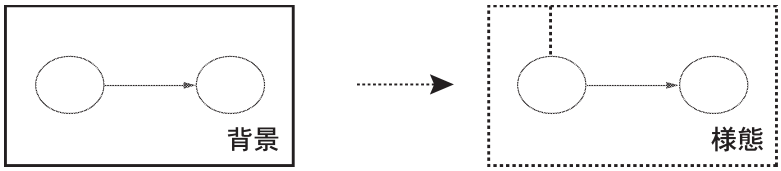
⑬　病気で学校を休む。
⑭　そういう点でおもしろいと思う。
⑮　試験の結果で判断する。
⑯　出張で大阪へ行ってきた。

3.2.3　場所→（ドメイン主観化）→様態

＜様態＞の用法も、＜道具＞、＜原因＞用法と同様に、人間が事態を認知する際の前景に対する背景が主観化されたものであると考えられる。＜様態＞用法は、「認知主体が言語化を行うに際し、前景（参与者間の動力連鎖）が成立するさまを背景的、補足的に示す」といったものとなっている（その意味で「背景」の役割は機能的である）。これを図式化したものが図９である（図は動作主の様態を示す用法）。様態から動作主に向かう点線は、それぞれの＜様態＞用法が前景のどの部分の補足的役割を示しているかを示している。また⑰～⑲はそれぞれ動作主の様態、被動作の様態、作用・できごとの様態を示している[13]。

⑰　夕ご飯は自分で作って食べます。
⑱　迷惑にならないよう、小さな音で音楽を聞きました。
⑲　猛スピードで走っています。

図９　様態用法におけるドメイン主観化（左が場所用法、右が様態用法を示す）



４．まとめ

本稿で明らかになったことを、格助詞デの放射状カテゴリー構造、習得過程との関係、及び英語との対照という３つの点から整理してみる。

4.1　格助詞デの放射状カテゴリー構造

まず上述のデのカテゴリー構造の分析に基づいて格助詞デのカテゴリー構造をまとめると、図10のようになると思われる。

これを見ると次のようなことがわかる。

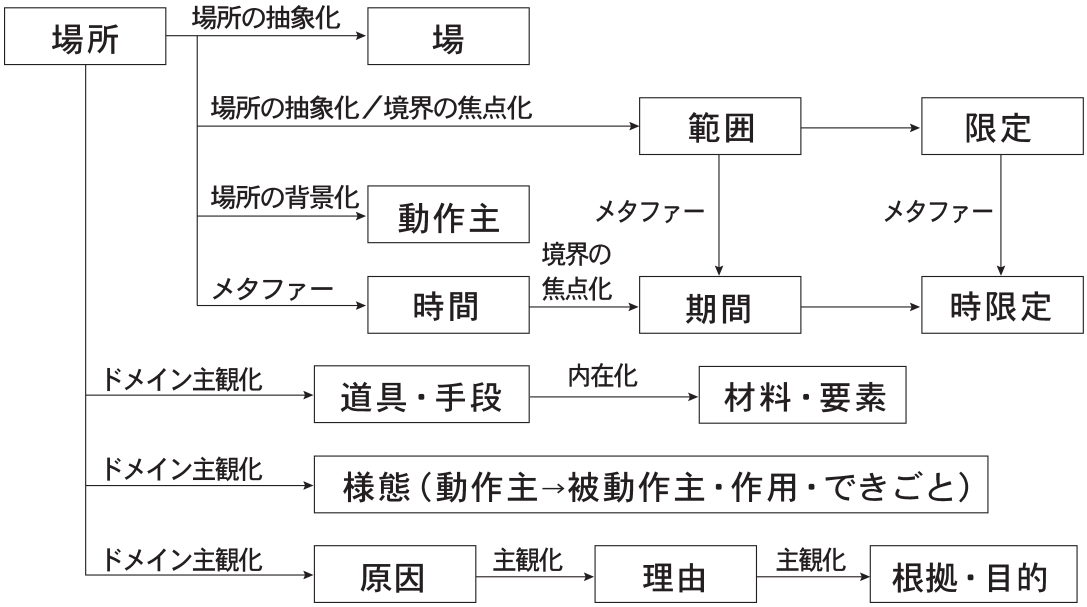
13　但し森山（2002 a）でも指摘されているが、＜様態＞のデを格助詞のカテゴリーに含めるべきかどうかは、議論の余地がある。

① プロトタイプとしての＜場所＞用法で、場所、動作など一部が抽象化したり、メタファー写像により変換したり、メトニミー変換により場所が背景化（動作主が焦点化）したりすることにより、「場（抽象的場所）」、「限定（範囲、数量限定）」、「動作主」などの拡張的な用法が派生する。また＜時間＞用法も、空間から時間へのメタファー写像により、プロトタイプとしての＜場所＞用法から派生したものである。

② 現実世界から認識世界へのメタファー写像によって引き起こされるドメインの主観化により、「背景」としての場所の概念が機能化し、様々な主観的なドメインが形成され、＜道具＞、＜様態＞、＜原因＞などの用法が拡張している。

③ それぞれの用法の内部でも、抽象化、内在化や焦点化などにより、さまざまな用法が拡張的に派生している。

図 10　格助詞デの放射状カテゴリー[14]



4.2　放射状カテゴリー構造と習得過程との関係について

次に格助詞ニの放射状カテゴリー構造と言語習得との関係を考えてみたい。言語（語）とはカテゴリーに貼られたラベルであると考えると、言語の習得とはカテゴリー化のプロセスと表裏一体のものであるということができる。また基本的にカテゴリー化がその内部においてプロトタイプからその拡張へと進むわけであるから、言語習得もまたプロトタイプ的な意

14　デの用例を詳細に見ていくと、より細かな拡張関係が存在するが、ここでは本稿で明らかになった拡張関係のみを図式化した。

味が先で、拡張的な意味は習得が遅れると考えることができる。

但しこのような傾向は、母語（第一言語）習得のプロセスではカテゴリー化の認知プロセスと並行した形で言語の習得が行われるため、言語習得のプロセスがかなりはっきりとプロトタイプからその拡張へと進むことが確認できるかもしれない。しかしながら第二言語習得の場合には、学習者の頭はすでに母語の処理のために特化され、最適化した状態にあり、母語習得時に一度完了したカテゴリー体系がメタ知識として潜在的知識を形成している。第二言語（目標言語）の新しいカテゴリー体系が母語のそれと全く同じであるとは考え難いため、第二言語習得時には、母語のカテゴリー体系は概念変化のプロセスによって、第二言語の新しいカテゴリー体系に作り変えられなければならない。しかしその場合には、転移など、母語のカテゴリー体系が第二言語のカテゴリー化にどのように関わっていくのかが問題となる。

今井（1993）、Shirai（1995）、Ijaz（1986）などによれば、プロトタイプが母語の影響を受けやすいこと、周辺的意味の習得が困難なこと、意味表象が拡散的で放射状構造を持たないことなどが指摘されている。これからわかることは、第二言語習得に伴って進むカテゴリー化のプロセスは、大まかに言えばプロトタイプから周辺的な拡張例へと進むであろうと推されるが、それはすでに学習者の脳内に確立されている母語のカテゴリー体系の影響を受けつつ行われるということである。したがって第二言語習得のプロセスは母語習得時ほどには、プロトタイプから拡張へといったカテゴリー化のプロセスを十分に反映しない可能性がある。しかし両者に何らかの相関が見られるとするならば、第二言語習得にプロトタイプ効果などのカテゴリー化のプロセスが反映していること、さらには言語習得とはカテゴリー化のプロセスと並行して進むものであることを示すことができる。

第二言語習得のプロセスがどの程度カテゴリー化のプロセスと一致するかについては、実証的な検討を行いながら稿をかえて論じることにしたい。

4.3　日英両語の対照

最後に本研究で明らかになった日本語のデの意味構造を、英語の「具格」や「場所格」などと比べてみたいと思う。Langacker（1991 a : 282-412）が詳述しているように、英語では＜道具＞は参与者の資格を与えられ、格標識も「具格」で表され、「場所格」で表される＜場所＞とはカテゴリーを異にしている。しかし日本語では、＜道具＞は＜場所＞の拡張として、同じ格標識デが用いられている。こうした日英両語の違いをどのように考えるべきなのであろうか。英語は「Billiard-ball model（Langacker 1991 a）」に示されるように、客観的に事態を参与者間の「動力連鎖（action chain）」としてとらえる傾向があり、その結果、動力連鎖に直接参与する＜道具＞は動作主（AG）、非動作主（PAT）などの参与者とともに前景となって、その背景（setting）に比べると、優位な立場に置かれ、その際立ちも高い。そのため、＜

道具＞を表す前景格としての「具格」は、背景格の＜場所＞を表す「場所格」とは異なるマーカーで示される。これに対し日本語は、池上（1981）でナル型の言語と言われているように、事態を場に出来るものとして環境論的にとらえる傾向がある[15]。その結果、前景となる参与者は動作主、受領者、被動作主などの中心的な役割に限られ、＜道具＞はそこから外れ、むしろ事態が出来する背景的、補助的なものとして、事態が出来する場のほうに埋め込まれ、＜場所＞同様に背景格としての位置を与えられるようになり、「場所格」をプロトタイプとするデで表されるようになったと考えることができる。

15　こうした日英両語の違いは、それぞれの言語の主観性の強さとも関連があると思われる。客観性の強い英語は、事態を客観的にとらえる傾向が強いために、一つの事態（動力連鎖）全体が節として表される中で、動力連鎖へ直接参与する動作主（AG）、道具（INSTR）、被動作主（PAT）がそれぞれ代表的な参与者として項で表される。これに対し英語に比べて主観性把握をする傾向が高い日本語では、事態を主観的にとらえ、認知主体である人間との共通性が高い、経験主（EXPER）、被動作主（PAT）などが代表的な参与者となる反面、人間との共通性が低い道具（INSTR）などは代表的な参与者から除外され、背景化されるのだと考えることができる。日英両語と主観性との関係については池上（2000）をも参照。

The Relationship between the Semantic Structure of the Japanese Case Particle *de* and its Acquisition

The purpose of the study is to discuss the relationship between the semantic structure of the Japanese case particle *de* as a polysemy and its acquisition based upon the radial category structure from cognitive linguistic viewpoint.

The following facts were found regard to the semantic structure of *de*.

1. There are some extensions originated from "location" as a prototype. These "abstract location", "limitation (range, quantity limitation)", and "agent" are derived because of profiling agent or deprofiling location through metaphorical transformation. The usage of "time" is also derived from the prototypical "location" usage by metaphorical transformation from space to time.

2. The usages of "instrument", "cause" and "manner" are extended from "location" as a prototype. The following is considered as a reason. The metaphorical transformation from the real world to the recognition realm leads subjectification of cognitive domain. It causes to functionalize "location" as "background" and various subjective domains are formed as well. Because of that the usage of "instrument", "cause" and "manner" are extended from "location".

3. In addition, various usages are derived by conceptualizing and profiling within each domain.

It is obvious that the acquisition process is similar to the category extension process when we compare the radial category structure of *de* with the result of Moriyama's previous study, which analyzed *de*'s acquisition process, That is, the acquisition process of *de* is developed along with its radial category structure. It shows that the cognitive factor of the categorical extension is one of very important elements which determine the second language acquisition process.

格助詞ヲの意味構造

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．問題提起

日本語では他動詞の目的語を表す格（対格）は普通、ヲ格で表される。しかし日本語のヲ格はそれ以外にも、以下のように場所や状況、時の用法を有していることは周知の事実である。

⑴　8時に家を出る。(場所：起点)

⑵　橋を渡る。(場所：経路)

⑶　太郎が雨の中を行く。(状況)

⑷　夏休みを軽井沢で過ごす。(時)

これらの用法ではヲ格が用いられているが、統語論的、及び意味論的な理由から、一般的にはこれらのヲ格を対格と呼ぶことには問題がある。統語論的な理由とは、その動詞が目的語 (object) を伴うか、受動態化 (passivization) が可能かという点である。意味論的な理由とは、「他動性（transitivity)」の程度、すなわち動詞によって表される行為が何らかの他者なる対象に向けられているかどうか、そして向けられているならば、行為がその対象にどの程度影響を及ぼすかという点についての話者の認知である (池上　1993)。上の⑴〜⑷は統語論的に見ても目的語を持っておらず、受動態化も不可能であり、また意味論的な面からも、場所や時間を表すヲ格との間に他動性が働いているとは考えにくい。しかしその一方で、ヲ格の場所や状況、時の用法と、対格の用法とを同音異義語と考えるのにも無理がある。

認知言語学では意味と形式の対応関係を重視する立場から、ヲという形式を共有しているこれらの用法は、何らかの意味 (スキーマ的意味) を共有しつつ、プロトタイプ (prototype) を中心にして一つの放射状カテゴリーをなすと考えている。ここでプロトタイプとは、あるカテゴリーの中で、より中心的で、そのカテゴリーを代表すると思われる成員をいう。またスキーマ（schema）とは、カテゴリーの全成員が共有する非常に抽象的な規定である。

本稿はヲのこれらの用法が、①何をプロトタイプとして、②どのようなスキーマ的な意味を共有し、③どのような関係で結ばれ、放射状カテゴリーをなしているかといった問題について、認知言語学的観点を用いて考察することを目的としている。

2．先行研究

既に2稿で述べたように、対格に関する認知言語学的研究としては、Langacker (1991 a, 1991 b）が動詞の他動性と関係づけながら、プロトタイプとスキーマの両面から特徴づけを行っている。それによれば、他動性にはプロトタイプ的なもの（break、hit など）を中心と

した放射状カテゴリー構造が見られ、知覚経験（see、hear など）、対称的関係（resemble、intersect など）などの拡張例（非プロトタイプ）では順次他動性が薄れていき、それに伴って動作主（AG）や被動作主（PAT）という主格、対格のプロトタイプ的特性はスキーマ化していく。その結果、主格、対格すべてが共有するスキーマ的特性とは、「２つの参与者間の何らかの非対称的関係において、第一の際立ちが与えられた参与者（トラジェクター：tr）を表す格が主格、第二の際立ちが与えられた参与者（ランドマーク：lm）を表す格が対格」といった抽象的なものとなるとしている。他動性、主格、対格の概念は⑸～⑺のようになる。

⑸　他動性

プロトタイプ：動作主（AG）と被動作主（PAT）から成立するエネルギー授受関係

スキーマ：２つの参与者間にある何らかの非対称的関係

⑹　主格

プロトタイプ：動作主（AG）を表す格、プロファイルされた非対称的関係の先頭

スキーマ：第一の際立ち（tr）を与えられた参与者を表す格

⑺　対格

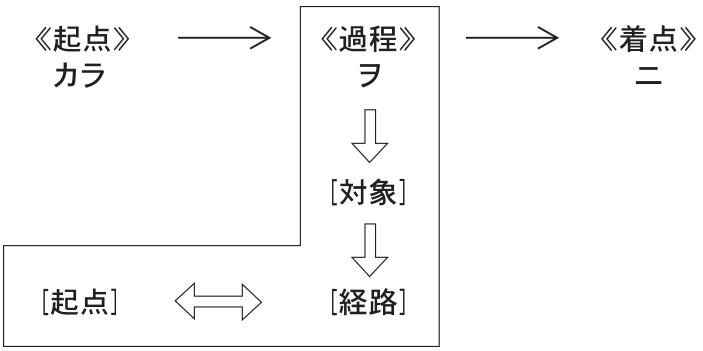
プロトタイプ：被動作主（PAT）を表す格、profile された非対称的関係の末尾

スキーマ：第二の際立ち（lm）を与えられた参与者を表す格

日本語のヲ格に対する認知言語学的研究としては、菅井（1998，1999）、森山（2000 a，2001 b，2003 a）などがある。

菅井（1998，1999）では、ヲ格の多義性のうち、空間（場所）のヲ格に対し、対格との関係から統一的な記述が試みられている。それによればヲ格は次のように特徴づけられている（図１参照）。

図１　対格における［対象］［経路］［起点］の関係（菅井 1999：80）



①　ヲ格は働きかけの授受という面でガ格の対極にあり、図１のように「起点→過程→着点」といったスキーマにおける「過程」をプロファイルする。なお「起点」、「着点」はそれぞ

れカラ格、ニ格によってプロファイルされる。

② ヲ格の「経路」や「起点」の用法は、ヲ格の用法のうちでも拡張された用法である。「過程」が空間次元において実現されたものが「経路」の用法であり、「過程」の中で特に「起点」の側に焦点が当てられたものが「起点」の用法である。

菅井の一連の研究は、場所のヲ格についての詳細な分析がなされている点で評価されるものの、対格に関するその他の研究と比べ、その特徴づけをかなり異にしている。それはヲ格の特徴づけを行う際に、本来「移動」のイメージ・スキーマである「起点→経路→着点」を、「動作」のイメージ・スキーマへと拡張するために「起点→過程→着点」と書きかえ、それをベースとしてヲ格を論じていることに原因があると思われる。ヲ格のプロトタイプは菅井も論じているように「対格」の用法であり、移動の「経路」や「起点」は拡張的用法である。従って「起点→経路→着点」という「移動」のイメージ・スキーマをプロトタイプの「対格」用法に拡張するのは本末転倒であり、無理が生じざるをえない。その証拠に対格の用法においては、例えば「太郎は次郎を殴った。」「太郎はご飯を食べた。」などのように、普通「起点」や「着点」がカラ格、ニ格として共起しないことが多い（もちろん対格用法の中には、モノの移動を伴う授受動詞が用いられた「太郎は東京から花子にプレゼントを送った」のように、「起点」や「着点」が共起するものもある）。

つまりここで前提とされている上述のイメージ・スキーマは、やはりヲ格の拡張的な用法である「経路」の用法で典型的にベースとなりうるもので、これをヲ格全体のイメージ・スキーマとするには無理があると考えられる（例えば菅井（1998，1999）で引用されている「経路」の用法「太郎が国道１号線を大阪に向かった。」「宇宙の彼方から彗星が軌道上を地球に接近しています。」などでは「起点→過程（経路）→着点」がベースとなりうる）。

森山（2001 b，2003 a）は Langacker（1991 a，1991 b）の立場を引き継ぎ、日本語のヲ格とニ格の意味構造について論じている。それによれば、ヲ格とは「ガ格を起点とする動力の領域内にあり、ガ格と動力連鎖で結ばれている参与者」を表す格、ニ格とは「ガ格を起点とする動力の領域の外にあり、ガ格とは動力連鎖で結ばれていない参与者」を表す格であるとしている（次の「３．分析」でさらに詳述する）。本稿ではこの立場を継承、発展させ、プロトタイプ的な対格の用法からどのように場所や時の用法が拡張していったのかを明らかにする。

3．分析

3．1　ヲ格のプロトタイプ

日本語のヲ格には以下のような用法がある[16]。

①　対格用法：「子供を殴る」「家を建てる」「本を貸す」「母を恋しがる」

②　場所格用法：

　a）起点を表す：「駅を出る」「故郷を去る」「大学を卒業する」

　b）経路を表す：「道を渡る」「駅を通過する」「空を飛ぶ」

③　状況格用法：「太郎が雨の中を行く」「豪雨の中を敵と戦った」

④　時格用法：「思春期を経て大人になる」「4年間を仙台で過ごした」

これらの中で、ヲ格のプロトタイプの用法は対格の用法であり、場所格、状況格、時格の用法はそれからの拡張としてとらえられるであろう（森山： 2001 b)。本稿では前述のように、ヲ格の用法のうち、プロトタイプである対格の用法の特徴づけは、Langacker (1991 a, 1991 b）や森山（2001 b，2003 a）を踏襲することにする。即ちヲ格の対格用法を以下のように考える。

①　プロトタイプ的特性：他動性を持つ動作における被動作主（PAT）を表す。これはガ格を起点とする動力の領域内にある従属的な参与者で、かつガ格と動力連鎖で結ばれ、ガ格からの動力により何らかの変化を被る受動的参与者である。

②　スキーマ的特性：何らかの非対称的関係にある二つの参与者間において第二の際立ちが与えられた参与者（lm）を表す（第一の際立ちが与えられた参与者（tr）はガ格で表す)。

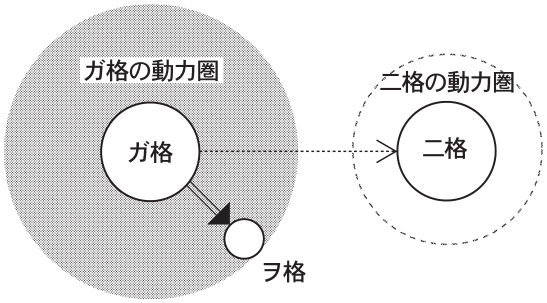
森山 (2003 a) では、図2のように、ガ格を起点とする動力連鎖により、ガ格を起点とした動力の及ぶ領域というものが認知的にとらえられ、それがヲ格とニ格の使用の別を決定していると述べている。すなわちガ格を起点とした動力の領域内にあるものはヲ格、領域外にあるものはニ格で表現するというのである。このことから、動詞がより従属的な対象を共起させる時にはヲ格、非従属的な対象を共起させる時にはニ格を取りやすく、また対象が人の場合にはニ格になりやすく、モノが対象の場合にはヲ格になりやすいといった傾向性が生まれてくる[17]。

具体例を挙げれば(8)のように、一般に使役文ではヲ格を用いると使役主の強制の意味が強くなり、ニ格を用いると被使役動作主の自主性の意味が強調されると言われている（Langacker 1991 a：411）が、ヲ格はガ格を起点とした動力の影響下に置かれ、従属的である一方、ニ格はその動力の影響下には置かれておらず、能動的であるといった、ガ格の動力の影響との関係で説明が可能であるという。また(9)で遠くに望む「山（頂)」はニ格、既に足元に

16　『日本語教育事典』ではこの他使役文における使役の対象を表す用法が挙げられている。これは自動詞が使役文では他動性を持つようになることから、①が拡張されたものとして①に含めることが可能であるため、本稿では①に含めた。

17　但し両カテゴリーの境界はファジーであり、動詞との共起は慣習にもよる部分もある。

図 2　ガ格の動力範囲とヲ格、ニ格（森山 2003 a）



ある「斜面」はヲ格で示されること、⑽で一般に「乗る」対象はニ格で表されるが、より乗り手（ガ格）の力の支配下に置かれた「乗り回す」のような場合では、ヲ格で示されるようになることなども、同様にガ格の動力の影響との関係で説明が可能であるとしている。

⑻　a．子供を働かせる。　　b．子供に働かせる。

⑼　a．山に登る。　　b．斜面を登る。

⑽　a．オートバイに乗る。　b．オートバイを乗り回す。

さらに（11－c）で「学生」がニ格、「英語」がヲ格で表されるようになるのも、「英語」は「教える」という動力連鎖の直接的な支配を受け、受動的であるためにヲ格をとるのに対し、「学生」は「英語」に比べ、主体性、能動性を持ち、動力連鎖の支配を受けていないためにニ格をとると説明している[18]。

⑾　a．英語を教える。　　b．学生を教える。

　　c．学生に英語を教える。

同様に、森山（2003 a）では触れられていないが、⑿⒀で「紙」「彼女」がニ格、「字」「年賀状」がヲ格で表されることも、ガ格からの動力連鎖の支配の程度の比較により説明できる。

⑿　彼が紙に字を書く。

⒀　彼が彼女に年賀状を送る。

3．2　場所のヲ格

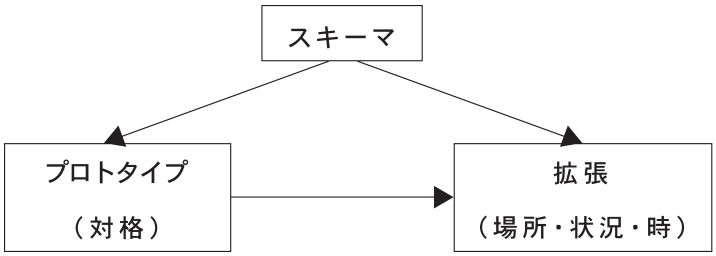
上述したように場所のヲ格は対格の用法からの拡張と考えられるが、図 3 のように、拡張にはプロトタイプの用法との間に何らかのスキーマの共有がなければならない。

では共通のスキーマとは何であろうか。それはヲ格で表される「場所」が「動作主（ガ格）を起点とする動力連鎖で結ばれ、その動力の領域内（動力連鎖の終点）に置かれている」と

18　動詞の中には「頼る」などのようにニ格、ヲ格の両方が共起するものもある。例えば「同郷の先輩を頼って生活する」ではヲ格が共起し、「同郷の先輩に生活を頼る。」ではニ格が共起している。これは後者の場合には、（14－c）のようにより受動的な「生活」がヲ格で表された結果、意志を持ち主体性、能動性を持った「同郷の先輩」がニ格になったと考えることができる。

いうことであろう。しかし動力連鎖は普通、「モノ」としての参与者間でなされるものである。例えばヲ格の対格用法での動力連鎖とは、プロトタイプとして動作主（AG）と被動作主（PAT）という2つの参与者間でなされるものである。従ってヲ格の場所用法の場合には、メタファー変換により「移動」が「動作」的にとらえられた結果、「場所」が「モノ（参与者）」的にとらえられていると考えることができる。

図3　ヲ格の意味拡張とスキーマ



次に移動の「起点」、「経路」はヲ格で表され、「着点」はニ格で表される理由を考えてみたい。

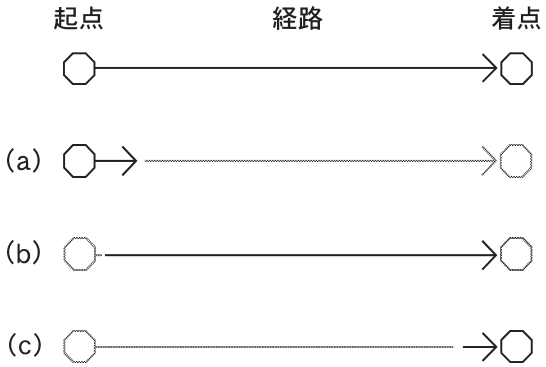
図4は「起点からの移動」、「経路の移動」、「着点への移動」の用法で用いられる動詞がプロファイルする部分の違いを示している。

⑭　彼が駅を出る。　彼が町を去る。　（起点）

⑮　彼が道を渡る。　彼が国道を通る。　（経路）

⑯　彼が駅に行く。　彼が家にやってきた。　（着点）

図4　移動の動詞のスキーマとプロファイルされる部分



⑭のようにヲ格が「起点」用法で用いられる動詞は、(a)のように移動に起点を持っている動詞で、起点がプロファイルされヲ格で表され、移動や着点は背景化する。また⑮のように

ヲ格が「経路」用法で用いられる動詞は、起点や着点を持っている場合と持っていない場合とが存在するが、いずれにしても(b)のように起点や着点はプロファイルされず、その経路がプロファイルされヲ格で表される動詞である（起点や着点をプロファイルする際にはそれらを表す格を用いて明示する）。さらに⒃のようにニ格が「着点」用法で用いられる動詞は、(c)のように移動の着点を持ち、それがプロファイルされニ格で表される動詞である。これには移動の経路もプロファイルされている「行く」「やってくる」などの動詞のほかに、移動の経路はプロファイルされていない瞬間動詞の「着く」などの動詞が含まれる。

表１はヲ格の場所格の各用法（起点、経路）とニ格の着点用法における動作と場所との動力連鎖成立の関係を表したものである。⒁の起点の用法では、「出る」「去る」という移動の動作が始まった時点で、すでにガ格で表わされた動作主とヲ格で表された場所「駅」「町」との直接的関係（動力連鎖）は成立している。また⒂の経路の用法でも、「渡る」「通る」という動作が始まった時点で、ガ格で表わされた動作主とヲ格で表された場所「道」「国道」との直接的関係（動力連鎖）は成立している。一方⒃の着点の用法では、「行く」「やってくる」という移動が進行している時点では、ガ格で表わされた動作主とニ格で表された場所「駅」「家」との直接的関係（動力連鎖）は未だ成立していない。動力連鎖が成立するのは動作が完了する瞬間（到着時）である。

表１　場所格各用法における動作と場所との動力連鎖成立との関係

動作のアスペクト ／ 用法	●―――――――――――――――――――→		
	開始時	進行中	完了時
起点（ヲ格）	成立	＜成立済＞	
経路（ヲ格）	成立	＜成立中＞	
着点（ニ格）		＜未成立＞	成立

このようにヲ格が用いられる場所（起点・経路）の用法では、動作の進行中に既に動作連鎖は成立しており、ゆえに「その場所（起点・経路）はガ格からの動力圏内にある」と考えることができるのに対し、ニ格が用いられる着点の用法では、動作が進行している時点ではまだ動力連鎖は成立しておらず、ゆえに「(動作進行中には）まだその場所（着点）はガ格からの動力圏内には存在しない」と考えられるのである（表１の「進行中」の欄を参照)。

以上のように「その場所がガ格からの動力圏にすでに置かれていると認知されているかどうか」といった認知的な差が、ヲ格を用いるか、ニ格を用いるかの違いとなって言語化されていると考えられる。そして場所のヲ格の起点、経路用法がプロトタイプである対格の用法との間で共有しているのは、「動作主（ガ格）を起点とする動力連鎖が結ばれ、その動力の領

域内（動力連鎖の終点）に置かれている」というスキーマである。対格の用法と異なる点は、ヲ格が「モノ（参与者）」ではなく「場所」であること、つまり「場所」が「モノ」としてメタファー的にとらえられた結果「モノ」の拡張として「場所」が理解されていることである[19]。

最後に場所がヲ格で表された場合（例えば「道を歩く。」）とデ格で表された場合（例えば「道で遊ぶ。」）との間で、動力連鎖と場所との関係にどのような違いがあるのかについて述べておきたい。

ヲ格の場所用法では「場所」が「(動力連鎖の終点としての）モノ」の拡張としてとらえられている。従ってその分、ヲ格で表された場所は、背景格のデ格[20]で表された場所に比べ、動力連鎖との関係は直接的なものとなる。例えば「起点」用法に用いられる動詞は、ヲ格で表された場所との相互作用が「移動」を引き起こし、その結果その場所が「起点」となるのであり、「経路」用法に用いられる動詞は、ヲ格で表された場所との継続的な相互作用が「移動」を引き起こし、その結果その場所が「経路」となると考えられる。このように場所格としてヲ格を共起させる移動動詞などの動詞は、場所との直接的な動力連鎖の結果として動作が引き起こされたと解釈できるために、ヲ格で表される[21]。これに対し通常の動詞では、場所はその動作が行われる背景となるにとどまるため、背景格のデ格で表されるのである。

3．3　状況のヲ格

「状況」のヲ格は前節の場所の用法の「経路」が抽象化し、「状況」となったものであると考えることができる。

例えば⑰では、「行く」という移動に対し、「雨の中」という「状況」が抽象化された「場所（経路）」を表している。⑱も同様に「豪雨の中」という「状況」が抽象化された「場所」を表している。但し⑱では動詞（戦う）が移動動詞ではない。しかしながら「動作（戦う）のプロセス」がメタファー的に移動としてとらえられ、その結果プロセスの経過が、「雨の中」

19　影山（2001：55-59）では、経路のヲ格が対格と同じ格標識で示されることについて、Dowty（1991）の「漸増的変化対象」という考え方を用いて説明している。これは、He read the book.の the book や、He ate a cake.の a cake のような対格で表されたものは動詞が表す行為により、少しずつ「消化」されていくのと同じように、経路を表すヲ格でも、例えば「山道を歩く。」で「山道」は「歩く」という動作により少しずつ「消化」されていくと見ることができ、そのように考えれば、同じように「直接目的語」という姿を取ることも自然の結果であると述べている。またここでは、「漸増的変化対象」は往々にして「アスペクト的な完結性」が現れるとしている。ここでいう「消化」は本稿の「動力連鎖の成立」の結果引き起こされたものと考えることができ、「アスペクト的完結性」は、動力連鎖が「すでに成立」したという本稿の考えに通じるものである。

20　デが背景格であり、ガ格を起点とする動力連鎖と直接的な関係を結ぶことができず、動作の場所などを背景的に示すことについては、森山（2002 a）を参照。

21　日本語の移動動詞の場合には、「移動」とそれが関わる「場所」という関係が、慣習的に「動作」とそれが関わる「対象」との関係に準ずるものとして受け止められ、それがヲ格表示として慣習化されたということができる。このように「移動」と「場所」との関係を、「動作」とその「対象」との関係に準ずるものとして考えるかどうかはその言語の慣習による部分も否定することができない。

という「状況＝経路」の中で行われたと解釈することができる。ゆえに「状況」のヲ格の用法は、「場所（経路）」の用法に準ずるものとしてとらえることができる。

⑰　太郎が雨の中を行く。

⑱　豪雨の中を敵と戦った。

なお⑱は、デ格を用いて「豪雨の中で敵と戦った。」とすることも可能である。しかしこの場合に「豪雨の中」はデ格の背景格としての性格上、「戦う」という動作が行われた場所を、あくまで「背景的」に示したものにすぎず、ヲ格のように「戦う」動作をプロセスとして把握し、その「プロセスの（抽象化された）経路」を表すといった意味合いはない。またデ格は背景格として場所の提示であるために動作との関係は弱いが、ヲ格で表された場合には動作と場所（状況）との関係は直接的なものとして表され、「そのような状況を克服することによってはじめてプロセスが成立していく」といった意味合いが示されている。

3．4　時のヲ格

前節でも述べたが、一般に動力連鎖は「モノ（参与者）」同士の間でなされるものであるため、動作主（ガ格）と「時」との間にも動力連鎖が行われているとは考えがたい。従って時がヲ格で表された場合には、場所や状況の用法の場合と同じく、「時」が「モノ（参与者）」としてメタファー的にとらえられ、動力連鎖が解釈されているものと考えることができる。⑲では時のヲ格、⑳では時のニ格が用いられているが、両者を比較してみると、ガ格を起点とする動力連鎖に違いが感じられる。

⑲　思春期を経て大人になる。　4年間を仙台で過ごす。

⑳　8時に家を出た。

⑲ではガ格の参与者（これらでは省略されている）が関わり合う「時」がヲ格で表されている。「思春期を経て大人になる。」では動詞「経る」によって表された事態において、「思春期」という時が、ガ格と直接的な関わり合い（動力連鎖）を結んでいる。言いかえればガ格で表された動作主が「思春期」に対して関わり合うことで「経る」という動作（移動）が実現したのである。そして関わり合った結果、時としての「思春期」はもはや客観的な対象ではなく、ガ格の参与者が大人になることに何らかの役割を果たしたという意味でガ格の中に内在化され、（大人になった）ガ格参与者の一部となっている（図5参照）。

「4年間を仙台で過ごす。」も同様で、「過ごす」によって表された事態において、「4年間」という時が、ガ格と直接的な関わり合い（動力連鎖）を結ぶことではじめて「過ごす」という動作が実現し、同時にガ格で表された参与者に取り込まれ、その一部となるのである。

これに対し⑳では事態が行われた時がニ格で表されている。「8時に家を出た。」では、動詞「出る」によって表された事態において、ガ格と直接的な関わり（動力連鎖）を結んでいるのはヲ格で表された場所「家」である。言いかえればガ格で表された動作主は、直接的に

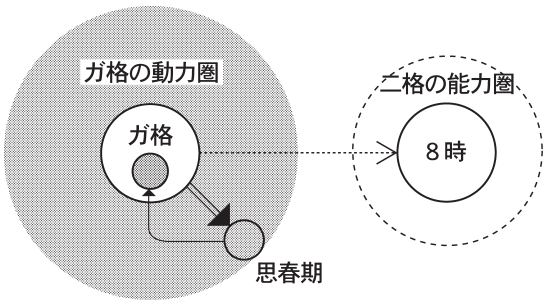


図 5　時のヲ格とニ格

は「家」に対し「出る」という動作を行い、動力連鎖を結んでいるのである。これに対し、時を表す「8時」はガ格を起点とする動力連鎖の外側にあって、動力連鎖とは直接関わりを持つことなく自律的に対峙し、過ぎ去っていく（森山 2003 a）。

このようにヲ格で表された時はガ格と直接動力連鎖を結び、その終点となっており、最終的にガ格に取り込まれていくという意味で、ガ格からの動力圏内にあるが、ニ格で表された時はガ格からの動力の支配を受けずに対峙し、その関係はガ格に対して自律的である。こうした差が時の用法に関し、ヲ格、ニ格の違いとして言語化されていると考えられる。そしてヲ格の時の用法は、プロトタイプである対格の用法との間で「動作主（ガ格）を起点とする動力連鎖が結ばれ、その動力圏内（動力連鎖の終点）にある」というスキーマを共有しているのである。対格の用法と異なる点は、ヲ格が「モノ（参与者）」ではなく、「時」であるという点であり、その点は拡張されて理解されているのである。別の言い方をすれば、「時」が「モノ（参与者）」としてメタファー的にとらえられ、「モノ」的に扱われているのである。

4．まとめ

日本語ヲ格の多義とその意味構造について見てきた。要約すれば以下のようになる。

① ヲ格のプロトタイプは対格の用法で、場所や状況、時の用法は対格の用法からの拡張である。

② ヲ格の場所、状況、時の用法は、場所や状況、時をメタファー的に「モノ（参与者）」としてとらえたもので、「動作主（ガ格）からの動力連鎖が結ばれ、その動力圏内（動力連鎖の終点）に置かれている」というスキーマを対格の用法と共有している。

③ 図 4 の図式は対格と与格というプロトタイプとしてのヲ格、ニ格だけでなく、場所格や状況格、時格のヲ格、ニ格の違いをも示すスキーマとなっている。

このような結論は日本語教育にも応用が可能であると思われる。

杉村（2002）では格助詞ニ、カラ、ヘ、マデ、デ、トの 6 つの格助詞について、それらの格助詞が共有するスキーマを提示し、「この方法によれば、学習者は格助詞の多様な意味役割を意味的ネットワークで理解できるため、機械的な暗記に比べて記憶に負担がかからなくて

すむという利点がある。」（p.39）と、日本語教育へ応用することの意義を主張している。杉村（2002）では格助詞ヲは研究対象に含まれていないものの、ヲについてもスキーマの提示はヲの意味用法の習得を促進することが期待できる。即ち日本語のヲ格にはプロトタイプとしての対格の用法のほかに、場所や状況、時の用法を持ち合わせているが、本稿で見たような共通のスキーマやプロトタイプとしての対格用法との関連を示してあげることにより、場所や状況、時の用法を対格からの拡張といった形で、学習者は比較的容易に習得ができるようになると思われる。また学習者にとって紛らわしく、習得が難しいヲとニの意味用法の違いを理解するうえにも役立つことが期待できる。ではこのようなスキーマを日本語学習者にどのような形で提示していけばいいのか、これについては別の稿で論じることとしたい。

The Semantic Structure of the Japanese Case Particle *wo* : Cognitive Linguistic Perspective

The purpose of the study is to argue the semantic structure (the radial category structure) of the Japanese case particle *wo* as a polysemy from cognitive linguistic perspective.

I have found the results with regard to the semantic structure as follows.

1. The prototypical usage of *wo* is accusative.
2. The usages of location, situation and time are extended from those of accusative, as a prototype.
3. The usages of location, situation and time are extended by construing them metaphorically as things; *mono*. They have a schema in common, that is to say *wo* is connected with the action chain from an agent (marked *ga*), and located in its power area (at the tail of the action chain).

By construing the usages of location, situation and time as the extension of the prototypical accusative ones, we can expect to lighten the burden imposed on the Japanese learners when they will learn the case particle *wo*.

認知主体の把握の仕方と格助詞ニの多義構造

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．はじめに

格助詞ニは⑴～⑽のように、授与や動作の相手を表す用法、何らかの移動の着点を表す用法、授与や動作の主体を表す用法、原因を表す用法、位置や時間を表す用法、所有や知覚などの主体を表す用法など、多くの意味用法を有している。

⑴　友だちに本をあげる。(授与の相手)
⑵　学生に日本語を教える。(動作の相手)
⑶　机の上に本を載せる。(移動の着点)
⑷　友だちに本をもらう。(授与の主体)
⑸　先生に日本語を教わる。(動作の主体)
⑹　台風に家を飛ばされる。(原因)
⑺　机の上に本がある。(位置)
⑻　10 時に家を出る。(時間)
⑼　私に子供がある。(所有の主体)
⑽　私には富士山が見える。(知覚の主体)

移動の方向性という点に注目して考えると、⑴～⑶のように移動の「着点」を表すものや、⑷～⑹のように「起点」を表すもの、さらには⑺～⑽のように移動が認めにくいものなどが存在する。また移動が認めにくいものの中には、⑺、⑻のように空間的位置や時間的位置など、何らかの位置を表すもののほか、⑼、⑽のように所有、知覚など、何らかの経験の主体を表すものなどが存在する。したがって格助詞ニの意味用法は①移動の着点、②移動の起点、③存在の位置関係、④経験の主体という 4 つのカテゴリーに大別することができる。しかしながら認知言語学の観点からの先行研究を見ると、次の先行研究で示すように「着点」を共通の意義素としたり、プロトタイプと考えたりするものがほとんどで、「着点」のみに関心が向けられているという点において、その分析には問題を内包していると言わざるをえない。

認知言語学的な観点からすれば、多義語の様々な意味用法は、プロトタイプを中心として、あるスキーマを共有しつつ一つのカテゴリーを形成していると考える。多義語の様々な意味用法は、何らかの動機づけに基づいてプロトタイプからの拡張によって生じたものであると考えることができる。

本稿では格助詞ニが何ゆえこのような意味の多義構造を持っているのかについて考察することを目的としているが、このような考察を行うにあたり、認知言語学の観点、とりわけ認知主体の把握の仕方との関係からの分析が有益であるとの考えから、格助詞ニの多義構造と

認知主体の把握の仕方との関係について述べたものである。

2．先行研究

言うまでもなく格助詞ニは機能語の一つである。従来の言語学の見解の中には語を内容語と機能語に分類し、機能語には意味はないという見解もある。しかし認知言語学では「すべての言語構想は記号的である」ことを前提として、すべての言語形式には意味があるとの考えを持っており、そのため格助詞のような機能語にも意味があるという立場をとっている（Langacker 1991 a：282，a 991 b：209）。

ニ格の意味用法に関する研究は多いが、このうち認知言語学的観点から多義語としての意味構造に触れたものとしては、国広（1986）、堀川（1988）、杉村（2002）、菅井（2000，2001 a）、森山（2000 a，2001 b，2003 a）などがある。

国広（1986）では、ニに「密着の対象を示す」という意義素を仮定している。これは「一方向性を持った動き」と、「その動きの結果密着する対象物あるいは目的」とで表される全体を表しているとしている。しかし現代語のニの「人になぐられる」、「人に教えてもらう」などの表現では、別の意義素を認めざるをえないことも語っている。

堀川（1988）では、ニの意義素を「着点性」のものに限定する立場をとっている。⑾～⒁のようにニが「起点」的な意味を有する場合もあるが、その場合にも、ニは「密着の対象を表わす」がゆえに、「着点」の意味を共有するとしている。さらに杉村（2002）はこの堀川（1988）の立場を踏襲しつつも立場をやや異にし、「着点」がプロトタイプ的な意味であるとしている。

⑾　太郎は次郎に殴られた。

⑿　太郎は花子にプレゼントをもらった。

⒀　太郎は花子に部屋を掃除してもらった。

⒁　太郎は持病に苦しんでいる。

ここで「密着」とは何かというと、⑾～⒁においてガ格は能動性が低く（受動性が高く）、自らだけでは動作が成立しないことから、動作を引き起こすもの（ニ格）に「密着しなければ動作が成立しないという」性質をさしているという。

しかしここで何ゆえ、「能動性が低く（受動性が高く）、自らだけでは動作が成立しない」というガ格の性質をあえて「密着」という用語を用いて表現したのであろうか。それはニ格の「起点」用法の場合にも、ガ格が「ニ格に対する密着性」を持っていることを示し、ニ格の用法すべてに「着点」としての共通の意義素を見出そうとしたためである。しかしガ格のニ格に対する「密着性」は「受動的な密着性」であると考えたほうが自然である。だとすれば、ガ格はやはり「着点」であり、それに対峙するニ格は、「起点」となってしまう。

菅井（2000，2001 a）でも、移動の点では着点の用法がプロトタイプであり、起点の用法は着点の用法からの拡張であるという立場をとっている。着点用法がプロトタイプである根拠

として、例えば「花子が先輩に携帯電話を借りた。」のような文で、借りる前に先輩への花子の働きかけが先行しているように、起点用法の場合も「ガ格→ニ格」の働きかけが前提になっていることが述べられている。しかし「花子が先輩にプレゼントをもらった。」のような文では、必ずしも「ガ格→ニ格」の働きかけが前提になっているとは考えにくい。

森山(2000 a，2001 b)では、Langackerの研究を参考にしつつ、ニ格はプロトタイプとして能動的参与者（経験主)、すなわち人（有情物）であり、ガ格とニ格との間にモノの移動があるが、その方向は基本的にガ格からニ格であるとしている。また森山(2003 a)ではニ格すべての用法が共有するスキーマに「着点」といったものを考える限界を認めて、「ガ格→ニ格」をニ格の用法すべてが共有する「スキーマ」と考えることはできず、「着点」という意味は単に「移動の方向性」の「プロトタイプ」と考えるべきであると述べている。そしてニ格用法のプロトタイプは「彼に手紙を送る」といったような与格の用法であり、ニ格の用法すべてが共有するスキーマは「ガ格に対する対峙性（独立性)」であるとしている。

このようにこれまでの先行研究のほとんどでは、ニの様々な用法は、「着点」としての意味を何らかの形で共有しているとしているか、もしくは共有はしていないものの、プロトタイプであるとしている。

3．事態に対する把握の仕方とニ格の放射状カテゴリー構造

ここでは以上のような認知言語学的な観点を、日本語の格助詞の意味研究に応用し、格助詞ニが持っている「移動の着点」、「移動の起点」、「存在の位置関係」、「経験の主体」といった意味用法が、認知主体が事態をとらえる2通りの把握の仕方「把握のプロセス性」、「把握の主観性」によって生み出されたものであることを見ていく[22]。

3.1　事態に対する2通りの把握の仕方

3.1.1　プロセス的把握と存在論的把握

日本語には大別すると、事態をプロセス的に把握し言語化する場合と、事態を存在論的に把握し言語化する場合とがある。なお、本稿で用いられている「プロセス的（processual)」、「存在論的(ontological)」の用語は、菅井(2002)で用いられている「過程的構文(processual construction)」、「存在論的構文（ontological construction)」を大筋において踏襲している。

①　プロセス的把握（processual perspective)

事態を動力連鎖による動的なプロセスとしてとらえるもので、格助詞ニの場合「移動の着点」、「移動の起点」の用法がこれに該当する。

22　「把握のプロセス性」、「把握の主観性」という考え方は、認知言語学的な考え方に基づいているが、とりわけ前者は菅井（2002)、後者は池上（2000）の先行研究をヒントにしている。

② 存在論的把握（ontological perspective）

事態をプロセスとしてではなく、存在論的に静的にとらえるもので、格助詞ニでは「存在の位置関係」、「経験の主体」の用法がこれに該当する。「存在の位置関係」用法は、本来存在論的な事態を客観的把握により存在論的にとらえるものであるが、「経験の主体」用法は、本来プロセス的な事態を認知主体の見えとして主観的にとらえた結果、存在論的にとらえられ、言語化されたものである。例えば「私が本を持つ。」という所有文は、認知主体（私）の見えとしては「(私に) 本がある。」というように存在論的に把握、言語化され、存在文ともなる[23]。

3.1.2 客観的把握と主観的把握

また事態はその主観性の程度により、より「客観的な把握」と、より「主観的な把握」とに区分できる。

① 客観的把握（objective perspective）

「認知主体が事態をどのようにとらえたか」といった主観的要素が反映されないように言語化されたもので、格助詞ニの場合には「移動の着点」、「存在の位置関係」の用法がこれに該当する。このうち「移動の着点」用法はプロセス的な事態をプロセス的に把握した場合であり、「存在の位置関係」用法は存在論的な事態を存在論的に把握した場合である。

② 主観的把握（subjective perspective）

客観的把握とは異なり、主観的把握は「認知主体が事態をどのようにとらえたか」といった主観的要素が何らかの形でより強く反映されて言語化されたもので、格助詞ニの場合には「移動の起点」、「経験の主体」の用法がこれに該当する。このうち「移動の起点」用法は、プロセス的な事態をプロセス的に把握したものである。プロセス的事態の把握においては、「移動の着点」用法の場合のように、動作主（AG）など、動力連鎖の最上流の参与者に焦点が当てられて tr となり、ガ格で表されるのが普通（無標）であるが、「移動の起点」用法では、認知主体の何らかの動機づけにより、被動作主（PAT）など、より下流に位置する参与者に焦点が向けられ言語化されるようになったもので、ここに認知主体の主観が反映されている。一方「経験の主体」用法では、客観的にはプロセス的な事態が、認知主体の見えとして存在論的に把握され、言語化されたところに認知主体の主観が反映されている。これらの場合では、本来ヲ格などで表されていたもの（被動作主、経験の対象など）が焦点化されてガ格で表される一方、本来はガ格で表されたもの（動作主、経験の主体など）が脱焦点化されてニ

23 「存在論的把握」の場合には「プロセス的把握」とは異なり、「存在の位置関係」用法における存在物（ガ格）と存在場所（ニ格）との関係や「経験の主体」用法における経験対象（ガ格）と経験主体（ニ格）との関係は、いわば図（figure）と地（ground）の関係となり、存在物や経験対象は図として最大の際立ち（tr）が与えられる一方、存在場所や経験主体は地としての役割が与えられ、第二の際立ち（lm）が与えられることになる。なお図と地という用語はゲシュタルト心理学の用語、tr、lm は Langacker の用語である。

格で表されるようになる[24]。

3.1.3　事態に対する4通りの把握とニ格

このように事態の把握には、それをプロセス的に把握するか否かにより、「プロセス的把握」、「存在論的把握」があり、さらに把握の主観性により、それぞれに「客観的把握」、「主観的把握」があるため、結局4通りの把握の仕方を生み出し、それに対応する形でニ格には4種類の用法が存在している。

①　移動の着点：客観的、プロセス的把握

「移動の着点」の用法は、プロセス的な事態を客観的に、プロセス的な事態として把握したものである。この場合には図1が示すように、事態は参与者間の動力連鎖によって成り立つ動的なプロセスとしてとらえられ、それら参与者の意味役割が格として言語化され、項となり節を構成していく。その結果、図2のようにプロファイルされた動力連鎖の最上流に位置するモノ（参与者）がtrとなり主格（ガ格）、最下流に位置するモノ（参与者）がlmとなって対格（ヲ格）で表されるようになる（典型的には「動作主（AG）」が主格、「被動作主（PAT）」が対格となる）。与格（ニ格）は図3のように、「目標領域の能動的参与者」として主格に対して対峙しつつ、⒂のような「授与」の場合にはモノの移動の着点、⒃のような「動作」の場合には動力移動の着点、⒄のような「移動」の場合にはモノや人の移動の着点といったように、何らかの移動の「着点」として存在することになる。

また⒅は移動の着点が抽象化し、目的を表すようになったもので、「映画館に行く。」のような具体的な着点用法から派生したものであると考えることができる。

さらに⒆は「変化」を「移動」のメタファーとしてとらえたもので、「変化の結果」が「移動の着点」として把握されたものである。これも「移動の着点」用法からの拡張としてとらえることができる。

⒂　友だちに本をあげる。（授与の相手）

⒃　学生に日本語を教える。（動作の相手）

⒄　机の上に本を載せる。（移動の着点）

⒅　映画に行く。（動作の目的）

⒆　一人前の大人になる。（変化の結果）

②　移動の起点：主観的、プロセス的把握

「移動の起点」用法は、「認知主体のとらえ方（perspective）」といった主観性がより色濃く反映された形でプロセス的事態を把握したもので、焦点の移動が起こり、能動態の受動化、

24　柴谷方良などが、ある種の経験者主語はニ格であるとしているのも、これらのニ格が主観的把握による脱焦点化により、本来ガ格で表されていたものがニ格で表されるようになったということを考えるとうまく説明がつく。

他動詞文の自動詞化など、言語化において変化が生じる。

受動文では、図１のように「動作主」など、プロファイルされた動力連鎖の最上流に位置し、本来最大の際立ちが与えられ (tr)、主格 (ガ格) で表されるものが、認知主体の特別 (有標) な動機づけの結果として、「被動作主」など、動力連鎖のより下流の参与者に焦点が向けられ (tr)、主格（ガ格）で表される。上流に位置する「動作主」や「原因」などは、日本語ではニ格で表されるようになる。その際、ニ格は、ガ格で表された参与者に対し「起点」として存在することになる。アゲルなどの授与動詞がモラウなどの受給動詞で表されるようになる語彙的ヴォイスの現象も同じようにとらえられる。

図１　能動文と受動文における動力連鎖の認知の仕方の違い

自動詞文では、他動的な事態の「主題 (TH)」部分に焦点が向けられて tr となり、ガ格で表される一方、本来の動力連鎖の能動的参与者である「動作主 (AG)」は言語化されないか、ニ格で表される。その際、ニ格はやはり、ガ格で表された参与者に対し「起点」として存在することになる。

能動文の受動文化に関しては、前者が無標の把握であり、後者が有標の把握といえるが、他動詞文の自動詞化に関しては、日本語は「主観的把握型」の言語と言われ（池上　2000)、「客観的把握型」の言語である英語などに比べれば、認知主体の主観が反映されやすく、他動詞文の自動詞化が起きやすい。

⑳は授与の対象（受領主）に認知主体の焦点が向けられた結果、授与の主体がニ格で表されたもの、㉑は動作の対象（被動作主）に認知主体の焦点が向けられた結果、動作の主体がニ格で表されたもので、前者の場合にはモノの移動の起点、後者の場合には動力移動の起点がニ格で表されている。同様に㉒では被害者、㉓では被影響者に認知主体の焦点が向けられた結果、それぞれの原因的な参与者はニ格で表されている。これらの場合でも、ニ格で表された参与者は動力連鎖の起点となっている。

⑳　友だちに本をもらう。(授与の主体)

㉑　先生に日本語を教わる。(動作の主体)

㉒　台風に家を飛ばされる。(原因)

㉓　都会の絵の具に染まらないで。(原因)

③　存在の位置：客観的、存在論的把握

事態を存在論的に把握した「存在の位置関係」の用法は、㉔～㉗のように、空間や時間、さらにはある座標上での位置関係を示す用法で、存在の主体が tr としてガ格で表されるのに対し、ニ格はその位置関係を示す基準点、すなわちランドマーク（lm）の役割を果たしている。両者の関係は図 2 のように、「ガ格の参与者をニ格との関係によって位置づける」という関係である。例えば㉔では「本」を空間的座標上の「机の上」によって位置づけるという関係である（図 2 ⒜参照）。また㉕は「家を出る」という事態を時間的座標上の 10 時という点によって位置づけるということを示している（図 2 ⒝参照）。㉔や㉕では、ガ格はニ格の存在そのものにより位置づけられているが、㉖ではガ格（わが家）はニ格（学校）を lm とし、空間的座標上のある位置（近い位置）に位置づけられている（図 2 ⒸC参照）。また㉗ではガ格（この素材）がニ格（熱）を lm として強度の座標上のある位置に位置づけられている（図 2 ⒹD参照）[25]。

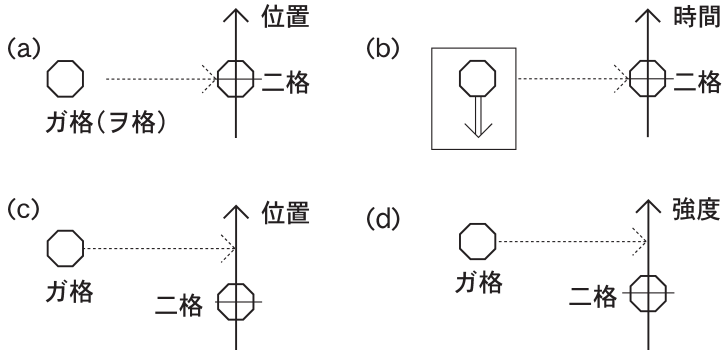
㉔　机の上に本がある。（空間的位置）

㉕　10 時に家を出る。（時間的位置）

㉖　わが家は学校に近い。（空間的位置の lm）

㉗　この素材は熱に弱い。（ある座標上の lm）

図 2　「存在の位置関係」の用法のスキーマ



「存在の位置関係」の用法ではガ格からニ格への「移動」というものはなく、相互に静的に対峙する関係となっている。これには典型的な存在文である「アル／イル文」のほか、同定文、形容文なども含まれる。同定文、形容文がデアル、クアルなど、アルを伴って表されることは、これらが存在文の一種であることを暗示している（金谷　2003）。

④　経験の主体：主観的、存在論的把握

「経験の主体」の用法は、客観的にはプロセス的である事態を、「主観的把握」の結果、存

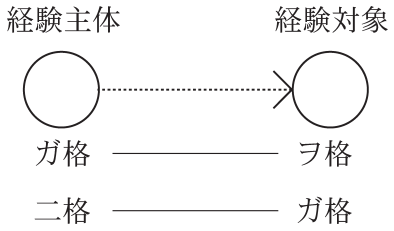
25　㉖や㉗では、tr と lm の関係は形容詞「近い」、「強い」で表されている。

在論的に把握したものである。これは「主観的把握」が、事態を客観的にとらえるのではなく、「認知主体が事態をどのようにとらえたか」をそのまま言語化するためである。

例えば「所有」の事態を例にとると、「客観的把握」では、所有は参与者間の動力連鎖により成立するプロセスとしてとらえられる（例：「私は車を持っている。」、「彼は車を持っている。」）が、ある認知主体（人）の「見え」としては、参与者間の動力連鎖は見えず、存在の位置関係としてとらえられる（例：「(私には）車がある。」、「彼には車がある。」）ことになる。すなわち「客観的把握」というのは事態を参与者間の動力連鎖としてとらえ、それらを言語化するのに対し、「主観的把握」は事態を認知主体の「見え」としてとらえ、経験主体と経験対象との関係を存在の位置関係として言語化するため、存在論的に言語化することになるのである。

図3が示しているように、「客観的把握」によりプロセス的事態をプロセス的に把握した「移動の着点」用法では、プロファイルされた動力連鎖の最上流に位置するものがガ格で表されたが、「主観的把握」によりプロセス的な事態を存在論的に把握した「経験の主体」用法では、認知主体の「見え」において最大の図（figure）として認知されたもの（経験対象）がガ格で表わされ、それに対峙して存在するもの（経験主体）がニ格で表わされるようになる。ここでニ格とガ格との関係は、動的なものではなく、認知主体によりとらえられた「位置づけの関係」(tr であるガ格が、lm であるニ格によって位置づけられる関係)で、「存在の位置関係」を表す用法と同様に単に静的に対峙する関係として存在している。

図3　経験的動作の事態と格標示



㉘はニ格の「所有の主体」の用法であるが、「私」の所有のドメインに所有の対象である「子供」が存在するという表現である。同様に㉙は「私」の知覚のドメインに知覚の対象である「富士山」が存在すること、㉚は「姉」の能力のドメインに能力の対象である「バイオリン」が存在すること、㉛は感情のドメインに感情の対象である「そのこと」が存在すること、というように考えることができる。その結果ガ格で表された経験の対象は、経験主体が持つ「所有」、「知覚」、「能力」、「感情」といった主観的な場（ドメイン）における「存在」として位置づけられている（この点についての詳細は菅井（2000）を参照）。

㉘　私に（は）子供がある。(所有の主体)

㉙　私に（は）富士山が見える。(知覚の主体)
㉚　姉に（は）バイオリンが弾ける。(能力の主体)
㉛　私に（は）そのことがうれしい。(感情の主体)

4．まとめ

本研究で考察してきた内容をまとめると以下のようになろう。

認知主体である人間は、外界を認知するにあたって、事態をプロセスとして動的に把握するか（プロセス的把握)、または存在として静的に把握するか（存在論的把握）のいずれかを選択している。

これら「プロセス的把握」、「存在論的把握」の双方に、認知主体の見え（perspective）との関わりの弱い「客観的把握」と、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」という把握の仕方が関与している。「移動の起点」、「経験の主体」の用法では、それぞれ「移動の着点」、「存在の位置関係」の用法に比べ、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」となっている。以上をまとめると表１のようになる。

表１　２通りの把握とニ格の意味との関係

	プロセス的把握	存在論的把握
客観的把握	移動の着点 (プロセス的事態)	存在の位置関係 (存在論的事態)
主観的把握	移動の起点 (プロセス的事態)	経験の主体 (プロセス的事態)

日本語の格助詞ニが着点・起点といった動的な用法と、単なる存在という静的な用法がある理由や、動的な用法に着点的な用法と起点的な用法という相対立する用法が存在する理由は、認知と言語との関係、すなわち人間の把握の仕方がどのように言語化に反映されるのかといった点からうまく説明することができる。すなわち格助詞ニの多義の背景には、日本語が事態に対し、「プロセス的把握」をする場合と「存在論的把握」する場合とがあること、「客観的把握」とともに「主観的把握」がなされやすい言語であることの２つが原因となっているのである。

最後に事態の把握の仕方に関して日本語と英語とを対照してみる。表１で、「移動の着点」と「移動の起点」の用法は、日英両語ともプロセス的事態がプロセス的に把握され、言語化されている[26]。また「存在の位置関係」の用法も、日英両語で存在論的事態が存在論的に把握

26　但し前章で述べたように、日本語の場合は英語に比べると他動詞文の自動化など、「主観的把握」用法である「移動の起点」用法が相対的に多くなるという違いはある。

され、言語化されている。問題となるのが、プロセス的事態としての経験的動作をどのように把握し、言語化するかという点である。この点で日英両語は把握の仕方を異にし、その結果言語化の仕方に差が生じている。すなわち英語では「客観的把握」をして、「プロセス的」に表現することが多いが、日本語ではむしろ「主観的把握」をして、「存在論的」に表現することが多い（西村　2000）。

経験的動作というものは、経験主体と経験対象との間に展開される客観的な動力連鎖を考えた場合、プロセス的事態であるとはいえ、他動性が希薄であり、具体的な動力連鎖といったものも存在しない(Langacker 1991 a、1991 b)。従ってプロセス的事態としては最も存在論的事態に近い周辺的な事態である。

一方経験的動作を経験主体の立場から主観的に見た場合には、経験対象だけが存在し、経験主体としての自己は、「自己の客体化」といった手続きをしない限り、客観的存在とはなりえない。具体的に言えば、「私が車を所有している」という事態は、私の立場からは単に「車がある。」ということであり、所有主としての自己を客体化してはじめて所有者としての自己が把握され、「私に（は）車がある。」ということになる。知覚も同様で、「私が富士山を見る」という事態は、私の立場からは単に「富士山が見える。」ということであり、自己を客体化してはじめて「私に（は）富士山が見える。」ということになる[27]。能力主体、感情主体としての用法も同様に考えることができる。これらは（私という）経験主体の所有する「主観的な場（ドメイン）」に、経験対象が、それぞれ所有的、知覚的、能力的、感情的な存在（対象）として位置づけられ、存在するという形でとらえられたものである。このように経験的動作を認知主体の主観的な「見え」としてとらえると、主観的ではあるが存在の有無といった存在論的な把握となる[28]。このようにプロセス的事態としては最も存在論的事態に近い経験的動作を日本語は存在論的にとらえ、言語化しているのである。

このようにプロセス的事態と存在論的事態のいわば境界に位置する経験的動作といったものを、どのように把握し、言語化するかで日英両語に差が生じている。プロセス的にとらえるのが英語であり、存在論的にとらえるのが日本語である。池上（1981）が英語を「スル型言語」であるとし、日本語を「ナル型言語」であるとしているのはこのようなことによる。スル型とは、事態を参与者とその動作（スル）としてプロセス的にとらえる把握の仕方を意味しており、ナル型とは、事態をその場に生起するものとして静的、存在論的にとらえるということである。また経験的動作を客観的にとらえてプロセス的に把握し、言語化するのが英語であり、主観的にとらえて存在論的に把握し、言語化するのが日本語である。池上(2000)で英語を「客観的把握型」言語、日本語を「主観的把握型」の言語であるとしているゆえん

27 「経験の主体」用法で経験主体を明示する場合に、とりたて助詞ハが必要なのも、経験的動作において経験主体はとりたてられない限り明示されないほうが普通であることを示していると思われる。

28 日本語で所有を「ある」で表現するのも日本語が経験的動作を主観的に把握することの一つの現われであろう。

である。

格助詞ニの意味構造

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．はじめに

本稿は前稿の結果を受けて、格助詞ニがどのような意味の多義構造を持っているのかについて考察することを目的としている。

まずニ格の4つの意味用法「移動の着点」、「移動の起点」、「存在の位置関係」、「経験の主体」を一つずつ分析していきたい。2章で示したLangackerのモデルでは、事態がプロセス的に把握されている。そのため、「移動の着点」や「移動の起点」用法では、このモデルが踏襲できる。しかし事態が存在論的に把握される「存在の位置関係」や「経験の主体」用法では、このモデルを適用することはできず、新たなモデルを考える必要がある。

2．格助詞ニの4つの意味用法

2.1　プロセス的用法

2.1.1　移動の着点

ここで注目しなければならないことは、与格が「目標領域の能動的参与者」を表す点である。これは「源泉領域の能動的参与者」を表す主格との関係において、以下のような性格を与格が持つことにつながる。

① 「目標領域」に属する参与者が「源泉領域」に属する参与者に対して持つ、着点としての性格（着点性）

② 主格で表された「源泉領域の能動的参与者」同様、「能動的」な参与者として、「源泉領域の能動的参与者」に対しても従属せず、主体性を持って対峙する性格（これを本稿では「対峙性」と称することにする）。

次にニ格の「移動の着点」を表す用法をヲ格と比較しながら考察してみたい。Langacker（1991 a，1991 b）によれば、ヲ格（対格）は「目標領域の受動的参与者」である。したがって「源泉領域の能動的参与者」を表す主格との関係において、以下のような性格を持つ。

① 「目標領域」に属する参与者が「源泉領域」に属する参与者に対して持つ、着点としての性格（着点性）

② 主格で表された「源泉領域の能動的参与者」に対し、「受動的」な参与者として、「源泉領域の能動的参与者」に対して従属的な性格（従属性）。

したがってガ格（主格）に対しニ格（与格）は「着点性」と「対峙性」を持つのに対し、ヲ格（対格）は「着点性」と「従属性」を持つ。すなわちニ格とヲ格とは「着点性」を共有するが、「対峙性」の面では性格を異にしている。

例えば⑴のように、一般に使役文ではヲ格を用いると強制の意味が強くなり、ニ格を用いると自主性の意味が強調されると言われている（Langacker 1991 a：411）が、ヲ格はガ格を起点とした動力の影響下に置かれ、従属的である一方、ニ格はその動力の影響下には置かれておらず、主体的であるといった、ガ格の動力の影響との関係で説明が可能であるという。また⑵で遠くに対峙する「山（頂）」はニ格、既に足元にある「斜面」はヲ格で示されること、⑶で一般に「乗る」対象として対峙する乗り物はニ格で表されるが、より乗り手（ガ格）の力の支配下に置かれた「乗り回す」のような場合では、ヲ格で示されるようになることなども、同じようにガ格の動力の影響との関係で説明が可能である。

さらに（４－ｃ）で「学生」がニ格、「英語」がヲ格で表されるようになるのも、「英語」は「教える」という動力連鎖の直接的な支配を受け、「受動的」であるのに対し、「学生」は「英語」に比べ、「主体性」を持ち、動力連鎖の直接的支配を受けていないためと説明している（図２も参照）。

⑴　ａ．子供を働かせる。　　ｂ．子供に働かせる。
⑵　ａ．山に登る。　　ｂ．斜面を登る。
⑶　ａ．オートバイに乗る。　ｂ．オートバイを乗り回す。
⑷　ａ．英語を教える。　　ｂ．学生を教える。　　ｃ．学生に英語を教える。

以上ニ格の「移動の着点」の用法では、「源泉領域の能動的参与者」を表すガ格に対し、「着点性」と「対峙性」を持っていることを見た。

2.1.2　移動の起点

一方事態に対してプロセス的把握が行われていても、認知主体の何らかの動機づけにより、プロファイルされた動力連鎖の最上流（典型的には「動作主」）に必ずしも最大の際立ちが与えられないこともある（Langacker 1991 a : 330-377）。例えば受動化などにより「目標領域の参与者」に焦点が当てられ、ガ格（主格）で表される場合、日本語では、「源泉領域の能動的参与者」がニ格で表される。その場合ガ格で表された「目標領域の受動的参与者」に対して以下のような性質を持つ。

① 「源泉領域の能動的参与者」が「目標領域」に属する参与者に対して持つ、起点としての性格（起点性）、及び能動的性格（能動性）

⑸では最上流である「動作主（犯人）」よりも最下流の「被動作主（岡田氏）」に最大の際立ちが与えられ（tr）、受動文となっている。この場合能動文でガ格であった参与者（ここでは動作主）は、日本語ではニ格で表わされる。その結果、ニ格によって表わされた「源泉領域の能動的参与者（動作主）」は、ガ格で表わされた「目標領域における受動的参与者（被動作主）」に対し、動力連鎖の上流に位置し、「起点性」と「能動性」を持つことになる。⑹も同様である。

視点の移動により受身ではなく語彙的ヴォイスの変化が起きる場合も同様に考えられる。

⑺⑻では、事態で動力連鎖の最上流である「動作主（与え手）」よりも下流の「被動作主（受け手）」に最大の際立ち（tr）が与えられた場合である。

⑸　岡田氏は犯人に殺された。〈具体的移動の起点（受動文）〉

⑹　彼は国民に愛されている。〈抽象的移動の起点（受動文）〉

⑺　彼は友達に本をもらう。〈具体的移動の起点〉

⑻　先生に日本語を教わる。〈抽象的移動の起点〉

この場合図１の右側の図のように、ニ格はガ格への動力連鎖の「起点」となっているが、堀川（1988）のように、ガ格のニ格への「密着性」を根拠に、これも一種の「着点」であると言い切るのにはやや無理があると考えられる。図２を見れば一目瞭然であるが、動力連鎖の観点から考えると、やはりニ格は「起点」であって「着点」であるとは考えがたく、またたとえガ格とニ格との間に「密着性」を認めたとしても、それはニ格への「能動的な密着性」ではなく、ニ格からの「受動的な密着性」であるため、やはりニ格は「起点」と解釈せざるをえない。ガ格のニ格への密着性が「能動的な密着性」であってこそ、ニ格を「着点」と見ることが可能になるであろう。

さらに⑼～⑽のような「原因」用法でも⑸～⑻の「動作主」としての起点用法同様、ニ格は「源泉領域の能動的参与者」として「起点」を表すとともに、ガ格に対し「能動性」と「対峙性」を持ち合わせている。

図１　能動文と受動文における動力連鎖の認知のしかたの違い

⑼　銃弾に死す。〈原因〉

⑽　台風に家を飛ばされる。〈原因（受動文）〉

⑾　借金に苦しんでいる。〈抽象的原因〉

⑿　騒音に悩まされている。〈抽象的原因（受動文）〉

2.1.3 「移動の着点」用法と「移動の起点」用法

最後に「移動の着点」用法と「移動の起点」用法とを比べると、前者はガ格に対し「対峙性」のみを持っているのに対し、後者はガ格に対し「対峙性」と「能動性」を有している点が異なっている。

2.2　存在論的把握

前述したように、存在論的把握による「存在の位置関係」と「経験の主体」用法は、プロセス的把握の場合のモデルをそのまま用いることができない。

2.2.1　存在の位置関係

この用法はある存在とそれが存在する空間や時間などとの位置関係を示す用法で、位置づけられる存在に最大の際立ち(tr)が与えられてガ格で表され、位置づける空間や時間などのドメインは第二の際立ち（lm）が与えられてニ格で表される。例えば⒀では図2(a)のように「本」が空間的ドメインの「机の上」によって位置づけられるといった関係である。また⒁は図2(b)のように存在ではなく、「彼が寝る」という事態が、時間的ドメインの10時という点に位置づけられている。⒂では図2(c)のようにガ格（わが家）はニ格（学校）によって空間的ドメインに位置づけられているが、その関係は「近い」という形容詞で表されている点が⒀とは異なる。⒃ではガ格（この素材）がニ格（熱）をlmとして抽象的な強度のドメイン上に位置づけられている（図2(d)参照）。

ここにおいてニ格とガ格との関係を見てみると、両者の間には動力連鎖は存在せず、単に静的に対峙しているだけであるため、ニ格はガ格に対し「対峙性」のみを持ち「能動性」を有していない。

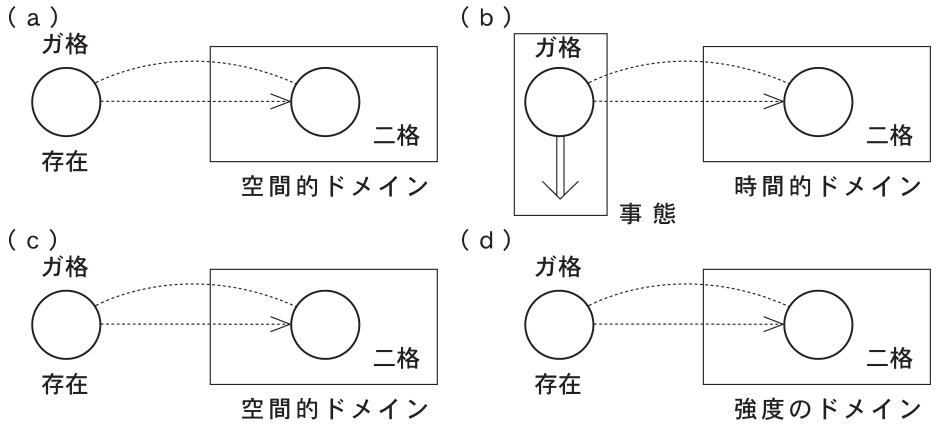
⒀　机の上に本がある/ない。〈空間的位置〉

⒁　彼は10時に寝る。〈時間的位置〉

⒂　わが家は学校に近い。〈空間的位置（遠近関係）〉

⒃　この素材は熱に強い。〈抽象的位置（強度関係）〉

図2　「存在の位置関係」用法のスキーマ



2.2.2　経験の主体

所有は⑰のように、他動詞「持つ」で表すこともできるが、自動詞「ある」で表すことも可能である。前者は事態を動力連鎖としてプロセス的に把握した場合、後者は事態を存在論的に把握した場合である。後者の場合、所有主はニ格で表示される。ここで動詞「ある」は存在の意味ではなく、所有の意味となっているが、これは「ある」の「存在の用法から所有の用法への拡張(空間のドメインにおける存在から、所有のドメインにおける存在への拡張)」であると考えられる。

ここで注目すべきことは、図３のように（17－ａ）の他動詞文では「子供」は「私」に対し動力連鎖の下流にあって、その支配を受けているためヲ格で示されているが、(17－ｂ)の自動詞文では「私」は「子供」に対して動力連鎖の上流にありニ格で表されている。また所有の「ある」は存在の「ある」とは異なり、(17－ａ）のように他動詞文で表すことができるが、これは（17－ｂ）の「私」が「子供」に対して単に「対峙性」だけでなく、より積極的な形で「能動性」を有していることを示している。但し存在論的把握では「私」と「子供」の間の所有的な動力連鎖は背景化されているため、「能動性」も背景化している。

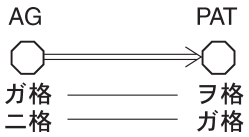


図３　所有の他動詞文の格表示

⑰　ａ．私は子供を持っている。　ｂ．私に子供がある。〈所有主〉

⑱　私には富士山が見える。〈知覚主〉

⑲　姉にバイオリンが弾ける。〈能力主〉

⑳　私にはそのことがとてもうれしかった。〈感情主〉

⑱の知覚主、⑲の能力主、⑳の感情主の用法も同様で、それぞれ他動詞文で表すことができることから（「私は富士山を見る」、「姉はバイオリンを弾く（弾ける)」、「私はそのことをうれしがった」)、ニ格はガ格に対して動力連鎖の上流に位置し、「対峙性」と「能動性」を有している。但し⑰同様に経験主と経験対象との間の動力連鎖は背景化されているため、「能動性」も背景化している。

⑰は「私」の所有のドメインに「子供」が存在するという表現である。同様に⑱～⑳は知覚、能力、感情のそれぞれの主観的なドメインにおける「存在」として表されている。

2.2.3　「存在の位置関係」用法と「経験の主体」用法

最後に「存在の位置関係」の用法と「経験の主体」の用法とを比べると、両者はガ格に静的な「対峙性」を持っている点で共通している。しかし前者はガ格に対し「能動性」を有し

ておらず、「対峙性」のみを有するのに対し、後者はガ格に対し「対峙性」と「能動性」とを有している（但しこの「能動性」は上述のように背景化している）。

2.3　まとめ

以上、ニ格の4種類の意味用法について分析を行った。

「移動の着点」と「移動の起点」の用法とは、ガ格やその動力連鎖に対し「対峙性」を持っている点が共通している。しかし前者は「着点」の用法で、ガ格に対し「能動性」を発揮していないが、後者は「起点」の用法であり、ガ格に対して「能動性」を有している点が異なっている。

「存在の位置関係」と「経験の主体」の用法とは、ガ格に対して静的な「対峙性」を持っている点が共通している。しかし前者はガ格に対し「対峙性」のみを持ち、「能動性」を発揮していないが、後者はガ格に対し「対峙性」と共に（背景化してはいるものの）「能動性」を有している点が異なっている。

3．ニ格の放射状カテゴリー構造

次にニ格の4つの意味用法が、どのような放射状カテゴリーを形成しているかについて考察する。まずはプロセス的把握の「移動の着点」、「移動の起点」用法、次に存在論的把握の「存在の位置関係」、「経験の主体」用法を論じる。

プロセス的把握とは、事態を参与者とその間の動力連鎖によって展開するプロセスとして把握したものである。したがってニ格は他の格助詞と同様、参与者の一つとして機能する。

ここでニのプロトタイプの特徴づけに関わる要因は以下の2つであると思われる。

① 対象：対象としては、人、モノ、場所が考えられる。さらにこれらは抽象化することがある。Langacker (1991 a，1991 b) によれば、プロセス的な事態における与格は、プロトタイプとして、「目標領域における能動的な参与者」として特徴づけられる。したがってニ格が表す対象のプロトタイプは、前述のように有情物である人であり、モノ、場所はそれが拡張されたものと考えることができる。

② 移動：人やモノや動力が具体的に移動する具体的移動をプロトタイプとして、移動が抽象的なもの、移動をメタファー的に拡張したもの、などがそれからの拡張として考えられる。

このように考えると、考えられる組み合わせは、①で3通り（人、モノ、場所）、②で3通り（具体的移動、抽象的移動、メタファー的移動）のカテゴリーが存在することになる。またそれぞれの移動は、他動詞で表現される場合だけでなく、自動詞で表現される場合もある。

3.1　移動の着点

「移動の着点」の用法には以下の９通りがある。なお、例文で①は他動詞文、②は自動詞文である。

（１－ａ）人への具体的移動

人に対する具体的移動を表したものである。

①　友だちに本をあげる。②　社長に会う。

（１－ｂ）人への抽象的移動（移動の抽象化）

これは（１－ａ）の移動が抽象化したものである。

①　学生に日本語を教える。②　母に甘える。

（１－ｃ）人へのメタファー的移動（移動の変化へのメタファー的写像）

「移動の着点」用法の中には、変化が移動のメタファーとしてとらえられているものがある。この場合、「変化の結果」が「移動の着点」としてとらえられ、ニ格で示される。

①　息子を一人前の大人にする。②　息子が一人前の大人になる。

（１－ｄ）モノへの具体的移動（着点のモノ化）

（１－ａ）では着点が人であったが、（１－ｄ）はモノとなったものである。

①　携帯にストラップをつける。②　醤油がこぼれて服にしみがついた。

（１－ｅ）モノへの抽象的移動（移動の抽象化、着点のモノ化）

これは（１－ｄ）の移動が抽象化したものである。

①　ゲームボーイにはまる。②　政府は行政改革に取り組んでいる。〈モノの抽象化〉

（１－ｆ）モノへのメタファー的移動（移動の変化へのメタファー的写像）

これは変化を移動のメタファーとしてとらえたものである。

①　水を氷にする。②　水が氷になる。

（１－ｇ）場所への具体的移動（着点の場所化）

（１－ａ）では着点が人、（１－ｄ）では着点がモノであったが、（１－ｇ）は場所となったものである。

①　机の上に本を載せる。②　映画（を見）に行く。＜場所の抽象化＞

（１－ｈ）場所への抽象的移動（移動の抽象化、着点の場所化）

これは（１－ｇ）の移動が抽象化したものである。

①　遠くアメリカに思いを馳せる。②　ようやく日本に慣れてきた。

（１－ｉ）場所へのメタファー的移動（移動の変化へのメタファー的写像）

これは変化を移動のメタファーとしてとらえたものである。

①　都を京都にする。②　都が京都になる。

これらを表にまとめると表２のようになる。前述したように「移動の着点」は、人がプロ

トタイプであり、モノや場所はそれからの拡張である。また移動は具体的なものがプロトタイプであり、抽象的なもの、さらにメタファー的なものはそれからの拡張である。したがって表で左上の人への具体的移動を示す用法がプロトタイプであり、右または下に行くほど、拡張的用法である。

表 2　移動の着点を表すニの用法

	人	モノ	場所
具体的移動	友だちに本をあげる。 社長に会う。	携帯にストラップをつける。 醤油がこぼれて服にしみがついた。	机の上に本を乗せる。 映画（を見）に行く。
抽象的移動	学生に日本語を教える。 母に甘える。	ゲームボーイにはまる。 政府は改革に取り組んでいる。	遠くアメリカに思いを馳せる。 ようやく日本に慣れてきた。
メタファー的移動	息子を一人前の大人にする。 息子が一人前の大人になる。	水を氷にする。 水が氷になる。	都を京都にする。 都が京都になる。

3.2　移動の起点

「移動の起点」用法はプロセス的で主観的な把握、すなわちプロセス的な事態をより主観的に把握した場合のニ格の用法である。この場合ニ格はガ格に対して能動性を有した参与者となることから、有情物である人であることが多く、モノや場所での用法は考えにくくなる。能動性を持ち、移動の起点となりうるモノは、人間の力をしてはどうにもしがたい自然（の力）や強い加害性を持ったモノに限られる。

また、移動が変化へとメタファー的に拡張される用法は、着点用法では見られたが、この起点用法では見られない。以下例文で①は能動文、②は受動文である。

（２－ａ）人からの具体的移動

人に対するモノや動力の具体的移動を表したものである。

①　友達に本をもらう。②　岡田氏は犯人に殺された。

（２－ｂ）人からの抽象的移動（移動の抽象化）

人に対するモノや動力の移動が抽象化したものである。

①　先生に日本語を教わる。②　彼は国民に愛されている。

（２－ｃ）人からのメタファー的移動（存在せず）

（２－ｄ）モノからの具体的移動（起点のモノ化）

（２－ａ）では着点が人であったが、（２－ｄ）はモノとなったものである。

①　銃弾に死す。②　台風に家を飛ばされる。

（２－ｅ）モノからの抽象的移動（移動の抽象化、起点のモノ化）

モノに対する移動が抽象化したものである。また②ではモノの抽象化も起きている。

①　借金に苦しんでいる。②　騒音に悩まされている。

（２－ｆ）モノからのメタファー的移動（存在せず）

（２－ｇ）場所からの具体的移動（起点の場所化）

起点が場所となった具体的移動を示すものは存在しない。

（２－ｈ）場所からの抽象的移動（移動の抽象化、起点の場所化）

起点が場所となった抽象的移動も文例を見出すのが容易ではなく、以下の例文も場所名詞をモノ的に解釈し、「大都会」を「大都会の雰囲気」といった意味で解釈しないと非文となってしまう。

彼は大都会に染まっていった。

（２－ｉ）場所からのメタファー的移動（存在せず）

これらを表にまとめると表３のようになる。表２同様、「移動の起点」は、人がプロトタイプであり、モノや場所はそれからの拡張であると考えられる。また移動は具体的なものがプロトタイプであり、抽象的なものはそれからの拡張である。メタファー的移動の用法は起点用法には存在しない。したがって表３で左上の人からの具体的移動を示す用法がプロトタイプであり、右または下に行くほど、拡張的用法となる。

表３　移動の起点を表すニの用法

	人	モノ	場所
具体的移動	友だちに本をもらう。 岡田氏は犯人に殺された。	銃弾に死す。 台風に家を飛ばされる。	－
抽象的移動	先生に日本語を教わる。 彼は国民に愛されている。	借金に苦しんでいる。 騒音に悩まされている。	彼は大都会に染まっていった。
メタファー的移動	－	－	－

3.3　存在の位置関係

「存在の位置関係」の用法は、存在論的で客観的把握、すなわち存在論的な事態をより客観的な把握によって言語化した場合のニ格の用法である。

存在とは、ある空間（ドメイン）において、あるモノがある位置を占有していることである。存在の前提としての領域（ドメイン）のプロトタイプは３次元からなる実際の空間であることはいうまでもない。実在する空間における位置は普通、（３－ａ）のような「アル／イル文」で表される。

さらに空間から時間へのメタファー的拡張により、時間的位置（時間は空間とは異なり１次元的である）を示したものが（３－ｂ）のような時間用法であろう。

またニ格が空間的な位置を示す基準点（lm）となり、ガ格で表されたモノの位置は形容詞

によって示される場合が（３－ｃ）のような用法である。

さらに（３－ｄ）は空間的位置ではなく、強度を示す抽象的なドメイン上の位置を表す用法である。ニ格は強度のドメイン上の基準点（lm）として機能している。

以上のような考察から、存在の位置関係を示す用法のプロトタイプは、（３－ａ)のような用法であり、ここから（３－ｂ）や（３－ｃ）のような用法が拡張し、さらに（３－ｃ）から（３－ｄ）のような用法が拡張したと考えられる。

（３－ａ）空間的位置

机の上に本がある／ない。

（３－ｂ）時間的位置（場所の時間へのメタファー的写像）

今日は10時に寝る。

（３－ｃ）空間的位置のlm（位置のlm化）

わが家は学校に近い。

（３－ｄ）ある座標上のlm（位置のlm化、空間の抽象化）

この素材は熱に強い。

3.4　経験の主体

「経験の主体」の用法は、存在論的で主観的な把握、すなわち客観的にはプロセス的である事態が、主観的把握によってプロセス（動力連鎖）が背景化され、存在論的に把握された場合のニ格の用法である。「存在の位置関係」における存在のドメインは客観的に実在する空間ドメインであったが、「経験の主体」用法での存在のドメインは、認知主体が所有や知覚、能力、感情などをとらえるための主観的なドメインとなる（菅井　2002)。その意味で「経験の主体」用法は、存在論的な把握において、「存在の位置関係」の用法の拡張としてとらえられる。

（４－ａ）は（３－ａ）と同じ動詞「ある／いる」が用いられている。このことから、（４－ａ）は（３－ａ）からの拡張的用法と考えられる。（３－ａ）は客観的に実在する空間における存在を示しているが、この客観的な空間ドメインが主観化し、ニ格で表された人(所有者)の「所有ドメイン」における存在を示している。

（４－ｂ）は空間ドメインの主観化がさらに進行し、「知覚ドメイン」における存在を示している。知覚ドメインにおけるプロトタイプはなんといっても「視覚ドメイン（簡単にいえば視界)」で、「私には富士山が見える。」とは私（認知主体）の視界に富士山が「ある」ことに他ならない。その他の知覚ドメインもドメインの抽象性は高まるものの同じように考えられる（例えば「視覚ドメイン」は視界と考えればかなり具体的であるが、「聴覚ドメイン」は「視覚ドメイン」に比べればかなり抽象的なものとなる)。

（４－ｃ）になると、知覚ドメインはより抽象的な「能力のドメイン」に拡張する。知覚と

は「見える」、「聞こえる」、「匂う」、「感じる」など人間が感覚をもって行う基本的な能力であるが、これがより広範な能力へと拡張されたものが（４－ｃ）である。これも「弾ける」、「読める」などの様々な能力がそれぞれの特定化された能力のドメインにおける存在としてとらえられたものと考えられる。

（４－ｄ）は「感情のドメイン」における存在を示したもので、感情は知覚と共に人間の基本的な能力であることから、（４－ｂ）同様、（４－ａ）から拡張したものであると思われる。

（４－ａ）所有主（ドメインの主観化）

私に子供がある／いる。

（４－ｂ）知覚主（ドメインの主観化）

私には富士山が見える。

（４－ｃ）能力主（ドメインの主観化）

姉にバイオリンが弾ける。

（４－ｄ）感情主（ドメインの主観化）

私にはそのことがとてもうれしかった。

４．まとめ

本研究で考察してきた内容をまとめると以下のようになろう。

認知主体である人間は、外界を認知するにあたって、事態をプロセスとして動的に把握するか（プロセス的把握）、または静的、存在論的に把握するか（存在論的把握）のいずれかを選択している。前者のニ格はガ格に対し「動的対峙性」を共有し、後者のニ格はガ格に対し「静的対峙性」を共有しつつ、それぞれのプロトタイプを中心に別個の放射状カテゴリーを形成している。しかし日本語の場合、両者は同じニという格標識で表示されていることから、何らかの超スキーマを共有し、一つのカテゴリーとしてまとまっていると考えることができる。その超スキーマとは、表４に示されたように「ガ格に対する対峙性」であると考えられる。

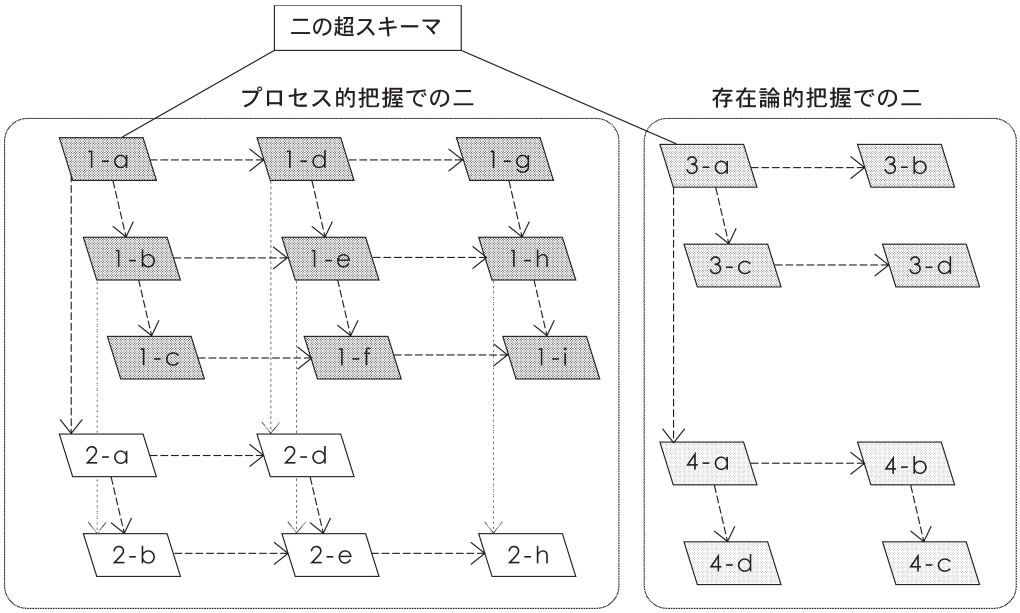
表４　ニ格の意味用法のまとめ

	把握の主観性	把握のしかた	ガ格に対するニ格の特徴
移動の着点	客観的把握	プロセス的（動的）	対峙性
移動の起点	主観的把握	プロセス的（動的）	対峙性　能動性
存在の位置関係	客観的把握	存在論的（静的）	対峙性
経験の主体	主観的把握	存在論的（静的）	対峙性　（能動性）

これら「プロセス的把握」、「存在論的把握」の双方に、認知主体の見え（perspective）との関わりの弱い「客観的把握」と、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」という把握の仕方が関与している。「移動の起点」、「経験の主体」の用法では、それぞれ「移動の着点」、「存在の位置関係」の用法に比べ、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」となっている。これら「主観的把握」の場合には、意志を有する「人（有情物）」などがニ格になる場合が多く、ガ格に対し「能動性」が発揮され、起点としての意味を持つようになる。以上を図にまとめたものが図 7 である。

本稿は、ニ格の様々な意味を、① 2 通りの認知主体の把握の仕方（「把握のプロセス性」や「把握の主観性」）、及び②ガ格に対するニ格の特徴との関係で整理したものである。ニ格が着点・起点といった動的な用法と、単なる存在という静的な用法がある理由や、着点的な用法と起点的な用法とがある理由は、認知と言語との関係、すなわち人間の把握の仕方がどのように言語化されるのかといった点からうまく説明することができる[29]。またニ格が様々な意味用法を持ちつつも、一つの形式で表されることも、ニ格がガ格に対し「対峙性」という共通の特徴を共有していることで説明できるのである。

図 7　格助詞ニの意味構造



29　ガ格の意味・用法もまた、本稿で扱ったニ格同様、人間が行う 2 通りの把握のしかたの双方にまたがっていると考えられる（森山 2004 b）。菅井（2002）では事態を言語化する際に用いられる構文スキーマとして「過程的構文（processual construction）」と「存在論的構文（ontological construction）」という 2 通りの構文スキーマが用いられるとしている。

格助詞ガの意味構造

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．はじめに

格助詞ガは⑴、⑵のように動作主を表すことが多いが、⑵、⑶のように動作対象を表すこともある[30]。

⑴　太郎が次郎を殴った。

⑵　太郎が二階の窓を開けた。

⑶　次郎が太郎に殴られた。

⑷　二階の窓が開いた。

また他動詞文では、動作主体だけでなく、⑸〜⑺のように経験や変化、さらには存在の主体を表すこともある。

⑸　太郎がその場面を見た。

⑹　雨が降る。

⑺　あそこに鈴木さんがいる。

さらに、知覚、所有、感情などの経験を表す文では、⑻のように経験主体だけでなく、⑼のように経験対象を表すこともある。

⑻　太郎が富士山を見た。

⑼　太郎には富士山が見えた。

このように格助詞ガは様々な意味を持っている。認知言語学では意味と形式の対応関係を重視する立場から、ガという形式を共有しているこれらの用法は、何らかの意味（スキーマ的意味）を共有しつつ、プロトタイプを中心にして一つのネットワークをなすと考えている。ここでプロトタイプとは、あるカテゴリーの中で、より中心的で、そのカテゴリーを代表すると思われる成員をいう。またスキーマとは、カテゴリーの全成員が共有する非常に抽象的な規定である。

本稿は認知言語学（とりわけ Langacker 1991 a，1991 b）の格標識に対する考え方を日本語に応用し、格助詞ガに対する先行研究の菅井（2002）や、格助詞ニの意味構造を研究した森山（2004 b）などを参考にしながら、格助詞ガの意味構造について明らかにすることを目的とする[31]。

30　本稿では、プロセス的主体であるか、対象であるかが重要な概念となっているため、混乱を避けるため、「動作主」、「被動作主」の代わりに「動作主体」、「動作対象」と表現する。

31　益岡（2000）では、ガの用法を「補足語用法」と「非補足語用法」とに分けているが、本稿では主に前者を扱うことになる。

2．先行研究

2.1　格助詞ガに対する菅井（2002）の研究

菅井（2002）では、格助詞ガの両義性に着目し、それらは同一のスキーマを共有すると同時に、それぞれが相異なる２種類の構文スキーマを持っていることを説明している。格助詞ガの基本的意味の「主体」と「対象」とは⑴⑵のようなものである。

⑴　太郎が走る。

⑵　水がほしい。

２種類の構文スキーマとは、「過程的構文」と「存在論的構文」であり、⒄が前者、⒅が後者のスキーマを有している。

「過程的構文」とは、「存在を前提とした上で参与項の関係や叙述的な展開を志向する構文」で、⑴のように述部内に「主体」（と「対象」）を有し、そのうち「主体」がガ格で表される。一方「存在論的構文」とは、「存在のあり方を志向し、構文において直接的に反映させる構文」で、⑵のように述部内には「主体」がなく、「対象」のみが存在するため、これがガ格で表される。

またこれら２つの構文におけるガ格が共有するスキーマとは「述部内において最も顕著な成分」である。従って「過程的構文」とは、「述部内において最も顕著な成分を実現するスロットが「主体」に充てられている構文」であり、「存在論的構文」とは、「述部内において最も顕著な成分を実現するスロットが「対象」に充てられている構文」であるという。

また菅井（2002）では後半において、「存在論的構文」の範疇化を試みている。それによれば、この構文は以下に示したように「存在文」をプロトタイプとした放射状カテゴリーを形成しているとしている。「→」は拡張関係を表し、矢印間の距離はプロトタイプである存在文との距離的な近さを示している。したがって右にある用法ほど、本来の存在論的構文からは外れていき、逆に「過程的構文」に近づいていくという。

図１　ガの存在論的構文の放射状カテゴリー（菅井　2002）

①存在文　→　②（広義の同定文）　→　③典型的なコピュラ文
　　→　④数量形容詞文　→　⑤情意・情態形容詞文
　　→　⑥主観表現
　　→　⑦知覚文　→　⑧能力文
　　→　⑨テアル文
　　→　⑩関係文

①　存在文：地震の被害は今後も拡大する危険性がある。

②　同定文：これが私の任務だ。

③　典型的なコピュラ文：伊藤博文が初代の総理大臣である。
④　数量形容詞文：本当に苦労が多いんですね。
⑤　情意形容詞文：貴方の元気な姿が何より嬉しいです。
　　情態形容詞文：その日は特に夕日が赤かった。
⑥　主観表現：僕はずっとこのクラブがほしかったんです。
⑦　知覚表現：貴方には向こうの白いビルが見えますか。
⑧　能力文：わたしの言葉が分かりますか。
⑨　テアル文：テーブルの上に花瓶が置いてある。
⑩　関係文：行政改革には相当の時間と労力がかかるでしょう。

2.2　格助詞ニの意味構造に対する森山（2004 b）の研究

格助詞ニには様々な意味用法があるが、認知主体である人間はニの使用に際し、①事態をプロセスとして動的に把握するか(プロセス的把握)、または②非プロセスとして静的、存在論的に把握するか（非プロセス的、存在論的把握）のいずれかを選択している。①ではニ格は「ガ格と動的に対峙する参与者」というスキーマを共有し、②では「ガ格と静的に対峙する参与者」という前者とは異なったスキーマを共有しつつ、それぞれのプロトタイプを中心に別個のネットワーク構造を形成している。しかし日本語の場合、両者は同じニという格標識で表示されていることから、超スキーマを共有し、一つのカテゴリーとしてのまとまりをなしていると考えられる。その超スキーマとは「ガ格からの動力連鎖に対し独立性、主体性を持ってガ格に対峙する性質」である。

表 1　ニ格の意味用法のまとめ

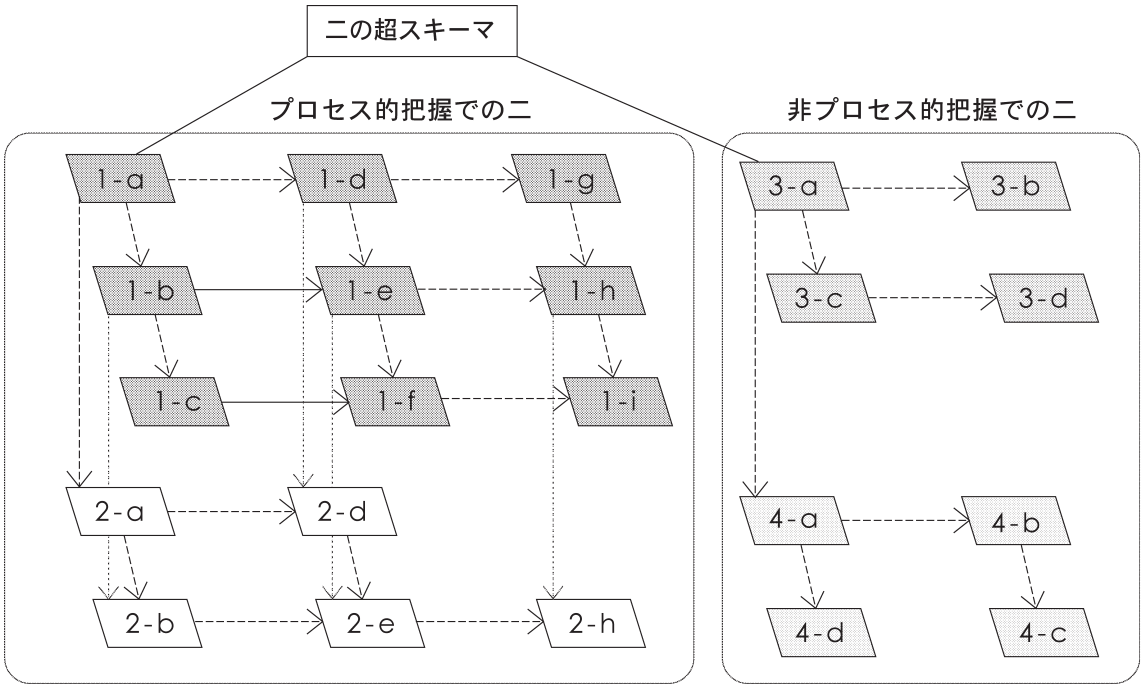
意味用法	把握の主観性	把握のプロセス性とニ格の意味		ガ格に対するニ格の特徴
移動の着点	客観的把握	プロセス的（動的）	着点	主体性
移動の起点	主観的把握	プロセス的（動的）	起点	主体性、能動性
存在の位置関係	客観的把握	非プロセス的（静的）	(着点)	主体性
経験の主体	主観的把握	非プロセス的（静的）	(起点)	主体性、能動性

これらはまた、認知主体の見え（perspective）との関わりの弱い「客観的把握」と、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」という把握の仕方が関与している。「プロセス的把握」では「移動の着点」用法がより「客観的把握」、「移動の起点」用法がより「主観的把握」である。一方「非プロセス的把握」では「存在の位置関係」用法がより「客観的把握」

であり、「経験の主体」用法がより「主観的把握」である。「主観的把握」の場合には、意志を有する「人（有情物）」などがニ格になりやすく、ガ格に対し「能動性」が発揮され、起点としての意味を持つようになる。以上をまとめたものが図２、表１である。

図２より明らかだが、①「移動の着点」用法では（１－ａ）が、②「移動の起点」用法では（２－ａ）、③「存在の位置関係」用法では（３－ａ）、④「経験の主体」用法では（４－ａ）がプロトタイプ的な用法である。従って①、②では順次右または下へ行くにつれて「具体的→抽象的→メタファー的」、「人→モノ→場所」などといったように拡張的用法となっている。

図２　格助詞ニの意味構造



注）図中の用法の番号は以下の例文に対応している。矢印は拡張関係を示す。

①　移動の着点

（１－ａ）人への具体的移動　「友だちに本をあげる。」「社長に会う。」

（１－ｂ）人への抽象的移動　「学生に日本語を教える。」「母に甘える。」

（１－ｃ）人へのメタファー的移動　「一人前の大人にする／なる。」

（１－ｄ）モノへの具体的移動　「携帯にストラップをつける。」「醤油がこぼれて服にしみがついた。」

（１－ｅ）モノへの抽象的移動　「ゲームボーイにはまる。」「政府は行政改革に取り組んで

いる。」

（1－f）モノへのメタファー的移動　「水を氷にする。」「水が氷になる。」

（1－g）場所への具体的移動　「机の上に本を載せる。」「映画（を見）に行く。」

（1－h）場所への抽象的移動　「遠くアメリカに思いを馳せる。」「ようやく日本に慣れてきた。」

（1－i）場所へのメタファー的移動　「都を京都にする／なる。」

②　移動の起点

（2－a）人からの具体的移動　「友達に本をもらう。」「岡田氏は犯人に殺された。」

（2－b）人からの抽象的移動　「先生に日本語を教わる。」「彼は国民に愛されている。」

（2－c）モノからの具体的移動　「銃弾に死す。」「台風に家を飛ばされる。」

（2－e）モノからの抽象的移動　「借金に苦しんでいる。」「騒音に悩まされている。」

（2－h）場所からの抽象的移動　「彼は大都会に染まっていった。」

③　存在の位置関係

（3－a）空間的位置　「机の上に本がある／ない。」

（3－b）時間的位置　「彼は10時に寝る。」

（3－c）空間的位置のlm　「わが家は学校に近い。」

（3－d）ある座標上のlm　「この素材は熱に強い。」

④　経験の主体

（4－a）所有主　「私に子供がある／いる。」

（4－b）知覚主　「私には富士山が見える。」

（4－c）能力主　「姉にバイオリンが弾ける。」

（4－d）感情主　「私にはそのことがとてもうれしかった。」

3．格助詞ガの意味構造分析

上述したように、本稿は認知言語学の考え方を日本語に応用し、菅井（2002）の格助詞ガの先行研究や、森山(2004 b)の格助詞ニの研究を参考にしながら、格助詞ガの意味構造について明らかにすることを目的としている。まずは森山（2004 b）の格助詞ニに対応する形で、①プロセス的主体、②プロセス的対象、③非プロセス的主体、④非プロセス的対象という4つのカテゴリーを設定してみる[32]。

また図3はそれを図式化したものである。カテゴリーの名称から明らかだが、①、②がプロセス的把握での用法であり、③、④が非プロセス的、存在論的把握での用法である[33]。それ

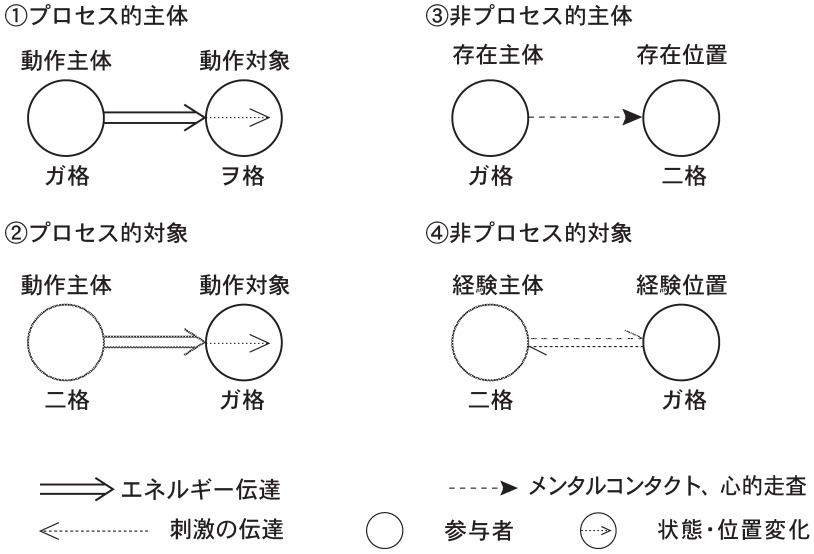
32　格助詞ニの①移動の着点、②移動の起点、③存在の位置関係、④経験の主体の用法は、そのプロセス性を中心に考えると、それぞれ①プロセス的対象、②プロセス的主体、③非プロセス的対象、④非プロセス的主体の用法と考えることができる。またガ格とニ格とは互いに対峙する関係を持っているため、このような設定を試みた。

ぞれについて詳述する。

3.1　プロセス的主体

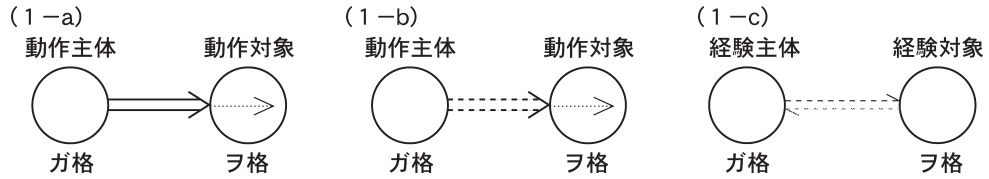
これは事態に対し、「プロセス的」かつ「客観的」な把握をした場合、すなわち**プロセス的な事態を客観的に把握した場合**である。意味役割としては、（1－a）のような物理的、具体的な「動作主体」がプロトタイプであるが、他動性の抽象化とともに、（1－b）のような抽象的な「動作主体」、さらに（1－c）のような知覚や感情などの「経験主体」が拡張的用法として存在する。なお図4で、（1－a）の実線の二重矢印は物理的、具体的な動力連鎖、（1－b）の点線の二重矢印は抽象的な動力連鎖、（1－c）の点線の双方向の矢印は、経験などに伴う双方向のやり取りを示している。感情、知覚などの経験的営みは、人間が主体となって初めて成立するものであるが、主体（人）から対象への働きかけだけではなく、対象から主体へも何らかの刺激の伝達が存在し、双方向のやり取りが存在しているため、ここでは双方向の矢印で示してある（影山　2001）。また「動作主体」は人がプロトタイプであるが、拡張的用法としてモノが「動作主体」となった場合には、「因果主体」と言えるようなものに拡張していく。

図3　格助詞ガの4つの用法（但し①は他動的動作の場合を示している）



33　菅井（2002）では格助詞ガの意味構造の分析にあたって、「過程的構文」と「存在論的構文」という2つの構文スキーマの存在を仮定していることはすでに述べたが、これらは本稿で述べる「プロセス的把握」「非プロセス的、存在論的把握」という人間の2通りの把握の仕方が言語化に反映したものであると考えることができる。

図 4　他動性の抽象化と「プロセス的主体」用法の拡張



「プロセス的主体」用法は、「他動的事態」ばかりではなく、「自動的事態」も存在する。やはり「動作主体」がプロトタイプとなる。自動的な「動作主体」とは、（1－d）の「彼が社長に会う。」、「女の子が泣く。」、（1－e）の「娘が母に甘える。」のように意図的、生理的な動作を表す非能格動詞や、（1－d）の「雨が降る。」のような自然発生的な状態変化を表す非対格動詞で表された能動的、自発的な事態の主体をさす[34]。（3 b）～（3 d）のように、本来は「他動的な動作対象」でありながら、scope や profile の移動により、「自動的な動作主体」のように把握した場合は除く（これは「プロセス的対象」用法に属し、次節で取り扱う）。

⑶　a．He opened the door.　　b．The door opened very easily.
　　c．The door suddenly opened.　　d．The door was opened.

これらでは Langacker が言うように、「動作主体」など、profile された動力連鎖の先端に最大の際立ちが与えられ(tr)、主格となる。いずれの場合にもガ格は能動性や自発性を持ち、そのため自然発生的な事態を除き、人（有情物）である場合が多い。

以上のように「プロセス的主体」用法とは、物理的、具体的な動力連鎖において人を「動作主体」とした場合をプロトタイプとし、他動性の抽象化や、人のモノ化に従って、「経験主体」や「因果主体」などの拡張的用法が存在している。

（1－a）具体的他動的動作

太郎が次郎を殴った。(動作主体：人)

太郎が二階の窓を開けた。(動作主体：人)

突風が傘を吹き飛ばした。(因果主体：モノ)

（1－b）抽象的他動的動作

彼が学生に日本語を教える。(動作主体：人)

その問題がみんなを悩ます。(因果主体：モノ)

（1－c）経験的他動的動作

私は（が）その事件を悲しく思う。(経験主体：人)

私は（が）その場面を見た。(経験主体：人)

（1－d）具体的自動的動作

彼が社長に会う。(動作主体：人)

34　非能格動詞、非対格動詞については、影山編（2001）を参照。

女の子が泣く。(動作主体：人)

雨が降る。(自然発生的な状態変化主体：モノ)

（１－ｅ）抽象的自動的動作

娘が母に甘える。(動作主体：人)

（１－ｆ）経験的自動的動作

花子がその問題に気づいた。(経験主体：人)

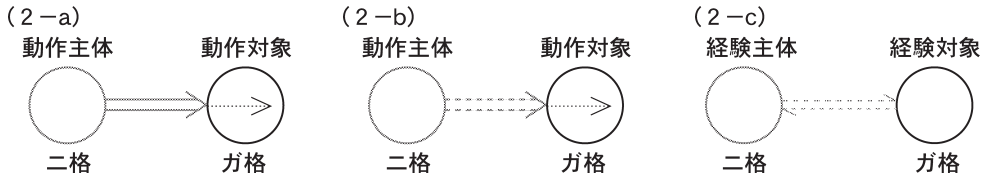
3.2　プロセス的対象

これは事態に対し、「プロセス的」かつ「主観的」な把握をした場合、すなわち事態をプロセスとして把握するが、把握に認知主体の主観が反映した場合である。(３ａ)のように、プロセス的な事態を客観的に把握した場合には、profile された動力連鎖の先端 (プロトタイプとしては動作主体) に最大の際立ちが与えられ (tr)、主格となるが、(３ｂ)～(３ｄ) のように認知主体の何らかの動機づけにより、profile や scope、最大の際立ち(tr)が移動すると、動力連鎖のより下流にある参与者 (例えば本来第二の際立ち (lm) の与えられていた「動作対象」) に最大の際立ちが与えられ (tr)、主格となる場合がある。これが「プロセス的対象」の用法である。具体的には (３ｂ) が profile の移動、(３ｃ) が scope の移動、(３ｄ) が最大の際立ち (tr) が移動した場合である (図５で「動作主体」や「経験主体」及びそれらを起点とする動力連鎖が薄色で書かれているが、これは最大の際立ちが「動作対象」や「経験対象」に移ったことを示している)。この用法は、動力連鎖の「対象」的な意味役割を持ったものが主格で表されたものであるため、前節の「プロセス的主体」用法のうち、他動的動作の用法が主観的に把握されたものに限られる。従って (２－ａ) のように動作の他動性が具体的、物理的な「動作対象」がプロトタイプとなるが、他動性の抽象化とともに、(２－ｂ) のような抽象的な「動作対象」、さらに (２－ｃ) のような知覚や感情などの「経験対象」が拡張的用法として存在する (図５参照)。また他動的プロセス的主体がモノである場合には「動作対象」は「因果対象」となる[35]。

「プロセス的対象」用法には、(３ｄ) のように事態を「受動的な事態」として把握し、受動文で表現する場合と、(３ｂ)、(３ｃ) のように「自動的な事態」として把握し自動詞文で表現する場合とがある[36]。「動作主体」などのプロセスの主体は、「受動的な事態」の把握では tr ではないもののいまだ profile 内に残っているが、「自動的な事態」の把握では、profile から外れている。このようなことから本来最大の際立ちが与えられ、主格となるべきであった「動作主体」などの参与者は、事態を「受動的な事態」として把握する場合には、日本語の

35　但し「経験対象」は他動的な「動作」として経験をとらえた場合に限られるため、それらは他動詞の受動文で表されたものとなる。(9)のような自動詞で表された「経験対象」は、日本語の場合「動作」といったプロセス的把握ではなく、非プロセス的、存在論的事態としてとらえられるため、「非プロセス的対象」用法に属する (３．４節参照)。

図 5　他動性の抽象化と「プロセス的対象」用法の拡張



場合ニ、ニヨッテ、カラなどで表されるが、「自動的な事態」として把握する場合には、明示されないのが普通である。但し前節でも述べたが、「自動的な事態」として把握する場合とは、（2－c）や（2－d）のように、認知主体の何らかの動機づけにより、本来は「他動的な事態」であるものを、scope や profile の移動により「自動的な事態」として把握した場合をさし、（1－d）、（1－e）のように元々から能動的、自発的な事態は「プロセス的主体」用法に属する。

以上のように「プロセス的対象」用法は、物理的、具体的な「動作対象」がプロトタイプであるが、動力連鎖の抽象化により、抽象的な「動作対象」や、感情、知覚などの「経験対象」などが拡張的用法として存在している。またモノを主体とする動力連鎖の「因果対象」も動作主体のモノ化による拡張的用法である。さらに（2－f）のように、一部の「動作対象」は本来「プロセス的」事態でありながら相当に「非プロセス的、存在論的」に把握された表現がある。影山（2001）が「脱使役化」と呼んでいるものがそれにあたるが、これらは動作主体が存在しながらそれを自動的事態として表したものである。動作主体やその動作が scope や焦点から外れるのは、3．4 節で述べる経験的事態同様、認知主体（話者）の視点から事態を主観的に把握しているからである。なお（2－f）のうち「私は（が）あの先生に日本語を教わった。」の「教わる」は他動詞であるが、元の他動詞「教える」からの「脱使役化」により、動作主体（あの先生）が脱焦点化されニ格で表されているため、自動（詞）的である。「脱使役化」動詞と呼ばれているものには「かかる」のタイプとして「決まる」「植わる」「儲かる」など、「教わる」のタイプとしては「授かる」「預かる」などがある（影山　2001：31-32）。そのような意味から（2－f）は「プロセス的把握」でありながらも「非プロセス的、存在論的把握」に近い。

最後に「プロセス的対象」用法を前節の「プロセス的主体」用法との関連で言えば、「プロセス的対象」用法は、本来他動的で能動的な事態を、認知主体の何らかの動機づけにより、

36　影山編（2001）の「反使役化」された自動詞文がこれにあたる。但し（16 b）のような中間構文は、日本語の場合その取り扱いが容易ではない。本稿では「プロセス的対象」がガ格で表されることから、「プロセス的対象」用法としたが、これは動作主体が不特定な人へと一般化した受動的可能表現の場合に限られ、寺村（1982）が「自発態」と呼んだ自発性の高いものは、むしろ「プロセス的主体」用法に近く、また動作主体が個別化した「可能態」の場合には、以下で扱う「非プロセス的対象」の「経験対象」用法に属する。

自動的、または受動的なものと把握したわけであるから、「プロセス的主体」用法から派生した拡張的用法であると考えることができる[37]。

（２－ａ）具体的受動的動作

彼が友達に本をもらう。(動作対象)

岡田氏が犯人に殺された。(動作対象)

傘が突風に吹き飛ばされた。(因果対象)

（２－ｂ）抽象的受動的動作

金さんは（が）あの先生に日本語を教えられた。(動作対象)

日本と韓国でワールドカップが開かれた。(動作対象)

みんながその問題に悩まされる。(因果対象)

（２－ｃ）経験的動作

彼は（が）彼女に好かれている。(経験対象)

（２－ｄ）具体的自動的動作

皿が割れる。(動作対象)

（２－ｅ）抽象的自動的動作

授業が始まる。(動作対象)

（２－ｆ）非プロセス的、存在論的把握に近い自動的動作

壁に絵がかかった。　(動作対象)

私は（が）あの先生に日本語を教わった。　(動作対象)

3.3　非プロセス的主体

これは事態を「非プロセス的（存在論的)」かつ「客観的」に把握した場合、すなわち**非プロセス的、存在論的な事態を客観的に把握した場合**である。これには以下のように、いわゆる存在文で表される「存在主体」のほか、形容文（数量形容文、性状形容分など）で表される「形容主体」、同定文で表される「同定主体」などが含まれる。形容文や同定文は存在文から派生した拡張的な用法であろう[38]。

（３－ａ）机の上に本がある／ない。　(存在主体)

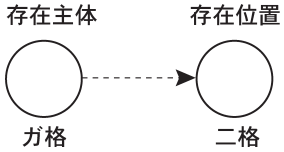
（３－ｂ）あの家（に）は家族が多い。　(数量形容主体)

（３－ｃ）その日は夕日が赤かった。　(性状形容主体)

（３－ｄ）彼は（が）学生である。　(同定主体)

37　但し日本語のようないわゆる「ナル型の言語」(池上 1981) の場合、動作主体が存在しながらそれをあからさまに表現しない傾向もあり、その点が使用や習得などに影響を及ぼし、必ずしも使用や習得が「プロトタイプからその拡張へ」と進まない可能性がある。

図 6　非プロセス的主体用法



3.4　非プロセス的対象

これは事態に対し、「非プロセス的（存在論的）」かつ「主観的」な把握をした場合で、**本来はプロセス的な事態を、認知主体の主観を反映させ、非プロセス的、存在論的に把握した場合**である。これには所有、知覚、能力、感情などの「経験対象」の用法がある。日本語で「経験主体」を明示する場合には、ニ格で表すのが普通である。

図 7 は「見る」という知覚的な事態を例に、プロセス的把握の「経験対象」用法（②「プロセス的対象」に属する）と、非プロセス的、存在論的把握の「経験対象」用法（④「非プロセス的対象」に属する）とを比較したものである。前者では「ＮガＰニ見ラレル」といった他動詞の受動文で表され、後者では「ＮガＰニ見エル」といった自動詞文で表される。図 7 を見ると、図左のプロセス的把握では、認知主体の何らかの動機づけにより、最大の際立ち（tr）が「経験主体」から「経験対象」へと移動していることがわかる。

一方図右の非プロセス的、存在論的把握は、プロトタイプとしては「経験主体」に認知主体（話者）の視点を置いた主観的把握となり、その結果「経験対象」が非プロセス的、存在論的に把握される。そのため経験（知覚）者自身である「経験主体」や、経験（知覚）者自身の動作である「経験主体から経験対象への働きかけ」は scope から外れ（図右では薄色で表示した）、scope 内には「経験対象」と「経験対象からの刺激」のみが残り、「経験対象」は最大の際立ち (tr) を持った参与者としてガ格で表される。これを「非プロセス的、存在論的」と言うのは、「経験対象」がプロセス的な動作の対象としてではなく、経験主体の「知覚ドメイン」における「存在」として非プロセス的に把握されるからである。

---

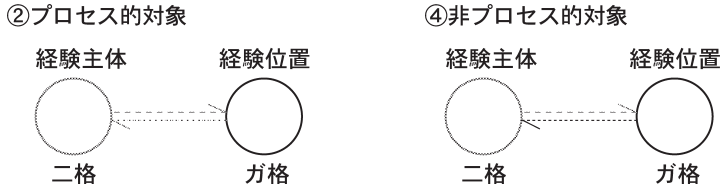
38 「非プロセス的主体」の用法は、動作や変化の結果としての「結果状態」との関連で「対象」として扱われる場合もある。しかし本稿では「結果の状態」は何らかの動作や変化が前提として存在するため「対象」として扱うが、「存在」はそのような前提が存在しないので「主体」と考え、「非プロセス的主体」としている。

「非プロセス的主体」の用法は、同じ非プロセス的、存在論的把握の用法である「非プロセス的対象」とともに、「存在論的構文の範疇化」として菅井（2002）に詳細な分析があるが、本稿ではこれを参考にしつつも、カテゴリー化の仕方にかなりの違いが見られることから、独自の観点を加えて分析を行っている。

また益岡（2000）ではガの用法を「補足語用法」と「非補足語用法」とに分けていることは前述したが、後者の用法の「属性主」「経験者」は、本節で述べられている「補足語用法」としての「非プロセス的主体」の用法が、「非補足語用法」へと拡張したものと考えられる。「属性主」「経験者」の用法とは以下のようなものをさす（下線部）。

・属性主用法：太郎<u>が</u>父がたくさん酒を飲む（こと）
・経験者用法：鈴木さん<u>が</u>娘が無事大学に合格した（こと）

図７　経験的動作におけるプロセス的把握と非プロセス的把握



経験的事態を詳細に見ていくと、（４－ａ）は（３－ａ）と同じ動詞「ある／いる」が用いられている。このことから、（４－ａ）は（３－ａ）からの拡張と考えられる。（３－ａ）は客観的に実在する空間における存在を示しているが、この客観的な空間ドメインが主観化し、ニ格で表された人（所有主体）の「所有ドメイン」における存在を示している。

（４－ｂ）は空間ドメインの主観化がさらに進行し、「知覚ドメイン」における存在を示している。知覚ドメインにおけるプロトタイプはなんといっても「視覚ドメイン」で、「私には富士山が見える。」とは私（認知主体）の視界に富士山が「ある」ことに他ならない。その他の知覚ドメインも同じように考えられる。

（４－ｃ）になると、知覚ドメインはより抽象的な「能力のドメイン」に拡張する。知覚とは「見える」「聞こえる」「匂う」「感じる」など人間が感覚をもって行う基本的な能力であるが、これがより広範な能力へと拡張されたものが（４－ｃ）である。これも、「弾ける」「読める」などの様々な能力がそれぞれの特定化された能力のドメインにおける存在としてとらえられたものであると考えられる。

（４－ｄ）は「感情のドメイン」における存在を示したもので、感情は知覚と共に人間の基本的な能力であることから、（４－ｂ）同様（４－ａ）から拡張したものであると思われる[39]。

（４－ａ）私に子供がある。　（所有対象）
（４－ｂ）私には富士山が見える。　（知覚対象）
（４－ｃ）姉にバイオリンが弾ける。　（能力対象）
（４－ｄ）私にはそのことがとてもうれしかった。　（感情対象）

3.5　格助詞ガの超スキーマ

以上をまとめたものが表２、図８である。格助詞ガは、格助詞ニと同様に、「プロセス性」、「客観性」という２つの把握の仕方によって①プロセス的主体、②プロセス的対象、③非プロセス的主体、④非プロセス的対象という４つの用法があることがわかった。これらのうち①と②は「プロセス的把握における動的な参与者としての用法」、③と④は「非プロセス的、

39　益岡（2000：236-237）では、（３－ａ）のような用法を「物理的位置」、（４－ｂ）～（４－ｄ）のような用法を「抽象的位置」としている。また後者が前者からの拡張的用法であることは、菅井（2002）でも指摘している。

表 2　ガ格の意味用法のまとめ

意味用法	把握の主観性	把握のプロセス性とガ格の意味	
プロセス的主体	客観的把握	プロセス的（動的）	主体的
プロセス的対象	主観的把握	プロセス的（動的）	対象的
非プロセス的主体	客観的把握	非プロセス的（静的）	主体的
非プロセス的対象	主観的把握	非プロセス的（静的）	対象的

存在論的把握における静的な参与者としての用法」と、2 通りの異なる用法にまとめられる。また①「プロセス的主体」や③「非プロセス的主体」は「主体」としての用法であり、②「プロセス的対象」や④「非プロセス的対象」は「対象」としての用法である[40]。また②「プロセス的対象」用法は①「プロセス的主体」用法から、④「非プロセス的対象」用法は③「非プロセス的主体」用法から、認知主体の動機づけが加わること（主観的把握）により派生した拡張的用法である。

このように格助詞ガは意味の異なる 4 つの用法があるが、それらが同じマーカー「ガ」で表されていることを考えると、認知言語学が重視する Bolinger（1977）の「意味と形式の一対一対応」の原則から考えて、何らかの共通のスキーマ（超スキーマ）を仮定しなければならなくなる。菅井（2002）ではこれを「述部内において最も顕著な成分」であるとした。これは本稿の言葉で言えば「表現の対象として scope された部分で、最大の際立ちを与えられた参与者（tr）を表す格」と表すことができる。

4．まとめ

格助詞ガの意味構造についてみてきた。まとめると以下のようになる。

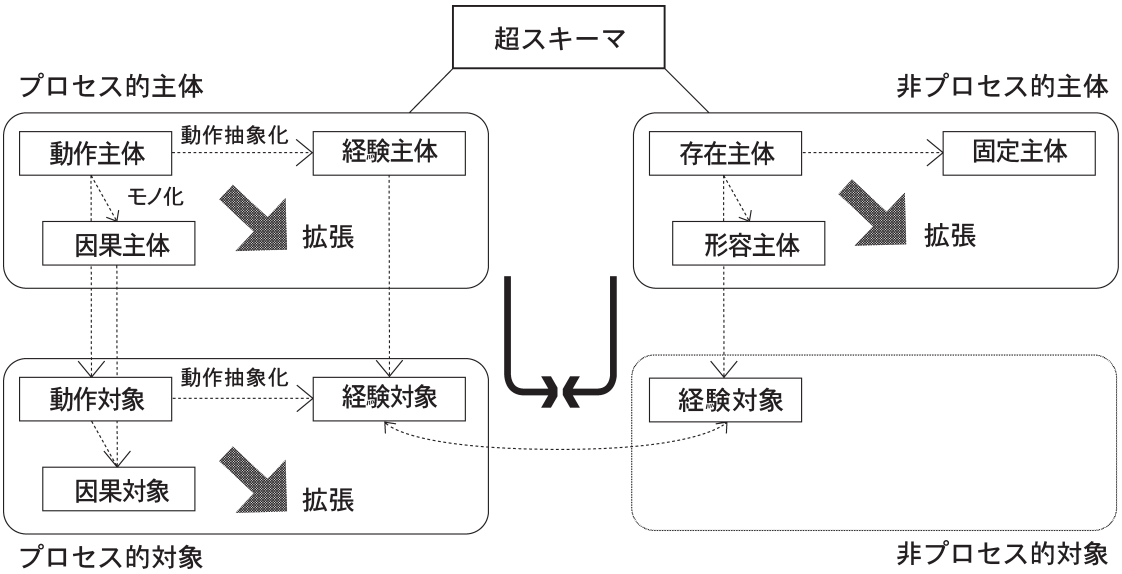
① 格助詞ガはニと同様、「プロセス的把握における動的な参与者としての用法」と「非プロセス的、存在論的把握における静的な参与者としての用法」という 2 通りの用法がある。

② ガの「プロセス的把握における動的な参与者としての用法」には事態をより客観的に把握した「プロセス的主体」の用法と事態をより主観的に把握した「プロセス的対象」の用法とがある。「非プロセス的、存在論的把握における静的な参与者としての用法」も同様に、事態をより客観的に把握した「非プロセス的主体」の用法と、事態をより主観的に把握した「非プロセス的対象」という用法がある。それぞれにおいて後者（主観的把握）は、認知主体の何らかの動機づけにより前者（客観的把握）から派生した拡張的用法である。

③ ガの「プロセス的把握における動的な参与者としての用法」と「非プロセス的、存在論

40　菅井（2002）でもガに「主体」としての用法と「対象」としての用法があることを指摘しているが、本稿の「主体」、「対象」とはやや意味を異にしている。

図 8　ガ格の意味のネットワーク構造



的把握における静的な参与者としての用法」とは、「表現の対象として scope された部分の中で、最大の際立ちを与えられた参与者 (tr) を表す格」であるといった超スキーマにより一つのカテゴリーとしての連帯を保っている。

このような結論は日本語教育にも応用が可能であると思われる。杉村（2002）では格助詞ニ、カラ、ヘ、マデ、デ、トの 6 つの格助詞について、それらの格助詞が共有するスキーマを提示し、「この方法によれば、学習者は格助詞の多様な意味役割を意味的ネットワークで理解できるため、機械的な暗記に比べて記憶に負担がかからなくてすむという利点がある。」（p.39）と、日本語教育へ応用することの意義を主張している。杉村（2002）では格助詞ガは対象に含まれていないものの、ガについてもスキーマの提示はガの意味用法の習得を促進することが期待できる。即ち日本語のガ格には様々な用法を持ち合わせているが、本稿で見たような共通のスキーマやプロトタイプの用法との関連を示してあげることにより、学習者は比較的容易に習得ができるようになると思われる。

最後に主格に関して日本語と英語とを対照してみる。池上（1981）によれば、英語はいわゆる「スル型言語」で、事態を参与者とそれらの関係として、プロセス的に把握し表現する傾向が強いが、日本語は「ナル型言語」で、事態をその場に生起するものとして非プロセス的、存在論的に表現する傾向がある。事態をプロセス的に把握すると、事態は＜動作＞→＜変化＞→＜結果状態＞としてとらえられる（影山　2001）。＜動作＞、＜変化＞、＜結果状態＞は、図 12 では大まかに各々「プロセス的主体」、「プロセス的対象」、「非プロセス的主体」に該当する。したがって英語では「非プロセス的対象」の用法がほとんど存在しない。また

＜結果状態＞に相当するとした「非プロセス的主体」用法は、英語では「プロセス的把握」がなされ、動力連鎖の最終局面が profile されたものとなるので、厳密には「プロセス的対象」の用法の一部となる。つまり英語では「非プロセス的」把握の典型ともいえる「非プロセス的主体」用法ですら、あくまでも「プロセス的把握」の延長線上でとらえられているのである。英語が「スル型言語」だと言われるゆえんである。

一方日本語では、「プロセス的把握」とともに、「非プロセス的、存在論的把握」も多く、よりプロセス的な事態には前者が用いられるが、非プロセス的、存在論的な事態は後者で表現することになる。その結果「プロセス的把握」の最も拡張的な「経験対象」用法は「非プロセス的把握」との境界部に位置し、プロセス的表現も、非プロセス的表現も可能になっている（図 11 参照）。図 12 のＵ字の矢印はそのこと（両把握の周辺的用法で、両表現が可能なこと）を示している。また「非プロセス的、存在論的把握」は、「プロセス的把握」の領域にまで影響を及ぼす（その典型的な例が（２－ｆ）のように、「非プロセス的、存在論的把握」に近い一部の「動作対象」用法である）。それが日本語をしてプロセスの自動詞的（ナル的）表現を多くし、「ナル的言語」としての性格を持たしめていると思われるのである。この主格に関する日英対照研究については紙面の都合で詳述することができないので稿をかえて論ずることにしたい。

格助詞へ・カラ・マデの意味の認知言語学的特徴づけ

森　山　　新（お茶の水女子大学）

本稿では格助詞へ、カラ、マデの意味の特徴づけを認知言語学的観点から行う。

1．格助詞へ

格助詞へはニがプロセス的把握、存在論的把握の双方にて用いられるのとは異なり、プロセス的把握でのみ用いられる。またプロセス的把握の場合にはニはプロトタイプとして目標領域における能動的参与者であることから、本来的にはある参与者（モノ）を表すものであり、そのことから移動の最終局面としての着点を表す。存在論的把握の場合にも最終的に位置づけられる場所を表す。

これに対しへは、移動の最終局面としての着点をスコープ内に含みながらも、それ自体に焦点が当てられておらず、むしろそこに向かうプロセスがプロファイルされている。

したがってへは以下のように特徴づけられる。

へ：プロセス的把握において、移動のプロセスをベースとし、その着点へと向かう経路をプロファイルする。

2．格助詞カラ・マデ

格助詞として用いられるカラ・マデもへと同様、プロセス的把握にのみ用いられる。へがそのプロセス（経路）がプロファイルされるのに対し、カラは起点、マデは着点がプロファイルされている。この３者は移動のプロセスというベースを共有し、プロファイルされる部分のみを異にしている。

カラ・マデ：プロセス的把握で、カラは起点、マデは着点をプロファイルする。

場所を表す格助詞デ・ニの意味・用法の違い

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．はじめに

日本語の格助詞の中でデとニはともに場所を表すものとして、日本語学習者にしばしば混同を引き起こし、以下のような誤りの原因となる。

⑴　＊私は今、仁川で住んでいます。

⑵　＊ゴミはゴミ箱で捨てなければなりません。

⑶　＊大学に日本語を習います。

⑷　＊私の父は貿易会社に働いています。

さらにデとニは以下に示すように相互交換が可能な場合すらあり、学習をさらに困難なものとしている。

⑸　花が咲く　花が咲く　どこに咲く　山に咲く　里に咲く　野にも咲く。(ニはデに交換可能)

⑹　福沢諭吉は下級武士の家で生まれた。(デはニに交換可能)

認知言語学の立場に立てば、言語に表された形式の違いは、何らかの意味の違いが反映されたものと捉えることができる。では場所を表す格助詞のデとニはその意味・用法においてどのような違いがあるのか。本稿では教育的な動機から、格助詞デ・ニの違いについて、特に場所をあらわす用法に焦点を当て、最近の認知言語学の研究成果などをも取り入れながら明らかにしてみたい。

2．先行研究

対象を日本語に限定し、場所を表す格助詞デ･ニの意味･用法の違いについて研究した論文には様々なものがあるが､そのうち認知言語学的な観点からその違いを論じたものとしては、菅井（1997，2001)、中右（1998)、森山（ 2000ａ，2001ａ，2001ｂ）などがある。

まず菅井（1997）ではデ格の意味特性について、認知言語学的な観点からの解明が試みられている。デ格には道具、原因、場所、時間、材料、様態などのさまざまな意味・用法があるが、このうち場所をあらわすデ格については、ニ格との比較の中で分析がなされている。これによると、デ格はガ格やヲ格を空間的に限定し、出入りを許さないが、ニ格はガ格やヲ格を空間的に限定するかどうかは動詞の語彙的意味に依存するものの、主にガ格やヲ格の着点や起点のみを限定することが多いとしている。例えば⑺において場所である「道」が(a)のようにデ格であらわされると、「倒れる」という行為全体が「道」という場所で生起するが、(b)のようにニ格で表された場合には、着点のみが指定されるとしている。

(7) (a) 道で倒れる。

(b) 道に倒れる。

さらに菅井（2001）では菅井（1997）の研究を発展させ、日本語の格助詞の体系化が試みられており、結論として、動詞によって表される事象において「カラ格」「ヲ格」「ニ格」が各々「始まりの部分」「始まりと終わりまでの間」「終わりの部分」をプロファイルするのに対し、「デ格」は「動詞の語彙的意味に変化を被らずに限定するもの」といった範疇化がなされているとして、(8)のような図を提示している。場所を表すデ格の場合では、「主格 NP または対格 NP が「デ格」の場所に存在するという関係が、事象を通じて変化しない」ことであるという。(7)を例にとれば、(a)では省略されている主格ＮＰがデ格の「道」に存在する関係が「倒れる」という事象を通じて変化していない。これは(b)のようにニ格が用いられると、省略されている主格ＮＰがニ格の「道」に存在する関係は「倒れる」という事象を通じて不在から存在へと変化していくのとは対照的である。

菅井の一連の研究（1995，1997，1998，2000，2001）は、日本語の格助詞ニ、デ、ヲ、カラなどについて、豊富な例文を用い綿密な分析がなされている。しかし 2 章で紹介した Langacker を中心として行われてきた認知言語学的観点からの格表示研究との関連については、残念ながら明確に示されているとは言い難い。

(8) 《起点》 → 《過程》 → 《着点》

カラ　　ヲ　　ニ

←――――《限定》――――→

デ

一方中右（1998）では、場所を表す「ニ・デのすみわけ原理」と称してそれらの役割分担が紹介されている。それによればニは「個体」の位置を合図し、典型的に状態・過程・行為などの基本述語動詞に内在的な項（argument）を表示するのに対し、デは「状況（状態、事態、出来事、事象、現象、行為、活動など）」の位置を合図し、典型的に随意的な付加語（adjunct）を表示するとしている。例えば(9)で(a)はニ格、(b)はデ格が用いられているが、位置の項がニ・デのいずれの格表示で合図されるかは、ガ格の項が個体か状況かによって決まり、個体の場合にはニ格、状況の場合にはデ格になると言う。

(9) (a) 本棚に地球儀がある。

(b) 大講堂で卒業式がある。

また述語体系による役割分担を見ると、ニ格は(10)(a)(b)のように、「状態」述語の場合には「位置」を、「過程」述語の場合には「着点」を表す。また「行為」述語の場合には、(c)のように「位置」を表す場合と(d)のように「着点」を表す場合とがあるという。

(10) (a) どの動物園にも象がいる。

(b) 電車が駅に着く。

(c)　子供が壁に穴を開けた。

(d)　太郎が壁に絵をかける。

これに対し一方デ格は随意的な付加語であり、内在的な項によって表された基本状況をまるごと包み込む外側の位置空間を表すとしている。⑾を例にとれば、デ格は「サンマは流れ藻に産卵する」という基本状況をまるごと包み込む位置関係を表すという。

⑾　サンマは沖合で流れ藻に産卵する。

さらに中右（1998）では、場所をあらわすデは⑿に示されるように、時としてデからニへの収束が起きることがある点に注目している。

⑿　(a)　福沢諭吉は下級武士の家で生まれた。

(b)　福沢諭吉は下級武士の家に生まれた。

このような現象は、デによって示されていた位置関係が、当該事態に不可欠な直接参加者として把握される時に起きる「比喩的な認知転換」であるとし、これにより、もとは付随的であった物理的空間を基本状況内に取り込み、全体で一つの緊密一体化した新たな状況を作り出すという。これを中右は「状況内在化」と呼んでいる。⑿を例にとれば、(a)で、デで表示された「下級武士の家」という場所は単に諭吉の出生における偶然的な位置空間をさすにすぎないが、(b)のようにニで表示されると、その「下級武士の家」という実体は当該事態に内在化され、諭吉出生にまつわる不可欠な位置空間として、宿命性や必然性が付与されるという。

中右の主張は認知言語学の観点が生かされ、さらに言語の違いを越えた普遍的モデルの構築がめざされている点で注目に値する。しかし菅井の研究同様、Langacker らの研究との関連が明確になってはいない。また状況内在化とその効果についての言及が感覚的で、やや具体性に欠ける面がないとは言い難い。

一方、森山（2000 a，2001 b）では認知言語学の観点から、格助詞ニとヲの意味・用法に関する分析が行われている。これは、菅井や中右では明らかになっていない Langacker の格表示研究と日本語の格助詞との関係がかなり明確に示されている。日本語のヲ格やニ格は対格や与格に比べ、⒀⒁に示されるような場所や時などの空間的な用法を含んでおり、その用法が広範囲に及んでいる。しかし Langacker で示されている対格や与格の意味・特徴づけはこうしたヲ格やニ格の空間的用法にも、拡張された形で適用することが可能であるとしている。

⒀　(a)　女の人が道を歩いている。(場所)

(b)　思春期を経て大人になる。(時)

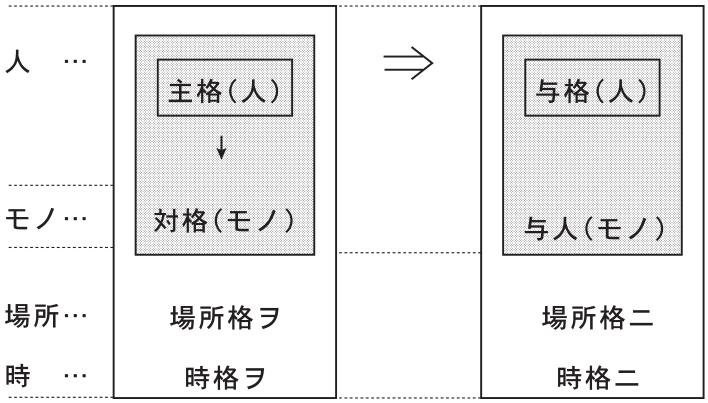
⒁　(a)　先週、私は大阪に小包を送った。(場所)

(b)　私は 8 時に朝ご飯を食べる。(時)

日本語のヲ格、ニ格の意味・用法が図 2 に示されている。これによると対格（ヲ格）は主

格（ガ格）の動力の下流にあり、その影響下に置かれ受動的立場にある。プロトタイプとしてはモノであるが、受動的立場にある人、さらに場所・時などもその拡張として含む。

図 2　日本語のヲ格・ニ格と主格との関係



一方与格（ニ格）は、目標領域に存在する能動的参与者であり、主格という源泉領域の能動的参与者に対峙している。ニ格はプロトタイプとしては能動的な参与が可能な人であるが、モノ、場所、時への拡張を含む。これらモノ、場所、時への拡張において、与格の特性としての能動的参与性は主格に対する非受動性、独立性として表れ、そうした非受動性や独立性は、主格の動作・運動などが向かう「前方に対峙するもの」としての意味を付加するとしている。しかしながら森山（2000 a，2001 b）の認知言語学的分析は格助詞ヲ・ニに限られており、場所のデに関する言及はなされていない。

本稿ではこれらの先行研究をもとに、認知言語学的な観点から格助詞デ・ニの意味・用法とその違いについて考察してみたい。

3．デ格とニ格に対する認知論的考察

前述したように Langacker の一連の研究では、動作連鎖を構成する参与者のプロトタイプ的な意味とその格表示との関係を中心として研究がなされており、日本語のデ格については具格としての用法に限られ、背景としての場所格デについての言及はあまりない。また中右（1998）では場所格としてのデ格は「状況」の位置を合図する随意的な付加語であると指摘されている。

これらのことから言えることは、場所格としてのデ格は前景を構成する動作連鎖の参与者には含まれず、その背景としての Setting を形成する背景格の一つであるということである。

また前景を構成する動作連鎖には図 1 に示されているように、行為者、道具、被影響者をそれぞれ意味役割のプロトタイプとする主格（ガ格）、具格（デ格）、対格（ヲ格）などが含

まれ、さらに経験者を意味役割のプロトタイプとし、新たな動作連鎖の起点となりうる与格（ニ格）も含まれうる。ここで問題となるのは菅井（1997）において、場所を示す用法を含め、デ格が修飾する対象は用言全体というよりは単一の格成分に収斂されるとし、修飾対象となる単一の格成分とは基本的にガ格である（例外的に間接受動文では対格成分が優先的にデ格の修飾対象となる）としている点である。具体的に言えば、例えば⒂でデ格の「ベランダ」に存在するのはガ格の「花子」だけであり、ヲ格の「星」は「ベランダ」に存在するとは言い難いとし、このようなことからデ格の「ベランダ」が修飾するのはガ格だけであると述べている。要するに参与者間の場所的な包含関係をもって修飾関係の是非を問うているわけであるが、修飾関係と包含関係とが同じであるというのは正しくないと思われる。Langacker などの先行研究をもとにした本稿の主張のように、デ格が背景格として存在することを考えれば、デ格の修飾対象は単一の格成分に限るとすべきではなく、主格をはじめ、前景にあって動作連鎖に関与している参与者を格表示した、すべての格を修飾するとすべきであろう。このことを⒂を例に具体的に言えば、デ格で示された「ベランダ」は、ガ格で示された「花子」を起点とし、「星」を着点とした動作連鎖全体に対し、背景の役割を果たし、その意味でデ格は「花子が星を眺めていた」全体を、Setting という面から修飾していると言うべきであろう。

⒂　花子がベランダで星を眺めていた。

一方ニ格は、森山（2000 a，2001 b）によれば主格に対峙する形で存在し、プロトタイプとしては、主格とともに目標領域において新たな動作連鎖の起点となりうる能動的参与者であるとしている。このことからわかるようにニ格はデ格とは異なり、（主格を起点とした動作連鎖には含まれないが）「主格と対峙する形で存在」する「前景の参与者の一つ」をあらわしているということができる[41]。中右（1998）で場所のデ格は「状況」の位置を合図するのに対し、場所のニ格は「個体」の位置を合図すると言っているのは、言いかえればデ格が背景格として存在するのに対し、ニ格は前景の参与者の一つとして、ガ格に対峙するモノ（個体）として存在するということを意味していると言える。もちろん場所を表すニ格はモノではない場合もあるが、図 2 に示されているように、ガ格から独立的、非受動的に存在するという意味で、ガ格に対峙するモノ（個体）の拡張として捉えることは可能であろう。より具体的に言えば、⒑においてニ格の「動物園」「駅」「壁」はそれぞれ前景の参与者の一つとして、ガ格の「象」「電車」「子供」「太郎」といった参与者に対し独立的、非受動的な参与者として対峙しているということである。こうした独立性、非受動性は、Langacker（1991 a）などでも引用されている⒃のような使役文において、使役対象（Causee）をニ格で表すか、ヲ格で表す

41　その意味で、認知主体であり、話し手でもある 1 人称と、それに対峙する形で存在する 2 人称が、それぞれガ格、ニ格の最大のプロトタイプであると言えようが、この点については後に述べることとし、本稿では詳しく述べない。

かの違いを考えてみるとよりいっそうはっきりするであろう。

⑯　太郎が次郎を／に行かせた。

すなわち⑯の使役文は、ヲ格を用いると次郎は完全に太郎の意のもとに置かれた強制的、受動的な意味となり、ニ格を用いると同じ使役文でも次郎自身の意志が考慮された自主的、非受動的な使役となる。ニ格はヲ格と同じく目標領域にありながらも、図２に示されているようにヲ格とは異なり、非受動的、独立的にガ格に対峙しているのである。

４．デ格とニ格の違いについて

最後に、デ格とニ格の違いについて、先行研究に代案を示す形で整理してみたいと思う。

まず中右（1998）では、ニとデのすみわけを説明するにあたって、ニは個体の位置を、デは状況の位置を合図し、ガ格が個体の場合にはニ格が、状況の場合にはデ格が用いられるとしたが、その理由は何なのであろうか。その理由を⑨を例に考えてみたい。

⑨　(a)　本棚に地球儀がある。

　　(b)　大講堂で卒業式がある。

(a)のガ格は「地球儀」という個体であるが、(b)は「卒業式」という状況である。すなわち(a)では「地球儀」と「本棚」はどちらも前景を構成する参与者として存在し、両者はそれぞれガ格とニ格として互いに対峙している。日本語の場合場所を示す格でも、焦点化がなされるとそれらはヲ格またはニ格となって、対格や与格の拡張的な参与者としての資格が付与されるものと思われる。これに対し(b)ではガ格の「卒業式」だけが前景で、「大講堂」はその背景として存在している。ではなぜ(a)の場所「本棚」は前景の一つであるのに、(b)の場所「大講堂」は背景であるのか。それは(a)ではガ格の名詞が個体を示すのに対し、(b)ではガ格は状況を示す名詞となっているためである。ガ格の名詞が（前景の）個体の場合、それに対峙する形で存在するものも（前景の）個体としてとらえられるが、ガ格が状況を示す名詞の場合、その状況名詞は一つの事態が名詞化されたものであり、その中には動作連鎖が含まれていると見ることができるわけである。「卒業式」を例にとって説明すれば、「卒業式」という名詞には、卒業に関する事態が動作連鎖として内包されている。そのことは以下のような文を比べてみれば明らかである。

⑰　(a)　大講堂で卒業式がある。

　　(b)　大講堂で総長が卒業生に卒業証書を授与する。

すなわち(a)では前景が一つの名詞で表現されているが、それは(b)では動作連鎖で表しうる一つの事態によって置きかえられて表現されている。その事態にはガ格、ニ格、ヲ格が含まれている。このように状況を示す名詞はそれ自体に一つの事態、一つの動作連鎖を内包しているために、その場所はもはや前景の参与者として加わる余地はなく、背景となり、デ格で示されるようになるのである。

最後に中右（1998）で主張されている「状況内在化の比喩的転換」とその効果について考えてみたい。「状況内在化の比喩的転換」とは、デによって示されていた位置関係が、当該事態に不可欠な直接参加者として把握される時に起きるもので、これにより、もとは付随的であった物理的空間を基本状況内に取り込み、全体で一つの緊密一体化した新たな状況を作り出すといったものであった。しかし前述したように、Langacker などの先行研究との関連が不明確であると同時に、なぜこのような転換が可能なのか、なぜこうした転換により、偶発的意味合いが宿命的必然性の意味合いへ変化するのかなどがはっきりしていない。

認知言語学的に見れば、「状況内在化」とは背景格から前景格への昇格を意味する。前景と背景との対立は認知的なものであり、認知主体がどこに焦点を当てるかにより可変性を持っている。例えば⒅で「Ｓ大学」は、(a)では場所を示す背景格にすぎないが、(b)では前景格（主格）に昇格している。

⒅ (a)　Ｓ大学では全学生に日本語を教えている。

　　(b)　Ｓ大学は全学生に日本語を教えている。

したがってこうした背景格から前景格への昇格は、認知的に見れば、認知主体が背景として存在していたものに焦点化を行った結果、前景の一つの参与者となったもので、以前は場所格を形成していたが、新たに前景の参与者となったもの（デ格）は、ガ格と対峙し、場所を示すニ格となるのである。背景格として存在していた場合には、主格との関係は間接的で、そこには直接の動作連鎖もないが、焦点化の結果、動作連鎖の参与者となった場合には、ガ格との間になんらかの動作連鎖による結びつきが生まれる。ただしここで「生まれる」というのはどこまでも主観的に連鎖の関係が構成され、認知されるようになったことを意味しているにすぎず、客観的に何らかの変化が生じるわけではない。中右（1998）では、背景と前景との間接性が偶発性として捉えられ、焦点化により新たに認識されるようになった動作連鎖による結びつきを、宿命的必然性と捉えたのである。

最後に菅井（1997，2001）で指摘されているデ格とニ格の違いについて考察する。前述したように菅井（1997，2001）では、デ格はガ格やヲ格を空間的に限定し、出入りを許さないが、ニ格は主にガ格やヲ格の着点や起点のみを限定することが多いとしている。しかしなぜそうなるのかといった理由についての言及はない。

これも前景と背景からなる認知図式を考えれば、その理由は明らかになる。背景は前景の Setting として存在しているので、参与者であるガ格やヲ格はその Setting から外れることはないし、参与者により変化を被ることもない。しかしニ格は図１に示されているように、ガ格と対峙した形でその目標領域に存在するものであり、ガ格やヲ格の着点（時に起点）としての位置を示すようになるので、ガ格やヲ格の着点（または起点）のみを限定するようになるのである。

5．認知論的分析が教えてくれるもの

ここでは最後に、こうした認知的観点を用いて、場所を表す格助詞デ・ニの用法を研究することが、今までの研究と比べ、どこが異なっており、またこうした研究が日本語教師や学習者にどのようなことを教えてくれるのかを考察してみたい。

最初に述べたように、場所を表す格助詞デ・ニは日本語学習にあたって紛らわしく、習得が難しいものの一つである。そのため日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典』、森田良行（1989）『基礎日本語辞典』、酒入他（1991）『外国人が日本語教師によくする100の質問』、寺村他編『ケーススタディ日本文法』など、多くの日本語教育文献や日本語学習教材で、これらの用法の違いを説明している。

その説明は大方において一致している。『日本語教育事典』を例にとってまとめてみると以下のようになる（p.454）。

に：⑴　事物が存在する場所を表す
　　①　彼は食堂にいる。
　　②　机の上に本がある。
　⑵　主体による動作・作用を受けた結果、対象物が存在するようになった場所を表す
　　①　私はそこにごみを捨てた。
　　②　彼は新宿に土地を買った。
　⑶　主体がその動作・作用を行った結果として、存在するようになった場所を表す
　　①　学生たちはいすに腰掛けた。
　　②　彼はあの川に落ちたらしい。
で：⑴　動作・作用が行われる場所を表す
　　①　彼は毎日ここでテニスをする。

ニの⑵⑶の用法は、「移動の到達点を表す」と表現している場合もある。いずれにしても、両者の違いを簡単に言えば、ニ格はガ格の存在場所やガ格やヲ格が存在するようになった場所など、「存在の場所（位置と言ったほうがわかりやすいかもしれない）」を示し、デ格は「動作・作用する場所」を示すということができる。ではなぜ「存在の場所」はニ格で表され、「動作・作用する場所」はデ格で表されるのであろうか。これに対する答えは今までの研究では何ら示されていないが、認知論的観点を導入すれば、以下のように明確にその答えを提示することができると思われる。

上述したようにニ格はガ格などと共に前景の動作連鎖を構成し、ガ格に対峙する形で存在する参与者である。したがってニ格となるのは、プロトタイプとしては場所というより人やモノといった存在物である。それが場所を表すようになるのは厳密に言えばメトニミーとい

う認知の働きの助けによるもので、ニ格それ自体が場所を表すというよりは、ニ格で表された存在物の近接領域に存在するのである。⒆を例に説明すれば、厳密には(a)ではガ格の「彼」はそれに対峙して存在するニ格の「食堂」の内部に存在し、(b)ではガ格の「本」はそれに対峙して存在するニ格の「机の上」に接する形で存在しているのである。両者の違いは、(b)では単に「机」とせず、「机の上」とすることで、「机」のどの近接領域に「本」が存在するのかが明示されている（すなわち「上」が存在する場所の参照点となっている）ことである。(c)ではニ格「新宿」が場所を表しているが、この場合も「新宿」はどこまでも存在物（モノ）の拡張として参与者的にとらえられ、ガ格に対峙していると考えることができる。そして「土地」が存在するようになった場所とは、厳密には存在物としての「新宿」の領域内部ということになる。

このようにニ格が場所を表す場合には、ニ格が参与者であるため、ニ格それ自体が場所を表しているのではなく、メトミニーという認知の働きの助けを借りて、参与者としてのニ格を用いて、同じく参与者であるガ格やヲ格の位置（存在の場所）を示しているのである。

⒆ (a) 彼は食堂にいる。
(b) 机の上に本がある。
(c) 彼は新宿に土地を買った。

これに対し、デ格が表すのは「動作・作用する場所」であるが、これは動作や作用にはある動作連鎖が存在するか、少なくとも認知されており、これは前景を構成しているため、それ（前景を構成する動作連鎖）が行われる場所は、その舞台（Setting）として存在するようになる。その結果場所は、もはやニ格のように前景の動作連鎖を構成する参与者（存在物）としてとらえることは不可能で、どうしても前景をとりまく背景として認知されざるをえない。このようなことから「動作・作用」が行われる場所は背景格としてのデ格によって表されるのである。

6．まとめ

以上、場所をあらわす格助詞デ・ニの意味・用法の違いを認知言語学の観点を取り入れつつ考察してきた。格助詞のデとニは場所を示すという点では共通しているが、デ格は場所をあらわす背景格、ニ格はガ格と対峙した参与者をあらわす前景格である点が異なっており、その違いがこれまで中右や菅井などの先行研究の中で、部分的に論じられてきたわけである。本研究はこれらの研究と Langacker を中心に進められてきた格表示に関する研究との関係を一つにし、認知言語学的に整理したことにその意義があると言える。今後こうした研究をその他の格助詞にまで押し広げながら、日本語格助詞の全体像を認知言語学の視点から明らかにしていきたい。こうした研究は日本語学習者に対し、とかく混乱の対象となりがちな日本語の格助詞教育に関して、何らかの方向性を提示するための基礎研究となりうると考えて

いる。

格助詞ヲ・ニの意味・用法の違い

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．はじめに

日本語の格助詞ヲとニは共に動作など事態の対象を示し、広い意味での目的語を作るという共通点を持っている。一般にヲ格は対格、ニ格は与格と呼ばれることが多い。対格、与格は以下のように定義される。

対格（accusative）：事物が、運動の対象（最も直接にその対象となっているもの）であることを、その事物を表す名詞の語形変化で表わす場合に用いる。(『日本文法大辞典』p.414)

与格（dative）：ある事物が、ある運動のむかう方向に存在する事物（特にある物を与える相手）であることを名詞の語形変化によって表わすような場合に用いる。(『日本文法大辞典』p.892)

この説明を読む限りでは、両者の違いはそれなりにはっきりしているようにも思える。しかし例えば以下の⑴や⑵において、「バイク」は運動の対象であるのか、運動の向かう方向に存在する事物であるのか、はっきりしているとは言い難い。

⑴　息子がバイクに乗っている。

⑵　息子がバイクを乗りまわしている。

また、韓国語では「乗る」に相当する動詞“타다”に共起する格助詞は、ヲ格（을/를）、ニ格（에）の両方が可能である。例えば⑴に相当する韓国語は⑶と⑷が考えられる（もちろん両者の意味や用いうる文脈は微妙に異なっている）。

⑶　우리　아들이　오토바이를　탄다.（ヲ格が共起）

⑷　우리　아들이　오토바이에　탄다.（ニ格が共起）

さらに⑸〜⑿の８つの文を見ると、ヲ格もニ格も、人、モノ、場所、時のいずれもを格とすることが可能なことがわかる。

ヲ格

⑸　彼はボールを投げた。(モノ)

⑹　彼は妹をなぐった。(人)

⑺　女の人が道を歩いている。(場所)

⑻　思春期を経て大人になる。(時)

ニ格

⑼　彼は弟におかしをあげた。(人)

⑽　子供が自転車に乗る。(モノ)

⑾　先週、私は大阪に小包を送った。(場所)

⑿　私は８時に朝ご飯を食べる。(時)

このように見てくると、ヲ格とニ格の間には何らかの意味があるというよりは、言語ごとに、また各動詞とそれに共起する名詞との間に取り交わされた単なる形式的取り決めに過ぎないように見えてくる。

しかし以下のように動詞に共起する格が異なる対の文を比べてみると、両者の間には微妙ではあるかもしれないが、何らかの意味的な違いが生じており、それが使用可能な文脈の選択に制限を加えているように思われる。

⒀　山を登る。　　山に登る。

⒁　進路を悩む。　　進路に悩む。

⒂　娘の結婚を反対する。　娘の結婚に反対する。

⒃　苦痛を耐える。　　苦痛に耐える。

⒄　子供を行かせる。　　子供に行かせる。

本稿では最近の認知言語学的な観点を参考にしながら、これら日本語のヲ格とニ格には意味・用法上の違いはあるのか、あるとすればどのようなものであるのかについて明らかにしてみたい。

２．先行研究

まず英語などを中心に研究が進められている認知言語学の観点を紹介する。英語などにおいては、対格、与格はそれぞれ以下のように直接目的語、間接目的語を作る。

⒅　He gave a present to her.

⒆　He gave her a present.

対格は常に主格と共に前置詞なしの形（無標形）で用いられるが、与格は二重目的構文を除いては、to などの前置詞を伴う(有標形：斜格)。認知言語学の立場では、こうした形式の違いは、何らかの意味の違いを反映していると考えられている（Langacker：1991 a，1991 b)。すなわち無標形で、しかも動詞に最も近い位置に置かれる主格と対格は、動詞が示す事態において特別で直接的な役割を持っていると考える。また前置詞と共に副詞的に用いられる有標形の与格はそれだけ動詞が示す事態との関係性が遠く、間接的だと考える。二重目的構文では与格は前置詞が外され無標となり、しかも動詞の直後（直接目的語より前）に置かれるが、これは直接目的語の受領者、所有者として与格が焦点化され、それだけ動詞の示す事態に対し特別で直接的な関わりを持つようになったという意味上の変化が形式面に表れた

と考える。

このように見ると、対格は与格に比べ、動詞の示す事態に対し、より重要で直接的な参与者であるということになる。

一般に、運動の直接対象が運動と特殊に密接に結びついているものであること、運動のあり方を強く規制するものであること、運動の結果を一番深くこうむるものであることなどの理由で、それを表わす言語形式（＝対格：筆者注）は、動詞と強く結びついて表れたりする（英語などの場合）。(『日本文法大辞典』、p.415)

ところが日本語の場合は、語順が比較的自由であり、動詞の直後にヲ格が来ることも、ニ格が来ることもありうる。しかしながら一般的に言えば、ヲ格（対格）は動詞に近い位置に立つ傾向を示す。

日本語のように語順があまり問題にならない言語でも、(対格は：筆者注)術語になるたけ近い位置に立つ傾向を示したりする（同上)。

このように日本語の場合でも、ヲ格はニ格に比べ、動詞の示す事態により重要で、直接的な参与者であることが形式に反映されている。

Langackerの認知文法によれば、対格（直接目的語）は、事態連鎖のうち、スコープ化された部分の最後尾に位置し、最先端部に位置する主格（主語）と共に事態に直接関係した参与者であると考えられる（図１参照)。

これに対し与格（間接目的語）は、主格から始まり、対格を持って終結する事態連鎖の傍らに存在しながらも、それからは独立して存在すると共に、プロトタイプとしては経験者として新たな事態連鎖の始発点となりうるとしている。そのことが図２に示されている。

主格（行為者）から対格（主題）までが一つの事態連鎖でつながっていること、主格は源泉領域の能動的参与者、対格は目標領域の受動的参与者であること、また与格（経験者）は主格から対格への動作連鎖からは独立しており、目標領域の能動的参与者であることなどが図式的に示されている。

図１　他動詞節の事態連鎖（Langacker（1999：p.360）図８．２）

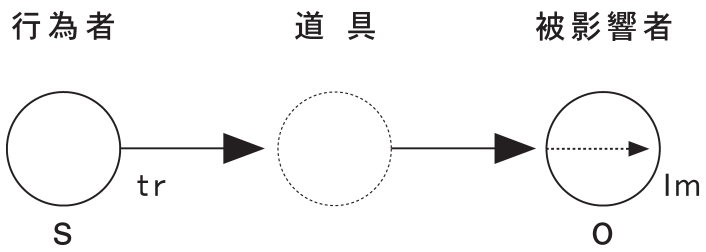
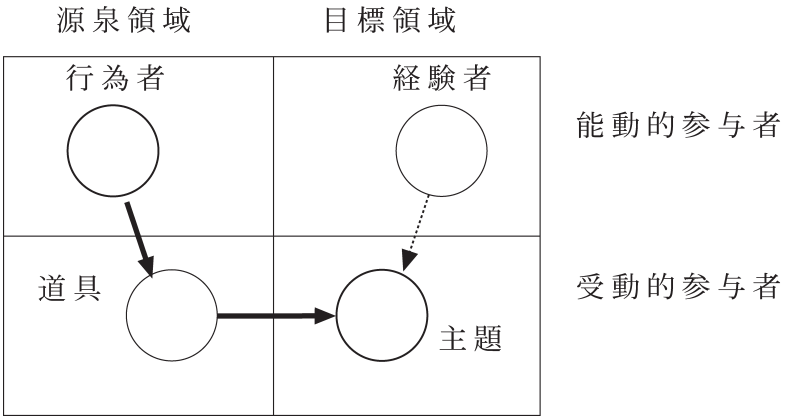


図２　二重目的構文の事態連鎖（Langacker（1999：p.353）図７．５）



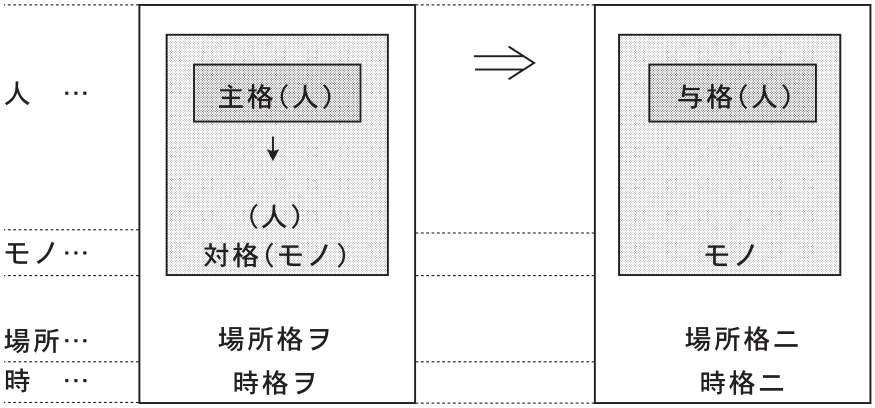
３．日本語のヲ格、ニ格

しかし日本語のヲ格、ニ格はいわゆる対格、与格に比べその使用範囲が広く、上記の⑺や⑻、及び⑾や⑿に見られるように場所格や時格的な用法をも含んでいる。⑺のような場所格ヲは単に主格を源泉とする動力の流れの最下流に位置し、動力を吸収し、何らかの変化（被経験者）や移動（移動者）を被るものではなく、逆に受けた動力を舞台（setting）としてはね返し、主格進行の動力に変化せしめる。また⑻のような時格ヲは⑺のような場所格がメタファー変換されたものとして理解できる。時格ヲは、場所格の場合同様、主格からの動力を舞台（setting）としてはね返し、未来（時間的前方）へ向けての主格の進行の動力として変化せしめる。

一方⑾や⑿のような場所格や時格のニは、プロトタイプの与格が持ち合わせている目標領域の新たな能動的参与者としての役割は持っていない。しかし場所格や時格のヲが事態連鎖の最下流に位置し、主格のもたらす事態の直接の影響下にあるのとは対照的に、場所格や時格のニはそこ（主格のもたらす事態の直接の影響下）からは独立した存在として主格に対峙している。言いかえればこうした目標領域における「独立性」が、目標領域の新たな「能動的参与者」といった意味・役割が拡張したものと考えることができる（図３）。

対格が主格の動力の下流にあり、その影響下に置かれていること、与格は主格が源泉領域の能動的参与者であるのに対し、もう一つの目標領域の能動的参与者であること、また場所格ヲ、時格ヲは対格の拡張であり、場所格ニ、時格ニは与格からの拡張であること、さらには主格や与格のプロトタイプが人であり、対格のプロトタイプはモノであることなどが示されている。また（人→）モノ→場所→時のヲは主格に対し受動的立場に置かれているのに対し、人→モノ→場所→時のニは主格に対し非受動的、独立的立場にあること、それは主格の動作、運動などの向かう前方に対峙している。

図 3　日本語のヲ格、ニ格と主格との関係



このように見てくると、今まで似たようなものとして見えていた格助詞ヲとニの意味・役割の違いがかなり明らかになってきたかと思う。次に今までの分析をもとに、⒀〜⒄で見たようなヲ格、ニ格のいずれもをとることができる動詞節の意味上の違いを明らかにしてみたい。

今までの言及で明らかであるが、主格を中心として見ると、ヲ格で表わされたモノ（さらに場所、時）はすでに主格が始発する動力の影響下に置いて、具体的に動詞が示す働きかけを及ぼす対象として存在している。これに対しニ格で表わされた人（さらにはモノ、場所、時）は、主格が始発する動力の影響下に置いておらず、これから動詞が示す働きかけを及ぼしていこうとする対象として独立して（または離れて）存在している。さらに主格はニ格に対しては自らが始発する動力の影響下に入れることができず、逆に主格自体のほうがニ格のほうへ移動、接近し、その影響下へ入っていくことが求められる場合もあろう。そういったヲ格とニ格の違いが以下の対となる文の意味の違いとなっているのではないだろうか。

⒀　山を登る。　　山に登る。

⒀では、前者は主格で表わされている人がすでに「山」を自らのものとして消化し、「山」を征服し、味わっているといったニュアンスが表れている（文学作品などでヲ格を用いた表現がよく見られるのはこうした理由によるのであろう）。これに対し、後者では「山」は主格に対峙し、主格自身のほうが移動し、接近していくことが要求される存在として独立的に対峙している感がある。このような微妙な意味の違いは、明らかにヲ格とニ格の意味の違いがもたらしたものである。

また⒇の文章では一般にニ格が共起するのが普通であるのに対し、㉑ではヲ格が共起するようになることも同じように説明できる。すなわち、「山」はその全体を主格の影響下に置くのが容易でなく、また「山」の場合には特に山の頂上に焦点が当たりやすく、その意味で主格とは離れて対峙しているのに対し、「山の斜面」は主格の動作の及ぶ範囲に置かれやすいた

めであると考えられる。

⑵では⑳に比べてニ格のみならず、ヲ格の共起が起きやすいが、これも「山」に比べ「丘」はその規模も小さく、主格の動作の対象としてその影響下に置きやすいためであると考えられる。

さらに㉓や㉔ではヲ格が適しているが、これらも㉑と同様、「坂」や「階段」といったものが主格の動作の及ぶ範囲（影響下）に置かれやすいためであると考えられる。

⑳　山に登る。

㉑　山の斜面を登る。

㉒　丘に/を登る。

㉓　坂を登る。

㉔　階段を登る。

⒁〜⒃も同様に考えることができる。⒁の「進路」や⒂の「娘の結婚」を主格の管理下に置かれた問題であると考えるのか、それとも主格の管理の外に置かれた問題であると考えるかが格の選択に影響を及ぼしている。⒃の場合も「苦痛」を主格の下に置かれたものと考えるのか、それとも主格と敵対するものとして「苦痛」を捉えるのかが、格の選択を決定している。

⒁　進路を悩む。　　進路に悩む。

⒂　娘の結婚を反対する。　娘の結婚に反対する。

⒃　苦痛を耐える。　　苦痛に耐える。

冒頭で例に挙げた「バイクに乗る」と「バイクを乗りまわす」の例についても、前者ではバイクが、主格が乗る対象として独立したものとして記述されているためにニ格が共起するのに対し、後者ではバイクはすでに主格である「息子」の征服下に置かれているため、ヲ格が共起するのだと説明できる。

⑴　息子がバイクに乗っている。

⑵　息子がバイクを乗りまわしている。

⒄のような使役文では、一般にヲ格が用いられると強要の意味となり、ニ格が用いられると許容の意味が生じてくる。これも格の選択により「子供」を主格の力の下に置くのか、主格の力とは独立した立場に置くのかが変わってきたものである。「子供を行かせる」はヲ格で表わされた「子供」を自らが発する力の下に置いており、強制となる。これに対し「子供に行かせる」では、あくまでニ格の「子供」は主格からは独立的であり、許容となる。

⒄　子供を行かせる。　　子供に行かせる。

さらに舞台（setting）として用いられている場所格や時格のヲ、ニを比べると、ヲ格はすでに主格の影響下に置かれ、既征服的であるのに対し、ニ格は主格から独立しており、未征服的である。場所格のヲが起点または現在通過している経路を示し、場所格のニは目的地を

示すことや、時格のヲのが過去（事態が起きた時点より前）を示し、時格のニは現在～未来（事態が起きた時点またはその後）を示すといった用法の違いはこのようなニ格とヲ格の意味の違いから説明できるのである。⑺では「道」が経路を示し、⑻では「思春期」が過去の時間的な経路を示している。また⑾の「大阪」は目的地、⑿の「８時」は事態が成立する「その時点」を示している。

ヲ格

⑺　女の人が道を歩いている。(場所)

⑻　思春期を経て大人になる。(時)

ニ格

⑾　先週、私は大阪に小包を送った。(場所)

⑿　私は８時に朝ご飯を食べる。(時)

４．まとめ

以上、最近の認知言語学的な観点を参考にしつつ、日本語の格助詞ヲとニの意味・用法の違いについて分析してきた。ヲ格とニ格とは大まかに言えば対格と与格に相当するが、場所格や時格の用法も持っており、その範囲を越えている。しかしそれらは対格や与格のプロトタイプからの拡張として捉えることが可能であった。

ヲ格はプロトタイプとして、主格を始発点とする事態連鎖の影響下に置かれ、主格からの動力の流れを受け、変化や移動といった影響を被る(被影響者、移動者)。これに対し対格からの拡張としての場所格のヲでは、動力の流れははね返って主格の移動を推進する。その結果場所格のヲは起点または経路の意味を持つ。また時格のヲも同様で動力の流れははね返って主格の移動（時間的前進）を推進するが、それが時格のヲの過去（時間的経路）の意味を持たしめる。

一方ニ格はプロトタイプとして、主格を始発点とする事態連鎖の影響下には置かれておらず、目標領域において新たな事態連鎖の始発点となる。しかしその拡張としての場所格や時格ニでは、能動的参与者としての役割は単に主格からの独立性となり、場所格においては目的地、時格においては現在～未来（事態が起きた時点またはその後）の時制的意味を持つようになった。

本稿ではヲ格とニ格の意味・用法の違いをプロトタイプの場合を中心に概観してきたが、今後取り扱う具体例の範囲をさらに広げることにより、認知言語学的な観点の有用性を確認していくことが必要であろう。

格助詞ニ・へ、ヲ・カラ、ニ・マデ、ヲ・ガの意味・用法の違い

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．ニとへ

前述したように格助詞へはニがプロセス的把握、存在論的把握の双方にて用いられるのとは異なり、プロセス的把握でのみ用いられる。またプロセス的把握の場合にはニはプロトタイプとして目標領域における能動的参与者であることから、本来的にはある参与者（モノ）を表すものであり、そのことから移動の最終局面としての着点を表す。存在論的把握の場合にも最終的に位置づけられる場所を表す。

これに対しへは、移動の最終局面としての着点をスコープ内に含みながらも、それ自体に焦点が当てられておらず、むしろそこに向かうプロセスがプロファイルされている。

したがってへは以下のように特徴づけられる。

へ：プロセス的把握において、移動のプロセスをベースとし、着点よりはそこへと向かう経路をプロファイルする。

またへとニの違いは以下のように表すことができる。

＜へ＞

①　プロセス的把握のみに用いられる。

②　着点よりもそこに至るプロセス（経路）の向かう方向がプロファイルされている。

＜ニ＞

①　プロセス的把握と存在論的把握双方に用いられる。

②　着点がプロファイルされている。

2．ヲとカラ、ニとマデ

格助詞として用いられるカラ・マデもへと同様、プロセス的把握にのみ用いられる。へがそのプロセス（経路）がプロファイルされるのに対し、カラは起点、マデは着点がプロファイルされている。この３者は移動のプロセスというベースを共有し、プロファイルされる部分のみを異にしている。

カラと同様、起点を表す格助詞にはヲがあるが、ヲはプロトタイプとしては目標領域に属する受動的参与者であることから、動作主との動力連鎖をベースとし、その動力連鎖の最下流が起点としてプロファイルされている。これに対し、カラでは動作主（ここでは移動主）との動力連鎖ではなく、移動のプロセスがベースとなり、その起点がプロファイルされてい

る。

またマデと同様、移動の着点を表す格助詞にはニがあるが、プロセス的把握の場合にニはプロトタイプとして目標領域における能動的参与者であることから、やはり動作主との動力連鎖がベースとなり、それに伴う何らかの移動の最終局面である着点がプロファイルされている。これに対し、マデでは動作主（ここでは移動主）との動力連鎖ではなく、移動のプロセスがベースとなり、その着点がプロファイルされている。

このようにカラ・マデは以下のように特徴づけられる。

カラ・マデ：プロセス的把握で、カラは起点、マデは着点をプロファイルする。

またカラ・マデとヲ・ニとの違いは以下のように表すことができる。

＜カラ・マデ＞

① プロセス的把握のみに用いられる。

② 移動のプロセスをベースとしている。

③ その起点や着点がプロファイルされる。

＜ヲ・ニ＞

① ニはプロセス的把握、存在論的把握に用いられる。

② ガ格を起点とした動力連鎖をベースにしている。

③ その起点や着点がプロファイルされている。

カラとヲ、マデとニは、それぞれ似たような意味を有しながらも、背景としてのベースを異にしている。このような違いが具体的な用法の違いを生んでいると考えられる。言いかえれば、ベースやスコープといった背景的な意味が格助詞の特徴づけに関与しており、背景的意味をも取り込んだ認知言語学的な意味観に立つことにより、これらの意味・用法の違いもうまく説明できることがわかる。

3．対象の格助詞ヲとガ

ヲ、ガには共に⒀、⒁のように対象を表す用法がある。

⒀ アイスクリームが食べたい。

⒁ 日本語を勉強したい。

⒀では動作対象に最大の際立ちが与えられ、ガ格で表されている。普通プロセス的事態の把握では、動作対象より動作主に最大の際立ちが与えられるが、この場合には話者＝動作主がスコープから外れ、動作対象に焦点が当てられているのは、事態を動作主も含めて客観的に把握しようという態度ではなく、話者＝動作主が知覚したままを述べる主観的な把握がなされているからである。

これに対し⒁では、動作対象がヲ格で表されている。言いかえればガ格は（省略されてはいるが）スコープ内には含まれていることを意味する。つまり動作主体としての自分を客観的に把握する冷静さを残しているということで、⒀に比べてそれだけ客観的な把握をしていることを意味している。

「～ガ～タイ」が生理的な願望を表すことが多く、「～ヲ～タイ」が理性的な願望を表すことが多いと言われるのは、前者が主観的把握型であり、後者が客観的把握型であるという理由によって説明することが可能である。

また意味が類似している格助詞の用法は、前景的な意味が類似しているだけで、その背景となっているベースが異なっており、このことに着目することでその意味・用法の違いを理解することが可能となることがわかった。

第三部　格助詞の習得過程

語彙習得と認知言語学

森　山　　新（お茶の水女子大学）

１．言語習得理論と語彙習得研究の遅れ

SLA 研究が始まって以来半世紀近くになるが、その中で語彙や意味の研究は遅れがちであった（長友 1999，Lauffer 1990）。その一つの要因に SLA 研究の成立と発展に少なからぬ影響を及ぼし続けてきた Chomsky の生成文法の存在を挙げることができる。生成文法は 1950 年代にそれまでの構造主義言語学や行動主義心理学を鋭く批判する形で登場し、言語学や言語習得研究に多大な影響を及ぼした。これによれば、人間は生得的に「普遍文法（UG）」という言語習得装置を持っているが、この制約を受けつつ獲得されるものは、統語（文法）である（ゆえに言語及びその習得研究の中心は統語論であると考えた）。UG は言語（母語）のインプットを受けながらパラメータを設定していき「核文法」を形成、特定の言語の文法（個別文法）が習得されていく。このプロセスの中で「語彙」は、生得的な「普遍文法」の制約に基づく導きを受けることができず、その結果、個々に学習していかなければならないものであるとされた。この考え方は L 1（母語）習得だけでなく、L 2 習得にも影響を及ぼし、その結果、統語（文法）は規則的であり、科学的な研究の対象に値するが、語彙（意味）は非規則的でとらえどころのないものとして、研究の対象から外れることとなった（Lauffer 1990）。当時 Chomsky の影響が大きかっただけに、言語や習得に関する研究は文法や統語に関する研究が中心となり、語彙や意味の習得研究は立ち遅れることとなった。

これに対し、1960 年代に「生成文法（当時は「標準理論」）」が統語論と意味論との関係に言及を始めて以来、統語論と意味論との関係をめぐり、意見の対立が表面化、いわゆる「言語学戦争」の時代へ突入する。それまでの生成文法の流れを踏襲し、意味論に対する統語論の優位や、統語論の自律性を主張するグループは、意味論として「解釈意味論」を打ち立てたのに対し、意味の重要性に気づいたグループはまず定められるべきは統語構造ではなく意味構造であるとし、「生成意味論」を打ち立て、意味論を言語研究の中心にすえていった。このグループは当時こそ生成文法を凌駕する力を持つまでには至らなかったが、その後も Lakoff や Langacker などを中心として、意味論を中心とした研究が続けられ、認知心理学や脳神経科学などの知見なども取り入れつつ、近年生成文法の代案として「認知言語学」という新しい理論的パラダイムを提示することとなった。

生成文法などの生得的アプローチでは、統語（文法）やその習得に関心が向けられたが、認知言語学のアプローチでは、生得的アプローチが主張する言語能力の「モジュール性」や「自律性」を否定し、言語は認知プロセスに基礎づけられ、認知と言語とは密接な関係があると考える。また、言語にとって最も大切なものは「意味」であり、意味とは、認知する主

体としての人間が自らと環境世界との関わりの中から作り出す「概念」であると考える。そして、意味の習得やそれが言語化された語彙の習得を重視し、生得主義が重視した統語や文法は、スキーマ的な語彙として語彙習得の延長線上にとらえている。また認知言語学にとって言語習得とはカテゴリー化のプロセスと表裏一体のものであり、言語（語彙）とは基本的にカテゴリーに貼られたラベルであると考えるため、語彙習得はプロトタイプ的な意味・用法からその拡張へと進むなど、カテゴリー化のプロセス同様のプロセスで進むと考えている。

2．認知言語学的観点からの格助詞習得

本研究プロジェクトでは認知言語学的観点から、韓国語母語話者の格助詞習得過程を概観し、習得のプロセスに認知的要因や意味的要因が深く関わりあっていることを明らかにした。また格助詞の習得研究の例としてデの習得を取り上げた。いうまでもなく格助詞デは機能語であるが、認知言語学では内容語と機能語は区別しておらず、内容語についても同じように考えることが可能である。

格助詞デの正用から見た習得順序は「場所→道具→様態→原因→時間」の順であり、これはプロトタイプから拡張へ進むカテゴリー化のプロセスと一致している。またそれぞれの用法内では、具体的、客観的な用法から抽象的、主観的な拡張用法へと習得が進むが、これも具体から抽象へ、客観から主観へと進むカテゴリー化のプロセスと一致する。

この他にも最近、Ｌ２習得がプロトタイプから拡張へと進むことを示す研究がいくつか見られている。これらは認知と言語との一体不可分性と言語習得がカテゴリー化のプロセスと基本的には一致することを示している。但しＬ２習得はＬ１習得のように、プロトタイプが言語習得に及ぼす影響は単純ではない点に注意する必要がある。

韓国語母語話者の格助詞の習得過程

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．はじめに

日本語格助詞の習得研究は1990年代を前後し数多く行われてきた[42]。しかしそれらの多くは誤用や助詞の習得順序が分析されているものの、記述的研究の次元を脱しきれておらず、その背景に存在する習得のメカニズムについての分析、考察を行った研究は八木(1998)、森山(2000 b)などごく少数にとどまっている。本研究は認知言語学の知見を参考に、その習得過程の背後に存在するメカニズムを考察することを目的としている。

2．先行研究

上で述べたように日本語の格助詞習得の背景に存在するメカニズムについての分析、考察を行った研究には八木（1998)、森山（2000 b）などがある。前者はGivonなどの機能主義的な観点からの分析であり、後者は認知言語学的観点からの分析である。

八木（1998）では第二言語としての日本語のハとガの習得順序の先行研究をまとめ、その上で学習者の母語、データの種類の違いなどにかかわらず、初級の段階から主題を表すハの習得が主語を表すガの習得に先行するという事実が述べられている。そしてこのような事実は、第二言語習得過程(特に初期)において、主題構文が普遍的に優勢に現れるとするGivon（1979，1995）やFuller and Gundel（1987）の機能主義的観点からの主張が正当であることを示すとしている。

一方、森山(2000 b)では、韓国語母語話者の初級日本語学習者を被験者として動詞習得に関する調査を行い、どのようなプロセスで習得がなされるか、語彙や活用形、共起する格の習得順序などを明らかにするとともに、その習得順序決定のメカニズムについて考察している。それによれば、次に動詞と共起する格助詞は、大まかに図１のような道筋を通って習得されるとしている。

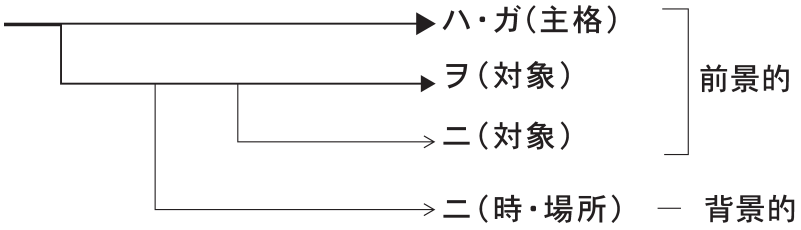
① まず動作主を表すガ・ハ格が動詞に共起する。動詞文のガ、ハの共起の割合は、教科書に出てきた文に動作主としてのガ・ハ格がほとんど共起していないことを考えると異常に高い。

② 次に動作対象を示すヲ格が習得される。対象（人）を表すニ格はあまり習得が進まず、誤りも多い。

③ 続いて時や場所を表すニ格が習得されている。但しこれらは他の助詞に比べ欠如しやす

42　格助詞の習得には小森・坂野（1988)、石田（1991)、Yagi（1992)、久保田（1993)、細川（1993)、猪崎（1995)、井内（1993，1995)、八木（1996，1998)、森山（2000 a）などの先行研究がある。

図１　動詞に共起する格助詞の初期習得過程



い。

その上で、こうした習得のプロセスを認知との関わりから説明をしている。すなわち動作においてもっとも際立ちの高い動作主がまず主格として共起する。日本語においては往々にして主格が省略されるのに反して、この段階では過剰使用の傾向も見られ、学習者動詞に共起する名詞に付加されるすべての格役割がガ･ハで表されるといった現象も見られたという。続いて動作主についで際立ちの高い動作対象が共起されるようになるが、最初の段階では動作主以外のすべての格がヲ格（またはニ格）で表されたり、ヲ格とニ格との正しい分化が遅れたりしている。最後に動作に対しては背景として存在する時や場所を示すニ格に関しては欠如や習得の遅れなどの現象が見られた。このように森山(2000 b)では格の共起と格助詞の習得には認知的な際立ちが影響を及ぼしているとしている。

３．研究の方法

研究のための調査は、2000 年度に韓国の世宗大学校において教養科目として開設された「第二外国語（日本語)」科目（教科書は世宗大学校出版部刊『大学日本語』を使用、授業は１学期当り週３時間×16 週）を受講している学生のうち、高等学校や外国語学院など、以前に日本語学習経験の全くなく、授業の欠席も少ない学生を選抜し、被験者とした。

被験者は１学期調査時（５、６月）は 19 名（１年男８名、女７名、３年女４名)、２学期調査時（10 月以降）は受講者が減少し 12 名（１年男２名、女７名、３年女３名）である。６月中旬から９月中旬までは夏休み及び秋夕連休の関係で調査を行えなかった。１学期の授業（３月～６月）は筆者が担当した。受講者数は 150 名を越えるものであったが、授業の大部分イラストなどを駆使しながら直接法で教えられた。しかし動詞活用など、文法の一部は媒介語を用いて教えられたがそれはわずかで、文法は豊富な文例から帰納的に習得されるようになっていた。２学期（９月～12 月）には被験者が２クラスに分かれ、担当教官も大学のカリキュラム編成のため交替した。また２学期の授業形式は文法訳読法的なものであった。

調査方法は森山（1999）で用いた動詞絵カードの中から、授業で習ったものを予め選び出し、それを１枚ずつ見せながら、その動詞を用いた作文の表出を口頭で求めた。動詞は第１回調査が始まる少し前から授業で教えられた。用いられた動詞は以下の 49 種類である。

帰る、行く、見る、起きる、寝る、食べる、できる、出る、教える、来る、する、会う、乗る、入る、習う、吸う、待つ、聞く、遊ぶ、読む、飲む、歩く、飼う、働く、休む、勤める、洗う、言う、置く、書く、咲く、死ぬ、住む、座る、着く、作る、飛ぶ、撮る、泣く、なる、脱ぐ、話す、降る、磨く、持つ、呼ぶ、切る、降りる、捨てる

また今回の調査対象となった助詞は、主題を表すハ、及び格助詞ガ、ヲ、ニ、デ、カラ、マデ、ト、ノなどであるが、これらは第1回目調査の時点で全て既習している。

調査は5回（5月下旬、6月上旬、10月初旬、10月中旬、11月下旬)、被験者に1名ずつ研究室に来てもらい実施した(但し、3回目の調査では4名の学生が調査に欠席した)。調査後、どこがどのように間違ったかについて10〜15分程度のインタラクションを行った。

データのうち格助詞が用いられているものを集め、それらを正用、誤用に分けた。以下では1節において正用データをもとに格助詞の習得のプロセスについて考察する。続いて2節では誤用データをもとに習得のプロセスについて分析を加える。

4．結果と考察

4.1　動詞に共起する格助詞習得のプロセス

全体で1234の文が表出された。表1は他動詞文、自動詞文のそれぞれにおいて正しく共起した格や助詞の種類とその表出数の推移を1回から5回までの調査ごとにまとめたものである。ここで動作の対象を表すヲ（対格)、ニ（与格)、ガなどはまとめて対象格としてまとめている。表出された文のうち助詞が正しく用いられた文は962、助詞の誤りを含む文は272であった。

また表2は、他動詞、自動詞に共起した格の数と共起した助詞の内訳をまとめたものである。表中「対wo」とは「対象格のヲ」を示し、右の数字は正用の表出数を示している。

表1、2から格助詞の習得プロセスに関して以下のようなことがわかる。

まず他動詞文、自動詞文いずれにおいても、主格のハ[43]の習得が主格のガに比べて早いことが見て取れる。これは八木（1998）の分析結果とも合致するものである。すなわち第二言語習得過程(特に初期)において、主題構文が普遍的に優勢に現れるとするGivon(1979，1995)やFuller and Gundel（1987）の機能主義的観点からの主張の正当性がここでも立証されている。

次に他動詞文では、大まかに言って、まず対格ヲが、続いて主格のハ、ガが多く共起している。森山(2000 b)では他動詞文、自動詞文の区別なく分析が行われ、主格ハ→対格ヲと習得が進むとしているが、他動詞文のみを分けて分析すると、むしろ対格ヲ→主格ハと習得が進むと考えるべきであろう。このことは特に表2を見ると明らかである。表2では、他動詞に助詞が一つだけ共起する場合には、対格ヲが圧倒的に多い（320）ことを示す一方、ハが最

43　本来ハは格助詞ではないが、ハで示された名詞句が主格である場合のハを主格のハと表すことにする。

表１　正しく共起した格や助詞の種類とその表出数の推移

格	助詞	他動詞文						自動詞文					
		1	2	3	4	5	計	1	2	3	4	5	計
主格	ハ	14	29	18	30	41	132	19	35	25	47	59	185
	ガ	0	0	2	1	10	13	0	7	2	8	46	63
対象格	ヲ	13	103	44	117	178	455	0	0	0	0	0	0
	ニ	0	0	0	0	2	2	0	7	10	15	21	53
	ガ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	8	10
場所格	ニ	0	0	1	0	3	4	9	27	18	30	40	124
	デ	2	0	0	2	3	7	0	0	2	4	4	10
	ヲ	0	0	0	0	0	0	0	5	1	9	7	22
	カラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	マデ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
時格	ニ	0	0	0	0	0	0	12	27	13	27	25	104
	ニハ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3
	ハ	0	1	0	0	4	5	0	0	1	3	3	7
	x	0	1	0	5	7	13	3	1	4	13	15	36
	カラ	0	1	0	1	1	3	0	0	0	0	0	0
	マデ	0	1	0	1	1	3	0	0	0	0	0	0
具格	デ	1	4	0	4	2	11	1	2	0	4	2	9
並列	ト	0	0	0	0	2	2	0	4	2	3	8	17
Total		30	140	65	161	254	650	44	123	79	177	246	669

初に共起することは少なく⑭、むしろハはヲ格に続いてヲ格と共に動詞に共起することが多い⑭ことを示している。

森山（2000 b）では、格助詞の習得が主格ハ→対格ヲと進むことから、これを「認知的際立ち」の高さから説明していた。すなわち認知言語学によれば、無標の状態では、認知主体（人間）は動作主を動作対象よりも高い際立ちを持ったものとして認知する。従って動作対象を表す対格よりも、動作主を表す主格のほうが習得が早まるとした。しかし主格ハより対格ヲがまず共起していることは、格助詞の表出や習得が「認知的際立ち」だけでは説明できないことを示している。ではどのような説明が可能であろうか。他動詞的事態の場合には、動詞で表された動作に対し最も必要度の高い参与者は、主格で表された動作主ではなく、対格で表された動作対象である。その点から考えると、動詞に共起する格助詞の習得はむしろ「動詞の意味」に強く支配されて進んでいく可能性を示唆している。

表 2　他・自動詞に共起した格の数と助詞の内訳（正用の表出数）

Vt	共起した助詞 1 個		共起した助詞 2 個		共起した助詞 3 個	
共起する助詞	対 wo	320	主 wa＋対 wo	94	主 wa＋対 wo＋所 ni	2
	主 wa	14	主 ga＋対 wo	7	主 wa＋対 wo＋具 de	2
	所 de	4	対 wo＋時 wa	5	対 wo＋時 x ＋具 de	2
	主 ga	3	対 wo＋時 x	4		
	具 de	3	対 wo＋具 de	4		
	その他	2	その他	9		
Vi	共起した助詞 1 個		共起した助詞 2 個		共起した助詞 3 個	
共起する助詞	所 ni	70	主 wa＋所 ni	40	主 wa＋所 ni＋時 x	4
	時 ni	60	主 wa＋時 ni	30	主 wa＋時 x ＋時 ni	3
	主 ga	57	主 wa＋対 ni	14	主 wa＋所 he＋時 x	2
	対 ni	32	主 wa＋対 ga	8	主 wa＋対 ni＋時 x	2
	主 wa	23	時 x ＋時 ni	6	その他	4
	その他	59	その他	33		

一方自動詞文の場合には表 1 を見ると主格（ハ）の共起が始まり、続いて場所や時、対象を表すニ格の共起へと進むことがわかる[44]。また表 2 を見ると、動詞に最初に共起する格に主格ガも多いことがわかる。しかしガは表 1 を見ると第 5 回に集中しており[45]、動詞に共起する早さはそれほど早いとは言いがたい。ということは自動詞の場合、動詞への共起に伴う格助詞の習得は主格ハ→場所格・時格・与格を表すニ格→主格ガという形で進んでいくといえる。ニ格では場所格、時格、与格が共起しているが、これは移動動詞には場所格、動作動詞には時格、授受・伝達動詞には与格というように、ここでも「動詞の意味」に強く支配されて格助詞が表出されていることがわかる。またニ格の共起は表 1 、 2 を見る限り、場所格・時格→与格の順に進むと言えるが、これは「認知的際立ち」の高さからは説明できない。

さらに自・他動詞文いずれの場合にも、主格や対格、与格の表出が先行する一方で、その他の格の表出は時のニ格を除いて遅れている。この点については、森山(2000 b)のように「認

44　但し表 2 を見ると、最初に動詞に共起する助詞はハより場所や時のニのほうが多くなっており、動詞との共起という意味では、ハより場所や時のニのほうが早い可能性もある。このことは、自動詞文の場合、主格ハの共起が先行するものの、意味的に場所や時のニ格の共起を必要とするような場合には、ハの共起よりニの共起が先行すると考えることができる。例えば移動動詞のような場合には、場所のニ格の共起が優先される。時のニ格の共起については後述する。このような点でも格助詞の習得は「認知的際立ち」ではなく、「動詞の意味」に支配されて進む可能性を示している。

45　第 5 回目にガが急増したのは、降ル、死ヌ、咲クなどガ格を主語にとりやすい動詞の使用が増えたこと、主語の省略が少なくなったこと、それまで「私」が多かった主語が多様化し、眼前の状況描写型の表現が増えたことなどによるものであろう。

知的際立ち」の観点からも、以下のように説明が可能である。すなわち人間はある事態をとらえる際に、事態の一部をプロファイル（profile）して前景化し、その他の部分はそのベース（base）として背景化される。前景は、無標の場合、動作主や動作対象など、動詞が表す動力連鎖の参与者であり、それらは普通主格、対格、与格などで表される。一方前景以外の部分（背景）はデなどの格助詞で表される。このようなことから、主格、対格、与格の習得が早いのは、認知主体によって注意を向けられ、プロファイルされやすく、その結果際立ちの高い前景として認知されているためであると解釈することが可能である。しかしこれらの参与者は意味役割の上で、動詞が表す事態に重要な役割を果たしているため、動詞との共起が促進され、習得が進むと考えることも可能である。

このように考えてみると、格助詞の習得プロセスを決定する要因としては、以下の２つを考えることができる。

① 意味的要因：動詞が表す動作に対し、格が持つ意味的な重要性

② 認知的際立ち：認知主体によって、どの程度プロファイルされ、際立ちをもって認知されるか（特に事態の中で前景として認知されるか、背景として認知されるか）

しかしプロセス全体を一貫性を持って説明できるのは、以下に示すように「認知的際立ち」よりは「意味的要因」であるといえる（この点では森山（2000 b）とは見解を異にしている）。

両者は表裏一体の関係にある。なぜなら意味役割の重要性が認知主体の注意を引きつけ、その結果「認知的際立ち」を高くする原因ともなっているからである。しかし厳密に見ていくと両者は食い違うこともある。例えば「認知的際立ち」としては動力連鎖の起点としての動作主は着点としての被動作主よりも高い際立ちが与えられるが、「意味的要因」としては、動詞で表された動作との意味的な関わりは、目的語となる被動作主のほうが主語となる動作主よりも密接に関わりあっている。他動詞文で対格の習得が主格に先行することは、「認知的際立ち」より「意味的要因」の影響が大きいことを示唆している。また自動詞文では前景格である与格より、背景格である場所格ニの習得が早いが、これも「認知的際立ち」では説明ができず、学習初期の重要語句の移動動詞（行く、来る、帰るなど）や存在動詞（住む）などにおいて場所が共起しやすいこと、言いかえれば動詞が表す動作に対する意味的重要度が高いためであると考えられる。このように、格助詞の習得は「認知的際立ち」よりは「意味的要因」、すなわち動詞が表す動作に対する意味的な重要性に支配されて進むと考えるほうが妥当であるといえる。

但し、これら２つの観点では、自動詞文で時格ニの習得が与格のニよりも早いことが説明できない。なぜなら時格は背景格であるので、その習得は前景格より遅くなるはずであるし、また共起する動詞に対し時格ニが与格ニよりも意味的重要性が高いとも言いがたいからである。時格ニの習得が早いことについては、いくつかの原因を考えることができる。第一に、時を表す格助詞が他になく、習得しやすいこと、第二に、授業で学習した「起きる」、「寝る」

などは意味的に時間との関わりが強く、時のニ格が共起しやすいこと（実際に調査で用いられた「起きる」、「寝る」の絵カードの中には時計が描かれている）、第三に、動詞が初出した９課は「私の一日」が話題として扱われ、「～時に～する」という表現がたくさん用いられていること、などがその要因であろう。このうち第二の要因は、「意味的要因」である。

3.2　格助詞の誤りとそのメカニズム

3.2.1　格助詞の誤りとその原因

次に格助詞習得過程を誤りのデータをもとに分析する。表３は格助詞の誤りの種類と数の

表３　格助詞の誤りの種類と数の推移（誤り数の合計が２以下は省略した）

	誤り（正→誤）	1	2	3	4	5	計	誤用例	原因
1	対 ga →対 wo	1	8	4	9	8	30	英語をできる	1 a、2 b
2	対 ni →対 wo		6	3	8	5	22	友達を会う、バスを乗る	1 a、2 b
3	所 wo →所 ni	2	3	3	7	5	20	家に出る、道に歩く	2 b
4	対 wo →主 wa		17		1	1	19	パンは食べる	2 a
5	所 de →所 ni		2	3	5	7	17	家に夕ご飯を食べる	2 b
6	対 wo →対 ni		4		5	5	14	友達に待つ、ラジオに聞く	2 b
7	時 ni →時 x	2	5		4	2	13	12 時、寝る	2 b、4
8	主 wa →主 x					13	13	私、洗った	4
9	対 wo →主 ga	7	1	1	1		10	私はテレビが見る	2 a
10	並 to →対 ni		2	1	6	1	10	友達に遊ぶ	3
11	所 ni →所 de	2	2	1		5	10	会社で勤める	2 b
12	所 kara →所 de	1	2	1	2	5	11	家で出る	1 b、3
13	主 ga →対 ni		3	1	3	1	8	バスに来る、日本語にできる	3
14	主 ga →対 wo		1		3	3	7	バスを来る、雨を降る	2 a
15	主 ga →主 wa		4		1	1	6	バスは来る、日本語はできる	2 b
16	主 wa →対 wo			5	1		6	私を雑誌を読む	2 a
17	所 ni →所 wo		2	1	2		5	家を帰る	2 b
18	時 ni →時 he	1	3			1	5	12 時へ寝る	1 c
19	並 to →主 wa					4	4	友達は話す	1 c
20	時 x →時 ni		1	1	1	1	4	朝に起きる、昨日に会う	1 a、2 b
21	並 to →対 wo		1		1	1	3	友達を遊ぶ	2 a、 3
22	対 ni →主 ga		1	1		1	3	友達が会う、タクシーが乗る	2 a
23	所 kara →所 ni		1	1		1	3	学校に帰る、家に出る	2 b、3
24	所 ni →所 x	1	1	1			3	おふろ入る、学校行く、家帰る	4
25	所 wo →所 he	1	2				3	家へ出る	2 b、3

注１）　主：主格、対：対象格、所：場所格、時：時格、具：具格、並：並列格、有：所有格
注２）　原因欄は考えられる原因を示す。「１ａ」は、３．２節の原因（１ａ）を表している。

推移をまとめたものである。例えば表中誤りの（1）は、対象格のガをヲとしてしまった誤りで、1回目に1回、2回目に8回、3回目に4回、4回目に9回、5回目に8回、合計30回の誤りが発生したことを示している。右端の原因は、誤りの原因を示している。これを見ると誤りにはいくつかの原因の類型が考えられる。

＜1＞　母語の負の転移によるもの

（1ａ）　動詞に共起する格が母語と目標言語で異なるもの

表3(1)のように、母語ではヲ格が共起する動詞に日本語ではガ格が共起するもの、(2)のように母語ではヲ格が共起する動詞に日本語ではニ格が共起するものなどがこれである。但しこれらの誤りは、表にも示したが韓国語母語話者以外の第二言語習得過程にも見られることから、その原因の全てを母語に帰することはできないことはいうまでもない。

（1ｂ）　格助詞の用法の一部が母語と目標言語で異なるもの

韓国語の「에서」は「動作の場所」を表す用法と「起点」を表す用法があるが、これに似た日本語のデには、前者の意味はあるが、後者の意味はない。また韓国語の「(이) 랑」は「名詞を列挙」する用法と「同伴」を表す用法とがあるが、日本語のヤは前者の用法はある（例：本やノートがある。）ものの、後者の用法はない（例：＊友達や遊ぶ)。このように格助詞の用法の一部が異なっているために誤りが生じることがある。

（1ｃ）意味的、音声的な類似性が混同を引き起こしたもの

韓国語「에［e］」と日本語「へ［e］」は発音も意味も似ており、学習者はそれらを混同したり、学習方略として同一視して記憶したりする。また韓国語「와[wa]」と日本語「ハ[wa]」とは、意味は異なっているが発音が似ており、それが誤りを誘発している。

＜2＞　意味役割のカテゴリー分化が不十分なために起こるもの

（2ａ）　過剰般化が起こるもの

動詞を習得する中で、それまでの名詞文や形容詞文には用いられない対象格ヲ、ニが習得され始めるが、最初、名詞句を主格と対象格に使い分けることがうまくいかず、主格の対象格への過剰般化が起きる。その他主格から時格・場所格への過剰般化も起きている。これら過剰般化は、「対象格･場所格→主格」といった一部の逆過剰般化を除き、概して主格→対象格→時格・場所格と、前景から背景の方向へなされている。

（2ｂ）　類似の意味役割のカテゴリー分化が不十分で起こるもの

主格のハ・ガ、場所格のニ・デ・ヲ、対象格のヲ・ニ・ガ、時格のニ・ｘ（無助詞）同士の間で、意味的、運用的な分化が不十分なために起きるものである。また＜1＞で母語の転移によるとしたものも、類似した意味役割のカテゴリー分化が不十分なため誤りが生じた可能性がある。

＜３＞　「名詞＋助詞」のユニット形成が誤りを引き起こしたもの

学習初期においては言語運用に際して、名詞の持つ意味と格助詞の持つ（未だ曖昧な）意味役割が相互に引き合ったり、名詞と格助詞がセットで用いられたりすることが習慣化し、学習者は「名詞＋助詞」というユニットを形成させてしまうことがしばしばある（野田他2001）。例えば場所名詞と場所の格助詞とのユニット形成がこれにあたる。

＜４＞　機能語の脱落が起こったもの

学習初期には、内容語に比べ機能語の脱落が起こりやすい。

3.2.2　誤り発生のメカニズム

以上、格助詞の誤りをその原因により分類した。第二言語習得にあたっては、新たな言語体系の再構築と共に、母語習得時に形成されたスキーマやカテゴリーなどの認知体系を第二言語に合ったものに再構築しなければならない。前節で見た様々な誤りはそうした認知体系再構築の過程において生じたものと考えられる。ここでは誤りの生じるメカニズムについて、認知言語学的観点を取り入れつつ明らかにしてみたい。

例えば（１ａ）の場合として「＊友達を会う。」を考えてみよう。これは母語では他動的な関係スキーマが用いられて表現されていたものが、目標言語では対象格ニを伴う自動的な関係スキーマでとらえられているものである。従ってこうした認知的なスキーマの違いが学習者をして誤りを起こさせるのである(認知的スキーマと誤りとの関係は森山(2001ｃ、2002ｂ)を参照)。

次に（１ｂ）の場合として「＊家で出る。」を考えてみよう。認知言語学によれば、格助詞はプロトタイプ（prototype）的な意味を中心とした多義のネットワーク構造を持っている。一般に韓国語「에서」と日本語デは似た意味を持つと考えられているが、厳密にいうと両者はプロトタイプの意味が似ていたり、ネットワーク構造に重なりが多いというだけのことに過ぎない。従って「에서」の意味のネットワーク構造がデの使用の中で無意識に借用された場合、デの意味領域にない起点の意味などにデが用いられ、その結果、こうした誤りが起こると考えられる。

（１ｃ）の場合はどうか。認知言語学では言語習得を、言語が慣習的に持っている音声と意味の連合の単位を覚えること（慣習化）としてとらえている。しかし母語と目標言語の間に同じ音や意味を持つものがあると、音声と意味との連合の慣習化に混同が生じ、その結果母語の「에」や「와」の意味のネットワーク構造が無意識に第二言語の「へ」や「は」へ転用されることになるのであろう。

次に⑵の誤りについて考えたい。学習者は動詞が表す動作に関係する名詞を共起させる必要があるが、その際、その意味役割を示すマーカーをつけることを慣習化しなければならな

い。この際主格は、それまでの名詞文や形容詞文、さらにはイル・アル動詞文の学習で使い慣れており、表出にさほど困難を感じないが、対格（ヲ）や与格（ニ）は、動詞の習得と共に新たに習得されなければならない。さらに事態をとりまく背景としての時や場所、道具なども言語的に表現する方法を知り、慣習化する必要がある。従ってその過程においては、既習のものから未習のものへ過剰般化が起きやすいであろう。また言語表現は習得に伴い、重要度の高い前景から、重要度の低い背景へと表現範囲が拡大していく。故に格の過剰般化も前景的な格から背景的な格へなされると思われる（逆過剰般化は、量的にも少なく、それが正に習得される時点を前後して一時的に見られる現象であろう）。

同時に類似のカテゴリー間の区切り方も、場所格で見たように、母語と目標言語とでは異なる。従って学習者は第二言語習得の中で、目標言語に慣習化されたカテゴリーの区切り方を新たに学んだり調整を加えたりしたのちに慣習化させる必要がある。しかし初期学習者は（２ｂ）のように同類のカテゴリー間で混同が起きたり、⑶のように同じ意味を持つ名詞と格助詞が意味的に吸引しあったり、練習の中で共起が習慣化しユニットを形成してしまったりする。

最後に⑷の機能語の脱落だが、内容語は具体的意味を持ち、認知的にも際立っているが、格助詞のような機能語の意味は抽象的で、認知的な際立ちが低い。機能語が内容語に比べ、脱落しやすいのはこうした認知的な際立ちの低さが原因であろう。

以上、母語のスキーマやカテゴリー構造の転用、カテゴリー形成過程で生じる異なるカテゴリー間の過剰般化や同類のカテゴリー間の混同、機能語の認知的際立ちの低さなど、認知的要因にも誤りの原因を求めうることが示唆された。

４．おわりに

本研究を通じて、わかったことは以下のようになる。

１）先行研究と同じく主題のハは主語のガより先に習得される。これは機能主義的アプローチである Givon らの「主題構文の普遍的卓越」という考えを支持するものである。

２）格助詞の習得過程には、「意味的要因」、すなわち動詞が表す動作に対し、格が持つ意味的な重要性が深く関与し、その決定要因となっている可能性が高い。

３）格助詞の誤りには母語の影響を受けたものと母語の影響のないものとがある。前者には母語のスキーマやカテゴリー構造の転用などがあり、後者にはカテゴリー形成過程で生じる異なるカテゴリー間の過剰般化や同類のカテゴリー間の混同、機能語の認知的際立ちの低さなどがあり、どちらも「認知的要因」が誤りの原因となっている。

本稿では認知言語学的観点を用い、格助詞習得のプロセスや誤りの発生に意味的要因や認知的要因が深く関わっていることを示したものである。しかし本稿のように、認知言語学的観点から習得順序や誤りのプロセスを分析した研究は少なく、本研究だけから習得過程に意

味的要因や認知的要因が深く関与していると断言することは危険で、今後もこうした研究をさらに積み重ねていく必要があろう。

多義語としての格助詞デの習得過程

森　山　　新（お茶の水女子大学）

1．はじめに

認知言語学では多義語の意味構造に関し、個々の意味は核となるプロトタイプ的な意味から動機づけられて拡張したものであり、その結果プロトタイプを中心とした放射状カテゴリー構造を持つとしている。また習得については原則としてプロトタイプ的用法の習得が早く、順次その拡張的用法へと習得が進むとしている。本研究はまず、多義語としての格助詞デを取り上げ、その様々な意味・用法がどのようなプロセスで習得されていくかを明らかにし、その上でこの習得のプロセスが、認知言語学で主張する「プロトタイプを中心とした意味の放射状カテゴリー構造」と密接な関係があることを示していく（認知言語学では機能語も内容語と同様、意味を持つという立場をとる）。

2．先行研究

格助詞デの研究は数多く存在するが、格助詞の意味・用法を整理する一環としてデの意味・用法を整理したもの（国立国語研究所　1951 など）や、他の格助詞との間で意味・用法を比較したもの（岡部 2000 など）がほとんどである。また第二言語としての日本語（JSL）における格助詞デの習得に関する研究は、他の格助詞との間の習得順序について研究したものはかなり存在するが（井内 1993、久保田 1994 など）、多義語としてのデが持つ様々な意味・用法の習得プロセスについて実証的に研究したものはあまり見あたらない（但し八木（1996）では、格助詞デの「手段」「動作の場所」「数量限定」の 3 つ意味カテゴリーの正用順序が言及されている）。

一方、認知言語学の観点からデの多義について触れたものとしては、菅井（1997，2001）、間淵（2000）、杉村（2002）、森山（2002 a，2004 c）などがある。但しこれらは、デの様々な意味・用法の習得プロセスについては論じられていない。

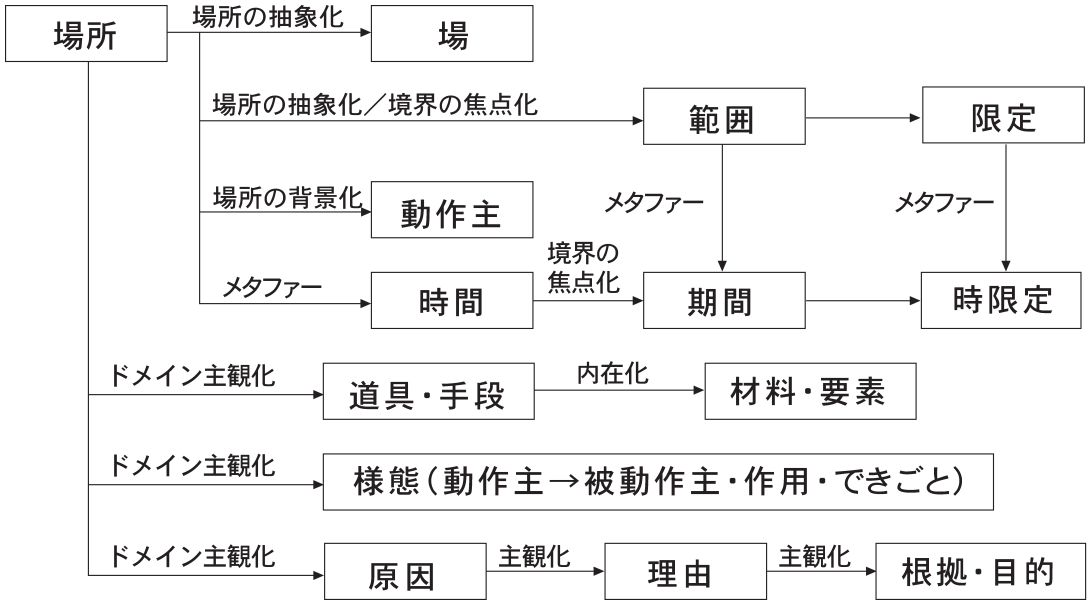
森山（2004 c）では、格助詞デの放射状カテゴリー構造が具体的に示されている（図 1）。

3．研究方法

KY コーパスを用い、レベルごとのデの意味用法の使用（正用）実態について調べ、その習得のプロセスを考察した。

本研究では習得順序のプロセスを明らかにするにあたり、implicational scaling の結果とともに、正用の出現順序やその使用頻度を用いている。それは本研究が認知言語学的な観点からの習得研究であることによる。認知言語学では言語習得を、語彙（意味）の習得という

図１　格助詞デの放射状カテゴリー構造（森山　2004ｃ）



側面から見つめ、言語習得のプロセスが学習者の脳内で展開されるカテゴリー化のプロセスと表裏一体のものであると考えている。即ち語彙が意味的に正用されているということを、正しいカテゴリー化の反映として捉える。

４．格助詞デの多義構造

まず、これまで辞書や学習書、研究において、デの様々な意味・用法がどのように分類されてきたかを見てみたい（表１）。

これを見るとデの意味用法の分類にはかなりの相違点が存在することがわかる。

表１の結果をふまえデの意味・用法を分類してみると以下のようになる。

①　＜道具＞：道具、手段、材料、媒体、構成要素
②　＜原因＞：原因、理由、根拠、動機
③　＜場所＞：場所、場（抽象的場所、場面）
④　＜様態＞：動作主・対象の様態、作用・できごとの状態
⑤　＜限定＞：数量限定、期間、時限定、範囲
⑥　＜時間＞：時間
⑦　＜動作主＞：動作主、動作集団

このカテゴリー分類を認知言語学的に再検討してみると、まず＜動作主＞用法や＜限定＞用法の「範囲」「数量限定」は、＜場所＞用法の派生的な用法と考えることができる。また＜時間＞のカテゴリーも「時間」のほか、＜限定＞用法の「期間」「時限定」も含めることができ

表1　これまでの格助詞デの意味用法の分類のまとめ

<table>
<tr><th>日本語教育事典</th><th>日本文法辞典</th><th>新明解国語</th><th>例文問題シリーズ</th><th>日本語文法</th><th>間淵（2000）</th></tr>
<tr><td>道具・方法</td><td>手段</td><td>方法・手段</td><td>道具・手段</td><td>道具・手段</td><td>道具・手段</td></tr>
<tr><td>材料</td><td>材料</td><td>材料</td><td>原材料・媒体</td><td>材料</td><td>原料・材料・構成要素</td></tr>
<tr><td>原因</td><td>原因・理由・根拠</td><td>原因・理由</td><td>原因・理由</td><td>原因</td><td>原因・理由・根拠・動機</td></tr>
<tr><td>場所</td><td>場所・場面</td><td>場所・場面</td><td>場所</td><td>具体的場所</td><td>場所・抽象的空間・場面</td></tr>
<tr><td>状態</td><td>状態</td><td rowspan="3">状態</td><td>状態</td><td>様態</td><td>様態・状態</td></tr>
<tr><td rowspan="2">主体の量的限定</td><td>範囲</td><td>範囲・限定</td><td>範囲</td><td>範囲限定</td></tr>
<tr><td>限度</td><td>数限定・区切り</td><td>限度</td><td>限定</td></tr>
<tr><td>時間</td><td>期限</td><td></td><td></td><td>期間の限定</td></tr>
<tr><td></td><td>時期（では）</td><td>時点(では)</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>動作主</td><td>動作組織・団体</td><td>動作主</td><td>動作集団</td><td>動作主</td><td>動作主</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>遠慮・謙遜</td><td></td><td>その他</td></tr>
</table>

る。但し＜時間＞用法はいずれも、＜場所＞用法のさらなる派生形(場所が時間へメタファー的に写像され理解されたもの）と考えることもできる。

以上より、デのカテゴリーは以下のように分類できる。

＜道具＞：道具、手段、材料、媒体、構成要素

「日本語で話す。(道具)」「地下鉄で来る。(手段)」「竹でできた筆箱。(材料)」「テレビでやっていた映画。(媒体)」「日本の位置づけという題目で論文を書く。(構成要素)」

＜原因＞：原因、理由、根拠、目的・動機

「風邪で休む。(原因)」「その点でおもしろいと思う。(理由)」「私の記憶では確かです。(根拠)」「出張で大阪に行く。(目的・動機)」

＜場所＞：場所（具体的場所)、場（抽象的場所)、数量限定、範囲、動作主

「日本で経済を学ぶ。(場所)」「貧しい環境で育つ。(場)」「3本で100円です。(数量限定)」「日本で一番高い山は富士山だ。(範囲)」「それは警察で捜査している。(動作主)」

＜時間＞：時間、期間、時限定

「食事のあとで勉強をします。(時間)」「経済が発展していく中でそのようになった。(期間)」「7時で図書館が閉まります。(時限定)」

＜様態＞：動作主・対象の様態、作用・できごとの状態

「一人で住んでいます。(動作主の様態)」「第二外国語で日本語を教えている。(動作対象の様態)」「急スピードで発展している。(作用・できごとの状態)」

5．結果

5.1　デの正用分布（図２）

①　学習者の母語、学習レベルに関わらず、<場所>の正用は最も多い。

②　正用から見た習得順序は「場所→道具→様態→原因→時間」の順である。これは正用があったものを１、１回以下のものを０としたimplicational　scalingの結果とも一致する（Coefficient of Reproducibility>0.90、Coefficient of Scalability>0.60）。

図２　デの正用比率の変化

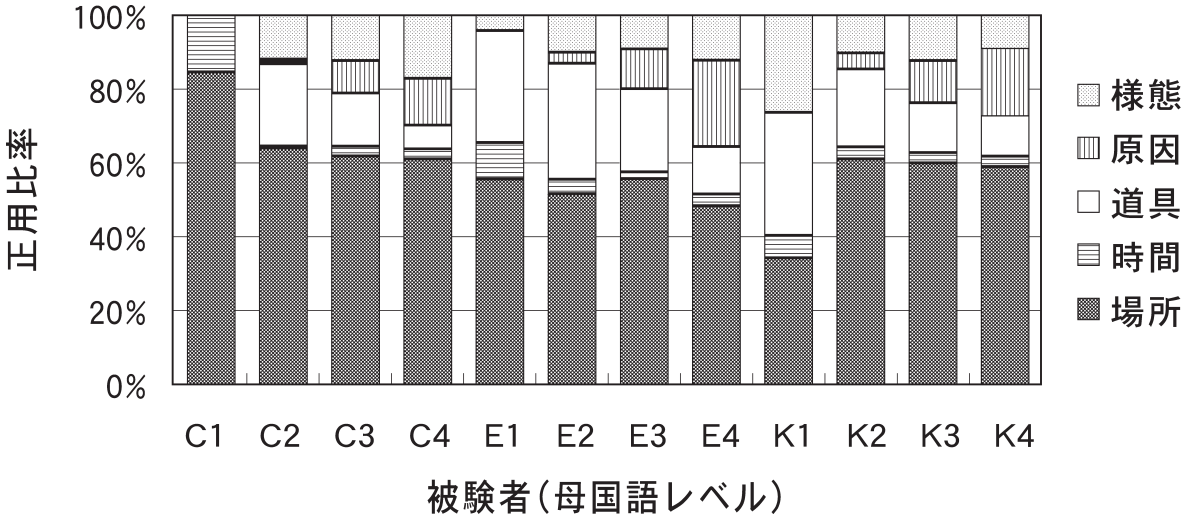


表３　各母語別、及び全体のImplicational Scalingの結果

	中国語	英語	韓国語	全体
Coefficient of Reproducibility	0.920	0.912	0.920	0.924
Coefficient of Scalability	0.775	0.707	0.657	0.722

5.2　用法別の正用分布（図２～６）

用法別に見るとimplicational scalingからは明らかな習得順序を見出すことができなかったため、正用の出現順序やその使用頻度から大まかな習得のプロセスを推測してみる。

①　各用法内では、具体的、客観的な用法から抽象的、主観的な拡張用法へと使用が進む。具体的には、大まかに<場所>では「場所→場・範囲・限定→動作主」、<道具>では「手段・道具→材料・媒体・構成要素」、<原因>では「原因→理由・根拠・目的」と進む。こ

図 3　デの場所用法の正用比率の変化

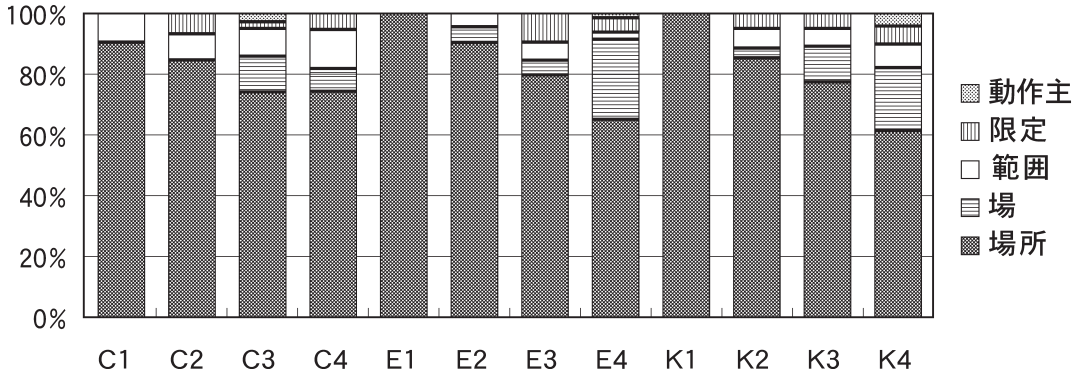


図 4　デの道具用法の正用比率の変化

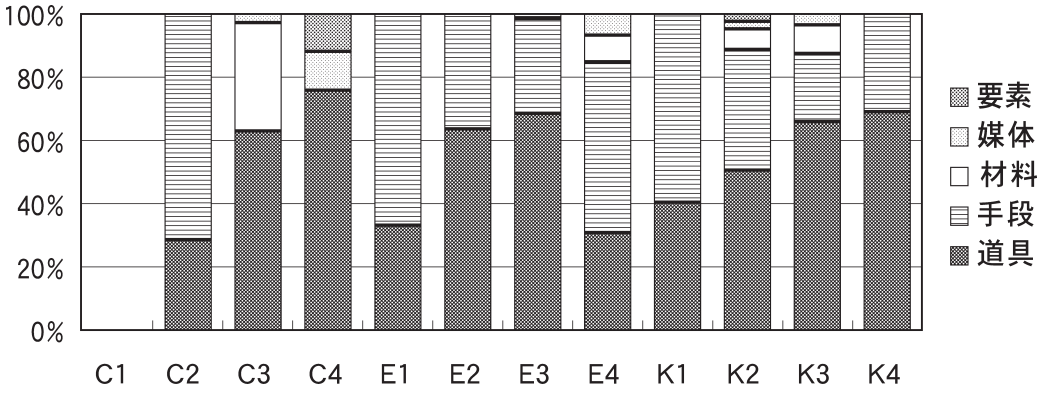


図 5　デの原因用法の正用比率の変化

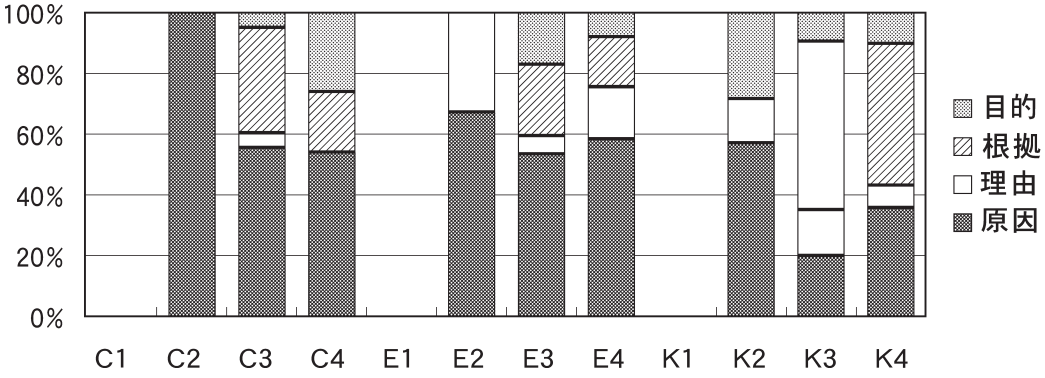


図 6　デの様態用法の正用比率の変化

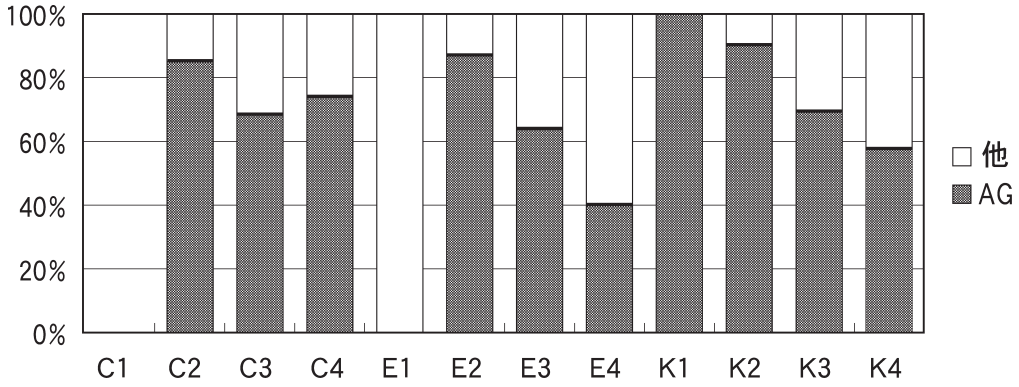
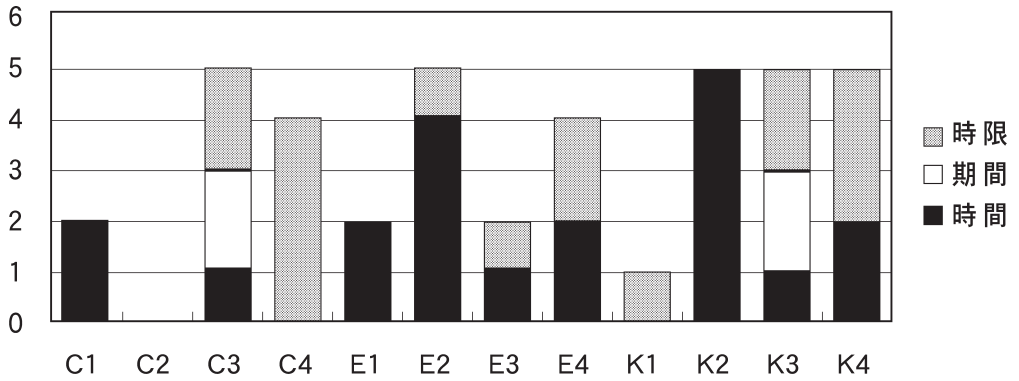


図 7　デの時間用法の正用頻度の変化



れは用法の具体性、客観性の高さが習得順序に影響を及ぼしている可能性を示唆している。

② ＜時間＞の用法も「場所」とともに正用の出現は早いがその使用は限られており、限定的な意味の加わった拡張用法である「期間」、「時限定」の正用は遅れる。

6．考察

以上のような結果から次のようなことがわかった。

① 習得順序は「場所→道具→様態→原因→時間」である。この結果は場所格がプロトタイプであり、通時的に見て「場所格→様態格・手段格→動作主格・原因格」と派生が進んだとする間淵（2000）などの先行研究、さらに習得はプロトタイプからその拡張へ進むとする認知言語学の主張と合致している。

② 各用法内では具体的、客観的な用法から抽象的、主観的な拡張用法へと使用が進んでいるようである。これは具体的、客観的な用法は認知が容易であり、かつ使用も頻繁に行われることが、定着を促進するものと推測され、用法の具体性や客観性の高さが習得順序に影響を及ぼしている可能性を示唆している。またカテゴリー化が具体的、客観的な用法か

ら拡張により抽象的、主観的な用法が拡張し、習得もその方向で進むとする認知言語学的な主張とも一致している。

この他＜時間＞の用法の使用が遅れる（５－２②）のは、デが＜場所＞という「空間的用法」をプロトタイプとし、「時間的用法」はそこからのメタファー的拡張により生じた派生的な用法に過ぎないと考えられるため、その使用が限られているためだと判断される。

このように見てくると、第二言語としての日本語の習得において、多義語デの習得過程は認知言語学的観点により、少なくとも矛盾なく説明できることがわかる。

最後にこれまでの先行研究との比較から、本研究の成果を整理すると以下のようになる。

① これまでの格助詞の習得研究は、様々な格助詞「間」の習得順序を研究するものがほとんどであったが、本研究は格助詞「内」の様々な意味・用法、すなわち多義の習得プロセスを明らかにしている。

② これまでの習得研究は、「文法の習得」という意味から、主に文法形態素や構文の習得過程が研究されてきたが、本研究は「語彙（意味）の習得」を取り扱い、カテゴリー形成という観点から多義語の意味の習得がどのように行われるかについて考察している。

③ これまでの習得研究は、「(自然の) 習得順序 (acquisition order)」や「発達順序 (developmental sequence)」を確認する諸研究に代表されるように、生得的要因によって説明されることが多かったが、本研究では特別に生得的なメカニズムを仮定することはせず、認知との関わりの中で習得のプロセスを説明している。

これら３点は相互に関連しあっている。第二言語習得研究は Chomsky の登場が一つの契機となって始まった面があり、そのため言語習得に何らかの規則性や普遍性が見出された場合、それを生得的な要因に帰結させることが多かった。また仮定されている生得的な言語習得装置が文法 (統語) 的なものであったため、習得研究は文法や統語面に偏りがちであった。反面、語彙の習得はこうした生得的習得装置の助けを借りることなく一つ一つ学習するものと考えられてきたため、今日に至るまで語彙の習得研究は遅れがちであった。

認知言語学の観点を用いた第二言語習得研究は始まったばかりである。認知言語学は言語習得に様々な観点を提示してくれていると思われるが、残念ながらそれを実証的に検証した研究はまだ決して多くない。その意味でこうした研究がさらに積み重ねられ、今まで研究の遅れがちであった語彙（意味）習得やそのメカニズムが明らかにされていくことが期待される。

The Acquisition Process of the Japanese Case Particle *de* as a Polysemy: Cognitive Linguistics Perspective

The purpose of the study is to show that the acquisition process of the various meanings of the Japanese case particle *de* as a second language. Furthermore, the relation between the semantic structure centering on the prototypical usage and its acquisition based on the standpoint of cognitive linguistics was discussed.

The following findings were observed.

1. The acquisition order shifts from "location>instrument>manner>cause>time".
2. In each usage, the acquisition process moves from very specific and objective usages to abstract and subjective ones. Precisely, it originates from "specific location> abstract location, range, limitation>agent" regard to the usage of location. As for the usage of instrument, it derives from "means, instrument>material, medium, composition". And regarding the usage of cause, it shifts from "cause>reason, ground, purpose".
3. As for the usage of time, which is used less, the usage of "period" and "fixed time" are revealed later on.
4. Regarding the usage of manner, "manner of agent" is revealed first, then, it shifts to "manner of patient", "manner of action or event".

These results clearly support the view of cognitive linguistics. It claims that the acquisition progresses spread out from the prototypical usage to the extensive ones, from very specific and objective usages to more abstract, subjective, or metaphorical ones. Besides this, it derives from more prominent to less prominent ones.

参考文献

Bolinger, D. (1977). Meaning and form. London: Longman.

Dewell, R. B. (1994). Over again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis. *Cognitive Linguistics* 5: 351-380.

Dowty, David R. (1991). Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67: 547-619.

Fuller, J. and J. Gundel (1987) The resolution of conflicts among competing systems: a bidirectional perspective. Applied Psycholinguistics. 8: 329-350.

Givon, T.(1979) On Understanding Grammar. NY: Academic Press.

Givon, T.(1995) Functionalism and Grammar. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Hatch, E. and Lazaraton, A. (1991). *Design and statistics for applied linguistics: the research manual*.

Ijaz, I. H. (1986) Linguistics and cognitive determinants of lexical acquisition in a second language. *Language Learning* 36-4.

Laufer, B. (1990) Why are some words more difficult than others? *International Review of Applied Linguistic in Language Teaching* 28-4.

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press, Chicago.

Langacker, R. W. (1991 a). *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford University Press.

Langacker, R. W. (1991 b). *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Bases of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruiter.

Langacker, R. W. (2000). *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.

Norvig, P. & G. Lakoff. (1987). Taking: A Study in Lexical Network Theory. *BLS* 13: 195-206.

Shirai, Y. (1995). The Acquisition of the basic verb PUT by Japanese EFL Learners: Prototype and Transfer.『語学教育研究論叢』12：61-92.

Yagi, K.(1992)The Accuracy Order of Japanese Particles.『世界の日本語教育』2：57-67.

赤羽根義章（1987）「格助詞『に』と『で』について：文法指導の観点から」『日本語学』第6巻・第5号、82－94.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』、大修館書店.

池上嘉彦（1993）「＜移動＞のスキーマと＜行為＞のスキーマ：日本語の「ヲ格＋移動動詞」構造の類型論的考察」『東京大学教養学部外国語科紀要』41－３：34-53.
池上嘉彦（2000）『日本語論への招待』 講談社.
石田敏子（1991）「フランス語話者の日本語習得過程」『日本語教育』75：64－77.
井内麻矢子（1993）「初級日本語学習者を対象とした助詞の縦断的習得研究」お茶の水女子大学人文科学研究科日本言語文化専攻修士論文.
井内麻矢子（1995）「初級日本語学習者による助詞「は」・「が」・「を」の習得過程」『言語文化と日本語教育』９：246－256.
猪崎保子（1995）「中国人日本語学習者にみられる助詞の習得について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』21：15－27.
今井むつみ（1993）「外国語学習者の語彙学習における問題点：意味表象の見地から」『教育心理学研究』41：243－253.
岡部寛（2000）「格助詞の使い分け」『京都橘女子大学研究紀要』26：85－115.
影山太郎編（2001）『日英対照 動詞の意味と構文』、大修館書店.
河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』、研究社出版.
金谷武洋（2003）『日本語文法の謎を解く：「ある」日本語と「する」英語』東京：ちくま新書.
北川千里、鎌田修、井口厚夫（1995）『外国人のための日本語例文・問題シリーズ７　助詞』、荒竹出版.
国広哲弥（1986）「意味論入門」『言語』15－12：194－202.
久保田美子（1994）「第２言語としての日本語の縦断的習得研究－格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について－」『日本語教育』82：72－85、日本語教育学会.
国立国語研究所（1951）『国立国語研究所報告３　現代語の助詞・助動詞：用法と実例』、秀英出版.
小森早江子、坂野永理（1988）「集団テストによる初級文法の習得について」『日本語教育』65：126－128.
財団法人日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典』、大修館書店.
城田俊（1993）「文法格と副詞格」仁田義雄（編）『日本語の格をめぐって』67－94、くろしお出版.
菅井三実（1995）「対格の意味特性に関する覚書」『日本語論究Ⅳ・言語の変容』67－94、和泉書院.
菅井三実（1997）「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127（文学43）：23－40.
菅井三実（1998）「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」『名古屋大学文学部研究論集』

130（文学 44 抜粋）：15－29.
菅井三実（1999）「日本語における空間の対格表示について」『名古屋大学文学部研究論集』133（文学 45 抜粋）：75－91.
菅井三実（2000）「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第 20 巻第 2 分冊：13－24.
菅井三実（2001 a）「現代日本語の「ニ格」に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要』第 21 巻第 2 分冊：13－23.
菅井三実（2001 b）「現代日本語における格の暫定的体系化」『言語表現研究』17：109－119、兵庫教育大学言語表現学会.
菅井三実（2002）「構文スキーマによる格助詞「が」の分析と基本文型の放射状範疇化」『世界の日本語教育』12：175－191、国際交流基金.
杉村泰（2002）「イメージで教える日本語の格助詞」『言語文化研究叢書』1 ：39－55、名大言語文化部・国際言語文化研究科.
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』、くろしお出版.
中右実（1998）「空間と存在の構図」中右実・西村義樹著『日英語比較選書 5 ・構文と事象構造』 8 －54、研究社出版.
長友和彦（1999）「第二言語としての日本語の習得研究」『第 2 言語としての日本語の習得に関する総合的研究（平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金研究（基盤研究（A）（1）課題番号 08308019）成果報告書）』、 9 －41.
西村義樹（2000）「対照研究への認知言語学的アプローチ」坂原茂編『認知言語学の発展』145－166、ひつじ書房.
仁田義雄（1995）「格助詞のゆらぎ」『言語』第 24 巻・第 11 号、20－27、大修館書店.
野田尚史、迫田久美子、渋谷勝己、小林典子（2001）『日本語学習者の文法習得』、大修館書店.
細川英雄（1993）「留学生日本語作文における格関係表示の誤用について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 5 ：70－89.
堀川智也（1988）「格助詞「ニ」の意味についての一考察」『東京大学言語学論集』88：321－333.
益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』、くろしお出版.
益岡隆志、田窪行則（1987）『日本語文法セルフマスターシリーズ 3 格助詞』、くろしお出版.
松村明編（1971）『日本文法大辞典』、明示書院.
間淵洋子（2000）「格助詞『で』の意味拡張に関する一考察」『国語学』51－ 1 ：15－30、国語学会.
森山新（1999）「認知的観点から見た第二言語習得に関する実験的研究」、同徳女子大学校大

学院日語日文学科日本語教育専攻博士学位論文.
森山新（2000 a）「認知的観点から見たヲ格とニ格の意味・用法の違い」『日本語教育研究』4：19－29、日語教育研究会.
森山新（2000 b）「韓国人日本語学習者の学習初期の動詞習得過程」『日本学報』45：85－102.
森山新（2000 c）『認知と第二言語習得』、図書出版啓明.
森山新（2001 a）「認知的観点から見た場所を表す格助詞デ・ニの意味・用法の違い」『日本学報』49：95－106、韓国日本学会.
森山新（2001 b）「認知的観点から見た格助詞ヲ、ニの意味のネットワーク」『日本語教育研究』2：9－56、韓国日語教育学会.
森山新（2001 c）「中間言語の化石化と第二言語習得のメカニズム」『世界の日本語教育』11：55－68.
森山新（2002 a）「認知的観点から見た格助詞デの意味構造」『日本語教育』115：1－10、日本語教育学会.
森山新（2002 b）「認知的観点から見た中間言語発達に関する実験的研究」『総合的日本語教育を求めて』、146－168、国書刊行会.
森山新（2003 a）「認知的観点から見た格助詞ニの意味構造」『Foreign Language Education』10－1：229-243、韓国外国語教育学会.
森山新（2003 b）「認知的観点から見た格助詞ヲの意味構造」『台湾日本語文学報』18：291－311、台湾日本語文学会.
森山新（2003 c）「語彙習得研究と認知言語学：多義語としての格助詞習得を中心として」『第 14 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』18－23、第二言語習得研究会.
森山新（2004 a）「格助詞ガの意味構造についての認知言語学的考察」『お茶の水女子大学人文科学紀要』57：51－66.
森山新（2004 b）「認知主体の把握の仕方と格助詞ニの多義構造について：認知言語学的観点から」『日本学報』59：89－102、韓国日本学会.
森山新（2004 c）「格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得との関係」『日本認知言語学会論文集』4：66－75、日本認知言語学会.
森山新（2004 d）「格助詞ニの意味構造についての認知言語学的考察」『日本認知言語学会第5回記念大会 CONFERENCE HANDBOOK 2004』5－8、日本認知言語学会.
森山新（2004 e）「語彙習得と認知言語学」『第二言語としての日本語の習得研究』7：257－258.
森山新（2005 a）「韓国語母語話者の格助詞習得に関する認知言語学的研究」『同日語文学研究』20：105－116.
森山新（2005 b）「日本語の格に対する体系的特徴づけ：認知言語学的観点から」『日本エド

ワード・サピア協会研究年報』19（印刷中）
森山新(2005 c)「格助詞ニの意味構造についての認知言語学的考察」『日本認知言語学会論文集』 5 （印刷中）
八木公子（1996）「初級学習者の作文に見られる日本語の助詞の正用順序：助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に」『世界の日本語教育』 6 ：65－81、国際交流基金.
八木公子（1998）「中間言語における主題の普遍的卓越－「は」と「が」の習得研究からの考察－」『第二言語としての日本語の習得研究』 2 ：57－67.
山口明穂、秋本守英編（2001）『日本文法大辞典』、明治書院.
山田忠雄、見坊豪紀、金田一春彦、柴田武、金田一京助編(1988)『新明解国語辞典(第三版)』、三省堂.
山梨正明（1993)「格の複合スキーマモデル：格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」、仁田義雄編『日本語の格をめぐって』39－66、くろしお出版.

認知言語学的観点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程
平成 14〜16 年度科学研究費補助金研究　基盤研究(C)（2）
研究成果報告書　課題番号 14510615
研究組織　研究代表者　森山　新（お茶の水女子大学）　研究分担者　長友和彦（宮崎大学）
研究経費　平成 14 年度　900 千円　　平成 15 年度　700 千円　　平成 16 年度　800 千円

2005 年 3 月 31 日発行
著　者　森　山　　新
発　行　お茶の水女子大学　森山　新 研究室
〒 112-8610　東京都文京区大塚 2 ー 1 ー 1　お茶の水女子大学国際教育センター
TEL/FAX　03-5978-5691
E-mail　morishin@cc.ocha.ac.jp
URL　http://jsl.li.ocha.ac.jp/morishin 1003/
印　刷　よしみ工産㈱

Scientific Research C(2)
Allocation between Monbu Kagakusho and JSPS for Grants-in-Aid for Scientific Research
2002-2004

MORIYAMA,Shin
(OCHANOMIZU UNIVERSITY)

ENGLISH INDEX

I. Introduction

1. Introduction to this research project
2. Langacker's view of case

II. The semantic structures of Japanese case particles

3. Systematic characterization of Japanese cases
4. The semantic structure of the case particle *de*
5. The relationship between the semantic structure of the Japanese case particle *de* and its acquisition
6. The semantic structure of the case particle *wo*
7. The relationship between cognitive perspectives and the polysemic structure of the Japanese case particle *ni*
8. The semantic structure of the case particle *ni*
9. The semantic structure of the case particle *ga*
10. The characterization of the Japanese case particles *e, kara, made*
11. The different semantic usages of the case particles *de* and *ni*
12. The different semantic usages of the case particles *wo* and *ni*
13. The different semantic usages of the case particles *ni* and *e*, *wo* and *kara*, *ni* and *made*, *wo* and *ga*

III. The acquisition process of Japanese case particles

14. Vocabulary acquisition and cognitive linguistics
15. The acquisition process of Japanese case particles by Korean native speakers
16. The acquisition process of the Japanese case particle *de* as a polysemy

References